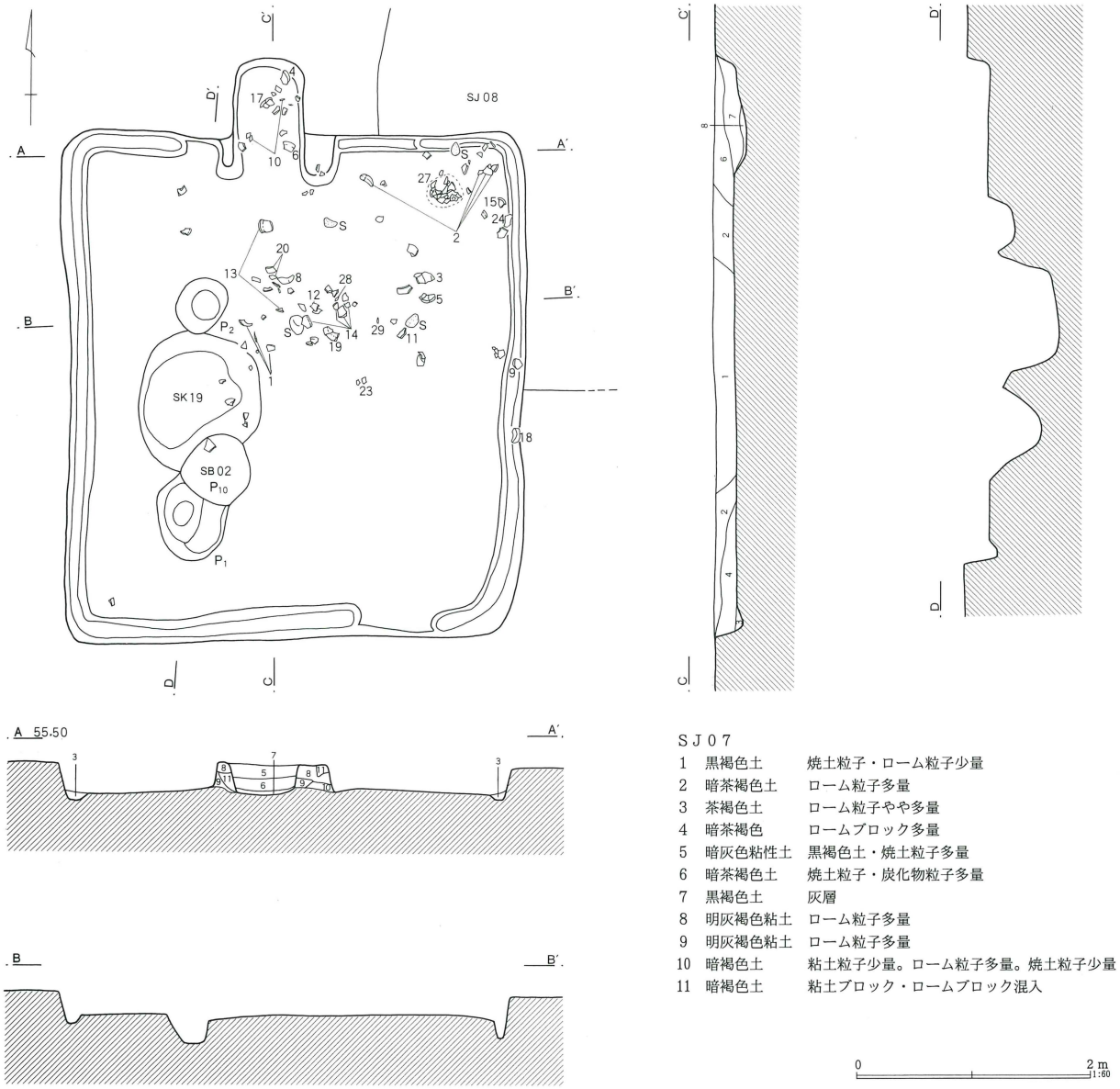
第24図　A区第７号住居跡



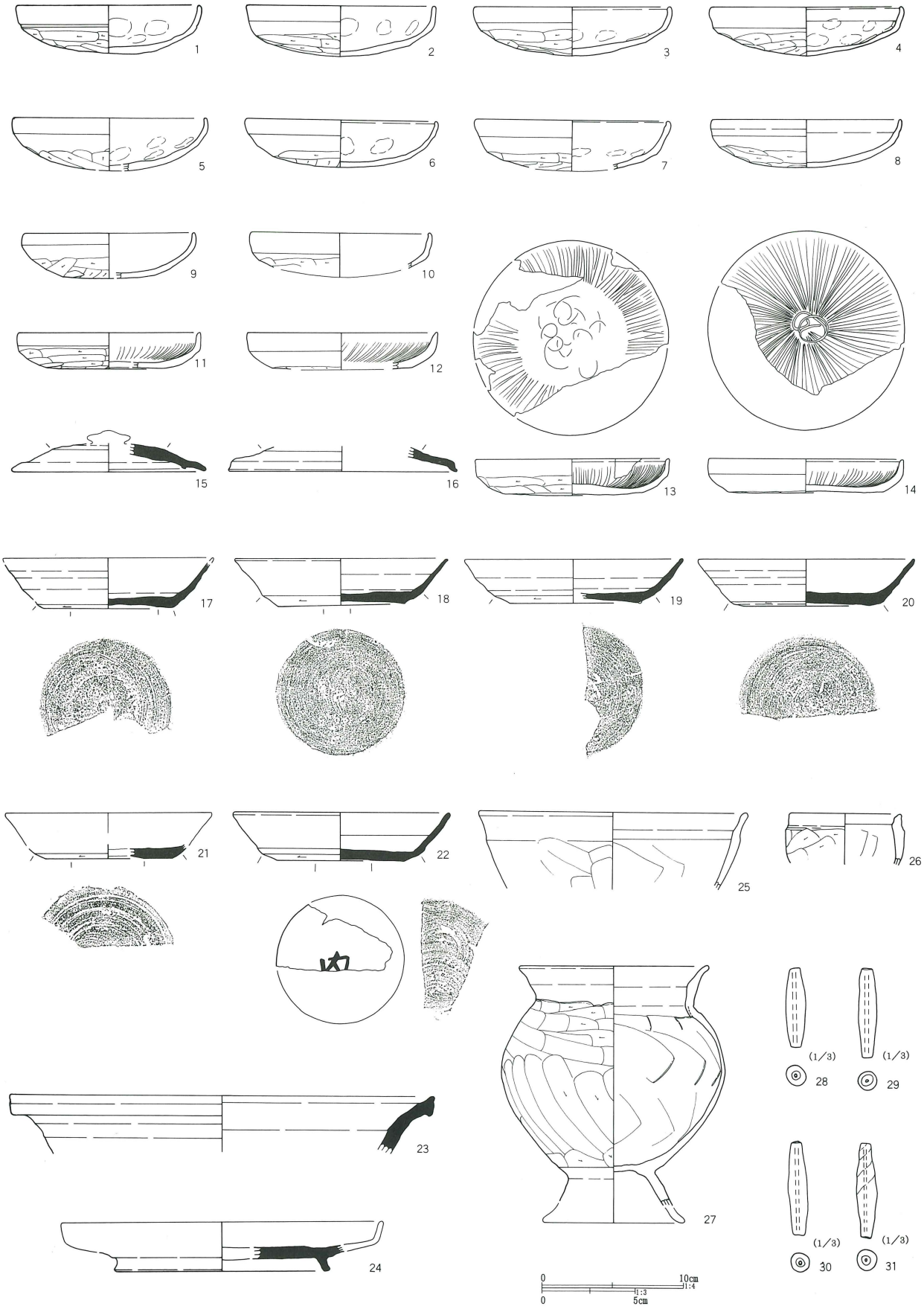
カマドは北壁に設けられる。燃焼部は壁を切り込むが、底面の掘り込みは浅い。第７層下面が火床面、第８層は掘り方と考えられる。袖は白色粘土を積み上げていた。ピットは２本検出されたが、対応するものは存在せず、主柱穴配置は不明である。

壁溝は南壁部に途切れる箇所があるが、他の部分は全周する。深さ５㎝前後。

出土遺物は住居北半部からまとまって検出されている。器種としては、土師器坏・暗文坏・鉢・小型壺・小型台付甕、須恵器坏・蓋・甕・高台付盤などがある（第25図）。１～10は北武蔵型坏で、底部は丸底であるが、やや扁平化している。11～14は平底暗文坏。内面、螺旋＋放射暗文を基本構成とするもので、平底暗文坏出現段階の土器と考えられる。

15は須恵器かえり蓋。重複する第８号住居跡に帰属するものかもしれない。16は無かえり蓋。17～22は須恵器坏である。口径は15㎝代にまとまり、底部と体部下端がヘラケズリ調整される。17は底部ヘラ切り、18は不鮮明であるが、静止糸切りの可能性がある。21・22は回転糸切りである。胎土から17～21は末野産、22は南比企産である。22は底部外面に「内」の墨書が記されている。24は高台の盤である。

第25図　Ａ区第７号住居跡出土遺物



第９表　Ａ区第７号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	12.9	3.4		ＡＢ	Ａ	橙褐色	80%	№59･60他+覆土。Pit2。覆土下層
2	土師坏	13.2	3.5		ＡＢＣ	Ａ	褐色	95%	№19･78
3	土師坏	13.8	3.5		ＢＤ	Ｂ	褐色	80%	№27･28。床面。歪みあり
4	土師坏	(13.4)	3.4		ＡＢ	Ｂ	褐色	40%	カマド内№1
5	土師坏	13.5	3.7		ＡＢ	Ｂ	褐色	50%	№29。床面
6	土師坏	(13.5)	3.4		ＡＢＤ	Ａ	茶褐色	60%	№92。覆土
7	土師坏	(13.6)	2.4		ＡＢ	Ｂ	淡褐色	25%	覆土
8	土師坏	13.3	3.4		ＡＢ	Ａ	褐色	75%	№54。覆土上層
9	土師坏	(12.0)	3.2		ＢＤ	Ｂ	橙褐色	25%	№86。覆土
10	土師坏	(12.6)	2.5		ＡＢ	Ａ	褐色	40%	№5･90 カマド内
11	土師暗文坏	(12.8)	2.5		ＡＢＤ	Ａ	橙褐色	25%	№32。覆土。内面放射暗文。磨滅少ない
12	土師暗文坏	(13.4)	2.6	(9.8)	ＡＢＤ	Ａ	褐色	25%	№45。覆土
13	土師暗文坏	(13.7)	2.6	(9.9)	ＢＣＤ	Ａ	橙褐色	65%	№15･57。覆土。内面放射暗文
14	土師暗文坏	13.7	2.4	11.0	ＢＣ	Ａ	茶褐色	65%	№41･46。覆土下層。内面放射暗文
15	須恵蓋	(13.6)	2.0		ＢＤ片	Ｃ	褐色	20%	№80。覆土下層。末野産。かえり径10.8cm。
16	須恵蓋	(16.0)	2.7		ＢＣ片	Ａ	暗褐色	5%	覆土。末野産。
17	須恵坏	(15.0)	3.2	9.2	ＣＥ片	Ｂ	灰色	50%	№4カマド内。末野産。底部Ａ3d手法
18	須恵坏	15.1	3.3	9.0	ＢＥ片	Ｂ	褐色	65%	№87。壁溝。末野産。底部Ｂ3c手法
19	須恵坏	(15.4)	3.1	9.0	ＢＣ片	Ｃ	黄灰色	35%	№42。覆土。末野産。底部+体部下端回転ヘラケズリ
20	須恵坏	(15.2)	3.3	9.0	ＣＥ片	Ａ	暗灰色	35%	№50･53。覆土。末野産。底部３c手法
21	須恵坏		1.0	(9.0)	Ｃ片	Ｂ	褐色	30%	カマド内。末野産。底部Ｂ3d手法
22	須恵坏	(15.2)	3.4	(9.0)	ＢＣ針	Ｂ	淡灰色	20%	覆土。南比企産。外底部「内」の墨書あり。
23	須恵甕	(30.0)	4.1		Ｂ片	Ｃ	灰褐色	5%	№71。覆土。末野産
24	須恵高台盤		1.9	(14.6)	ＢＣ片	Ａ	灰色	30%	№83。床面。末野産。底部全面回転ヘラケズリ
25	土師鉢	(18.8)	5.5		ＡＢ	Ｂ	暗褐色	20%	覆土
26	土師小型壷？	(7.8)	3.6		ＡＢ	Ａ	橙褐色	20%	覆土
27	土師台付甕	13.2	16.9		ＡＢＣ	Ａ	茶褐色	75%	№25。床面
28	土錘	№38。長さ4.2cm。最大径1.1cm。孔径0.2cm。重さ4.3ｇ。胎土Ｂ。焼成Ａ。褐色。残存95%							
29	土錘	№34。長さ4.7cm。最大径1.0cm。孔径0.2cm。重さ4.5ｇ。胎土Ｂ･Ｃ。焼成Ａ。褐色。残存100%							
30	土錘	覆土。長さ5.0cm。最大径1.0cm。孔径0.2cm。重さ5.0ｇ。胎土Ｂ。焼成Ａ。褐色。残存100%							
31	土錘	覆土。長さ5.0cm。最大径1.1cm。孔径0.2cm。重さ5.3ｇ。胎土Ｂ。焼成Ａ。褐色。残存100%							

須恵器は破片数で71点出土し、内訳は坏40・高台付坏１・蓋16・高台盤２・甕８・壺瓶類３・不明１点である。坏６点が南比企、坏１点と蓋３点が産地不明で、それ以外は末野産である。時期は熊野Ⅲ期古相と考えられる。

Ａ区第８号住居跡（第26図）

第８号住居跡は46－８・９、47－８・９グリッドに位置する。第７号住居跡、第２号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古い。遺構の大半は町教育委員会調査区にあり、住居南西部を調査した。平面形は方形の大型住居跡の一部で、残存規模は長軸長6.00ｍ、短軸長3.58ｍ、深さ0.24ｍである。主軸方位はＮ－92°－Ｗを指す。

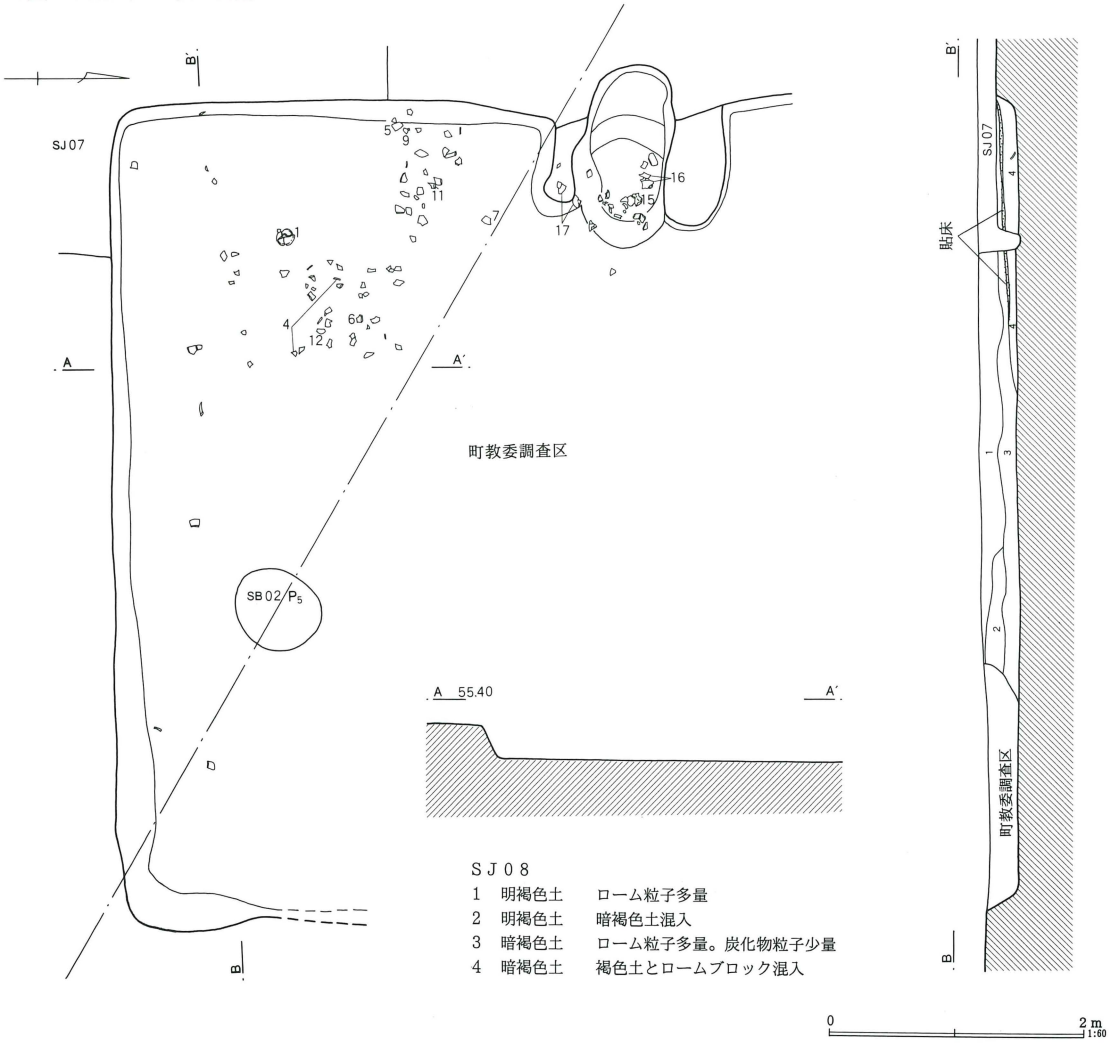
床面は概ね平坦で、比較的堅く締まっていたが、壁際はやや軟弱であった。埋土はローム粒子が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは西壁に付く。袖の一部を除き、町教育委員会調査区に属する。ピット・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は少なく、小片が多い。土師器坏・皿・暗文坏・甕、須恵器坏・高台付坏・蓋・甕と不明土製品がある（第27図）。１は遺存度の高い土師器坏であるが、覆土出土で、器形からも重複する第７号住居跡に属する可能性が高い。２は内屈口縁の北武蔵型坏。３は暗文坏系の土器であるが、暗文は施されない。４は皿、５・６は暗文坏である。

７～11は須恵器蓋で、かえりをもつものともたないものがある。末野産。12･13は末野産の須恵器坏、

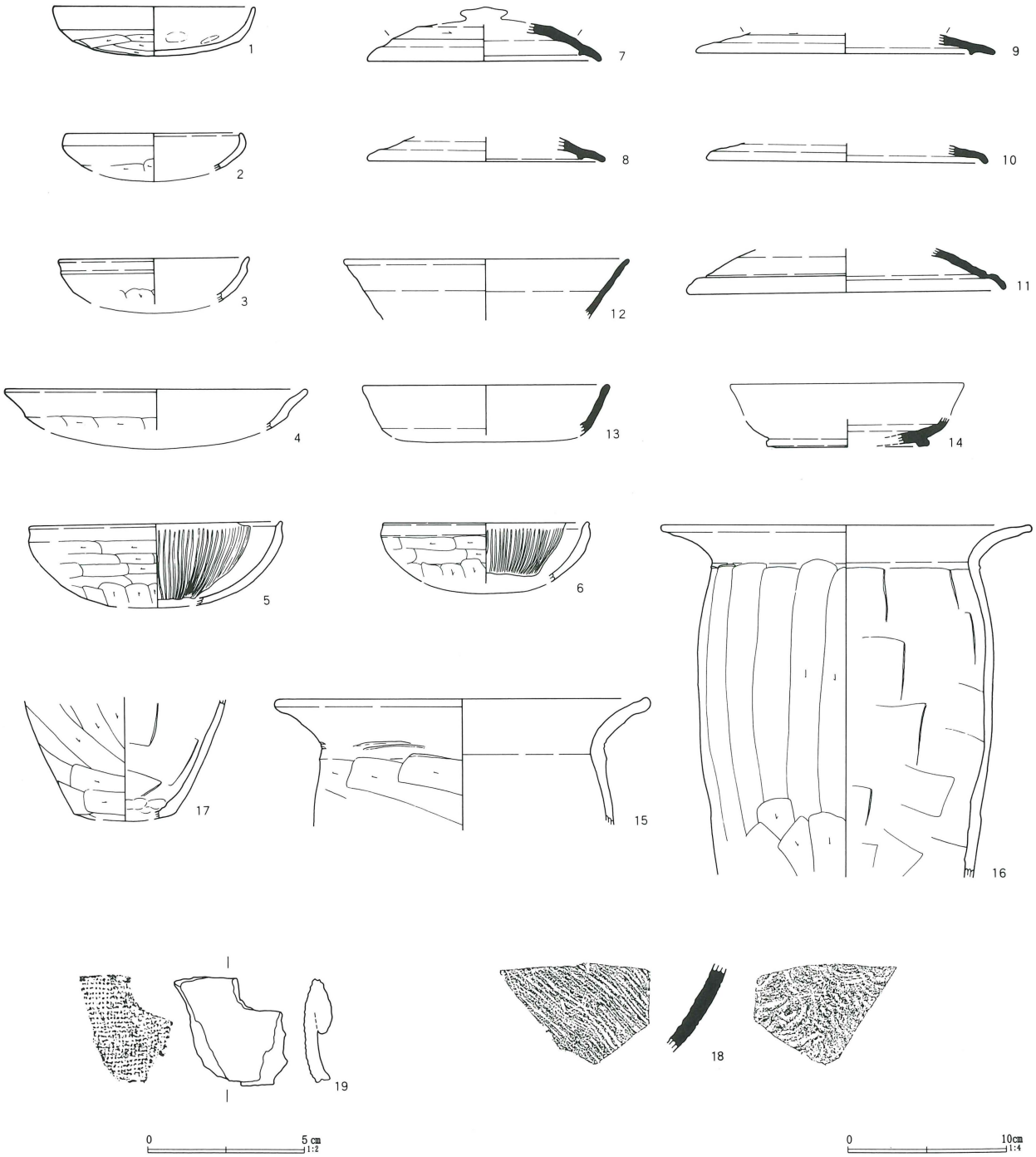
第26図　A区第８号住居跡



第10表　A区第８号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	12.7	3.1		ＡＢＣ	B	明褐色	60%	№60。覆土
2	土師坏	(11.0)	2.4		ＡＢ	A	橙褐色	15%	覆土
3	土師坏	(12.0)	2.8		ＡＢ	B	褐色	20%	覆土
4	土師皿	(19.0)	2.6		ＡＢ	A	橙褐色	20%	№46･55。覆土。接合しない2片からなる
5	土師暗文坏	(16.0)	5.2		ＡＢ	A	橙褐色	20%	№12。覆土。内面放射暗文
6	土師暗文坏	13.0	3.7		Ａ	A	橙褐色	20%	№37。覆土。内面放射暗文
7	須恵蓋	(14.7)	2.3		Ｃ片	C	灰色	15%	№2。床面。末野産。かえり径12.3cm
8	須恵蓋	(15.0)	1.5		ＢＤ片	C	灰褐色	10%	覆土。末野産。かえり径12.3cm
9	須恵蓋	(18.8)	1.3		Ｃ片	C	灰褐色	5%	№11。覆土。末野産。かえり径16.0cm
10	須恵蓋	(17.6)	1.1		ＢＣ片	A	灰色	5%	カマド 覆土。末野産。口径、傾き不明確
11	須恵蓋	(20.0)	2.7		Ｃ片	C	黄灰色	20%	№7。覆土。末野産
12	須恵坏	(18.0)	3.9		Ｃ片	A	暗灰色	5%	№77。床面。末野産
13	須恵坏	(15.5)	3.2		ＢＣ片	A	灰色	5%	覆土。末野産
14	須恵高台付坏		1.8	(9.2)	Ｂ	A	灰色	5%	覆土。湖西産。底部は出尻となるか不明確
15	土師甕	(23.4)	8.1		ＡＣ	A	明褐色	20%	カマド内№83
16	土師甕	(23.3)	22.2		ＡＣ	A	明褐色	20%	カマド内№86･87他。歪みあり
17	土師甕		7.7	6.5	ＡＢＤ	B	褐色	40%	カマド左袖内№1･3他
18	須恵甕				ＢＣ片	A	灰色		覆土。末野産か
19	不明土製品	残長3.4cm。表面は湾曲し細かい布目圧痕残る 裏面粘土積み上げ痕残る 表面ひびがあり型押し成形かもしれない							

第27図　A区第８号住居跡出土遺物



14は湖西産の高台付坏である。

土師器甕は口縁部上端をヨコケズリするもの(15)と、胴部をタテケズリするもの(16)がある。19は不明土製品で、表面に細かい布目痕が押圧され、裏面は粘土積み上げ痕が残る。

須恵器は破片数で35点出土し、内訳は坏19点・椀２・高台坏１・蓋９・甕３・壺１点となる。産地は南比企産２点(坏１・蓋１)、湖西産１点(高台付坏)、不明２点（甕１・壺１）でそれ以外は末野産で占められている。第７号住居跡との関係や出土遺物の様相から、時期は熊野Ⅱ期が相当と考えておきたい。

A区第９号住居跡（第28図）

第９号住居跡は47－10グリッドに位置する。住居北半は町教育委員会によって調査されている。重複

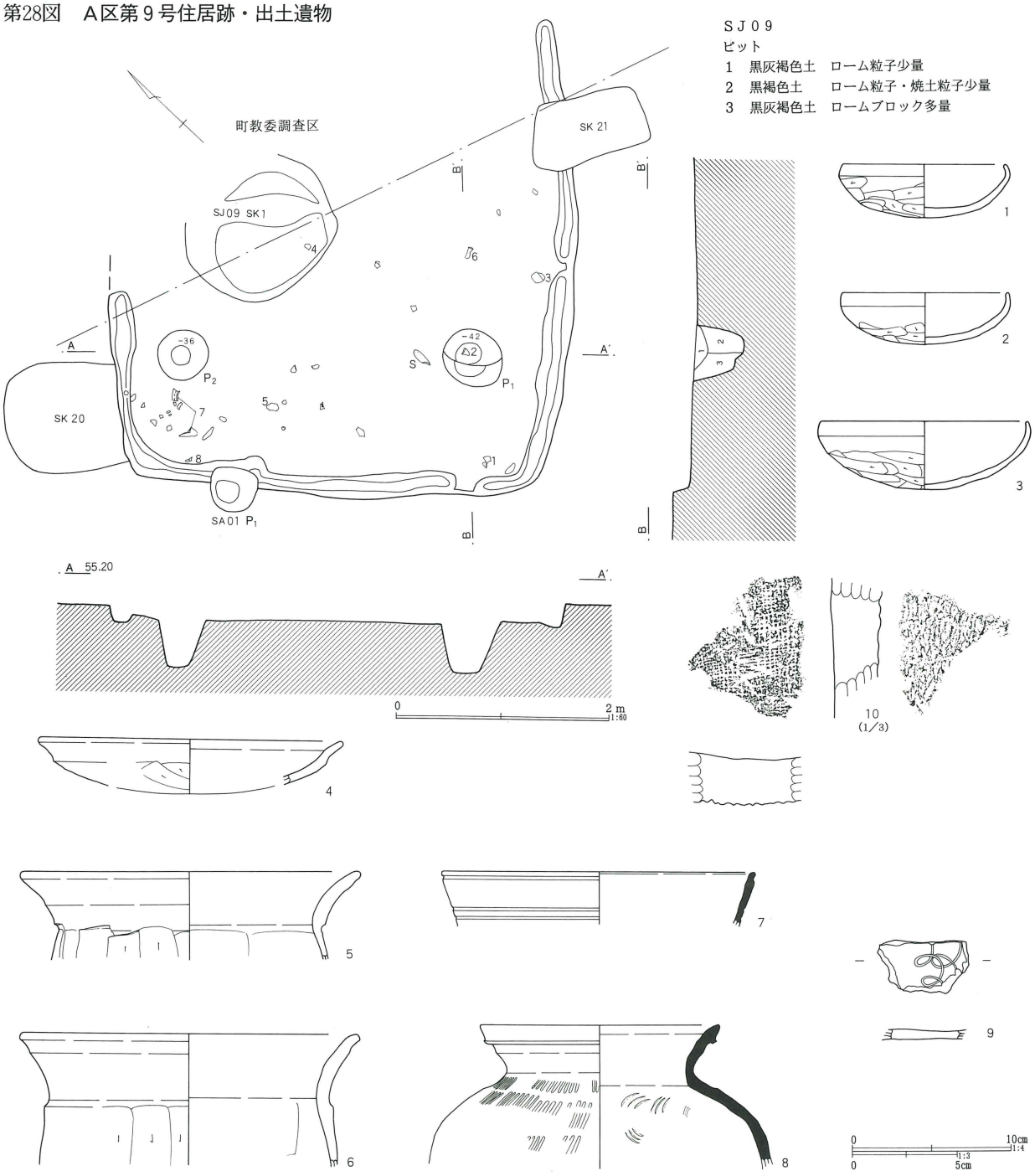
する第21号土壙及び１号ピット列は本住居跡を切って構築されていた。

平面形は長方形と推定され、調査区内の残存規模は長軸長4.40ｍ、短軸長3.72ｍ、深さ0.22ｍである。主軸方位はＮ－51°－Ｅを指す。

床面は細かい凹凸が目立つが、全体に堅く締まっていた。埋土はローム粒子を少量含む黒褐色土を基調とし、特に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。

カマドは調査区内からは検出されなかった。ピットは２本検出され、住居に伴う主柱穴と考えられる。土壙は１基検出され、床下土壙となる可能性がある（ＳＫ１）。壁溝は一部途切れるが、ほぼ全周する。深さは５㎝ほどである。

第28図　Ａ区第９号住居跡・出土遺物



第11表　A区第９号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	10.3	3.3		ＡＢ	A	茶褐色	50%	№2。覆土。
2	土師坏	(10.4)	3.2		ＡＢＣ	A	明褐色	30%	Pit1上面
3	土師坏	(13.0)	4.3		ＡＢ	B	橙褐色	35%	№6。覆土。内面風化。粉っぽい胎土
4	土師皿	(19.0)	2.8		ＡＢＤ	A	褐色	5%	№30 床直
5	土師甕	(21.0)	5.6		ＡＢＣ	A	褐色	20%	№14。覆土
6	土師甕	(21.0)	8.4		ＡＢＣ	A	淡褐色	10%	№7 床直
7	須恵椀	(19.8)	3.4		ＣＦ片	B	淡灰色	10%	№28。覆土。末野産。無台椀か
8	須恵甕	(15.0)	9.1		C片	A	黒灰色	30%	№18･19。覆土。末野産
9	土師暗文坏				B	A	橙褐色		畿内系暗文坏。底部外面は指頭痕残る
10	平瓦				C	A	褐色		凸面縄叩き凹面布目（ﾀﾃ5本、ﾖｺ7本／cm）

出土遺物は土師器坏・皿・甕・畿内産暗文坏、須恵器椀・壺、平瓦が検出された。第28図１～３は丸底形態の北武蔵型坏。４は皿、５・６は甕で、胴部は縦方向のヘラケズリが施される。７は口唇部と体部に沈線が巡り、銅鋺模倣の須恵器椀と思われる。末野産。９は畿内産土師器坏の底部破片。胎土は精選され、外面は指頭による窪みと軽いヘラケズリ痕があり、内面は螺旋状暗文が施されている。覆土出土。10は平瓦小片。凸面縄叩き、内面布目である。覆土出土。

須恵器は22片出土している。坏11点（末野８・南比企２・不明１点）、椀１点、甕５点、蓋４点、器種不明１点があり、末野産が19点を占める。

土師器坏や甕の様相から、時期は熊野Ⅰ期と考えられる。

A区第10号住居跡（第29図）

第10号住居跡は47･48－９･10グリッドに位置する。上層を浅い溝状遺構（第２・５号溝跡の一部か）によって攪乱されていたが、床面は残存している。また、住居中央部にピットが１基検出された。住居より新しい時期の所産である。（ＳＡ01）。

平面形はほぼ正方形で、規模は長軸長3.60ｍ、短軸長3.46ｍ、深さ0.12ｍである。主軸方位はＮ－47°－Ｗを指す。

床面は凹凸が比較的顕著であるが、良く踏み固められている。埋土はローム混じりの黒褐色土を基調としているが、攪乱を受けており堆積状況は不明確である。

カマドは北西壁に設置される。燃焼部は壁を切り込み、手前が土壙状に一段深く掘り込まれていた。遺存状態は悪く、カマド袖の大半は流失した状態であった。

貯蔵穴はカマド脇の北隅部に設けられていた。長径65cm、短径55cmの楕円形で、深さ51cmである。柱穴は検出されなかった。壁溝はカマドと貯蔵穴の周囲を除き、概ね巡っていた。

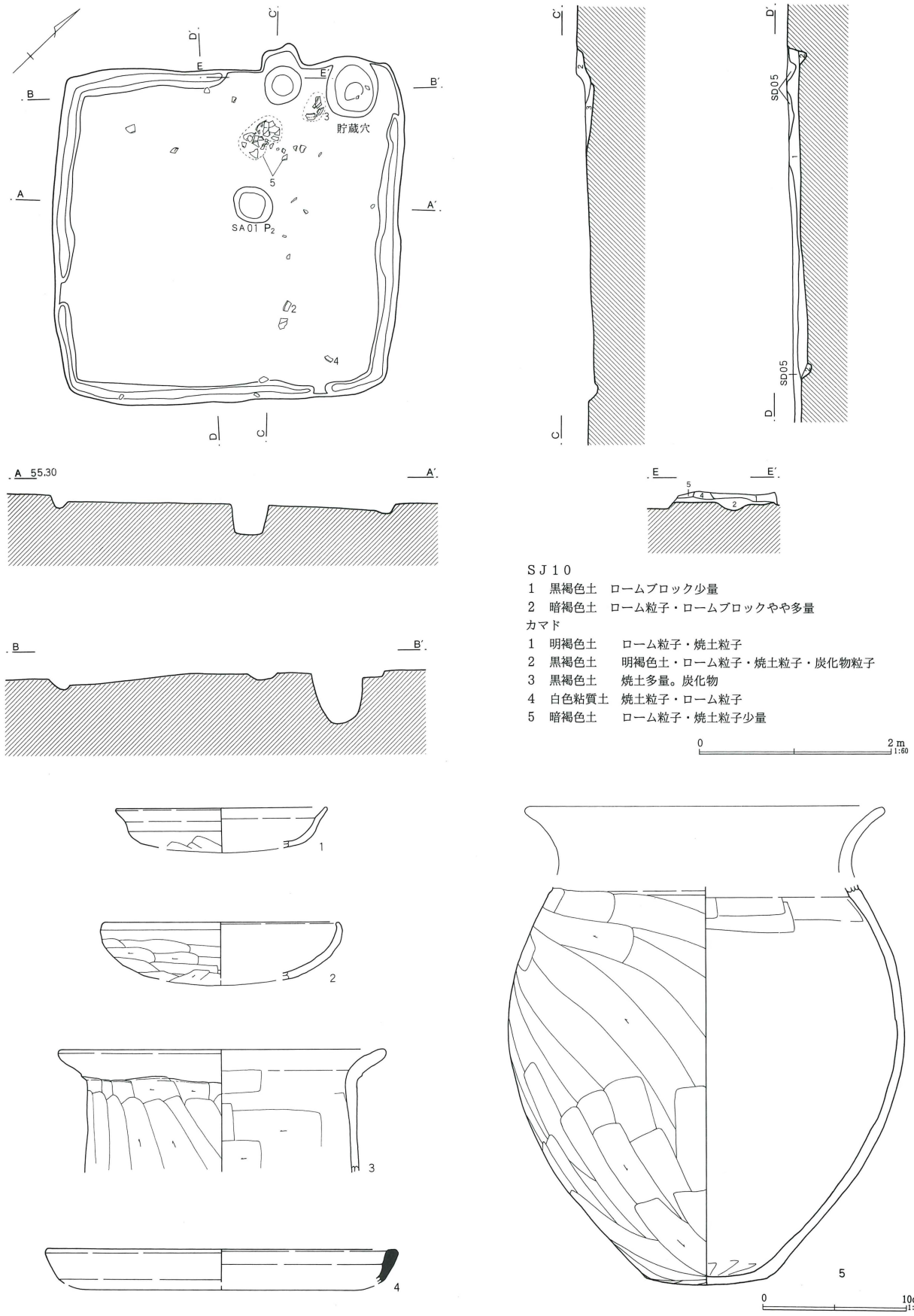
出土遺物は土師器坏・皿？・甕・壺、須恵器盤がある（第29図１～５）。１は土師器皿か。貯蔵穴出土。３の甕と５の壺はカマド前面から潰れた状態で出土した。

須恵器は12片出土したが、いずれも小片である。坏は３点（末野産２・南比企産１）、甕は５点（末野４・南比企１）、蓋は１点（末野）、盤２点（末野）、甑１点（南比企）である。

第12表　A区第10号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師皿？	(14.7)	2.8		ＡＢ	A	明褐色	10%	貯蔵穴
2	土師坏	(16.4)	4.0		ＢＥ	A	明褐色	20%	№23
3	土師甕	(22.6)	8.6		ＡＢ	A	褐色	25%	№3
4	須恵盤	(24.5)	2.4		E片	A	暗灰色	10%	№25。末野産
5	土師壺		28.0	8.4	ＡＢＣ	A	橙褐色	65%	№4･9

第29図　A区第10号住居跡・出土遺物



時期は熊野Ⅰ～Ⅱ期と考えておきたい。

A区第11号住居跡（第30図）

第11号住居跡は48－10グリッドに位置する。第10号住居跡の南東に隣接し、ほぼ軸を揃えている。埋土上面は第１・２・９・43号溝跡によって削平されている。平面形は横長の長方形で、規模は長軸長4.20ｍ、短軸長2.94ｍ、深さ0.22ｍである。主軸方位はＮ－50°－Ｗを指す。

床面は細かな凹凸が目立ち一定しない。また、西半部では溝跡の攪乱が床面まで達しており、床面の遺存状態は悪い。埋土はロームブロック混じりの黒色土を基調としていた。

カマドは北西壁に設けられていた。袖は白色粘土を用いて構築されているが、遺存状態は良くない。左袖には土師器甕が倒立状態で埋め込まれていた。袖の補強材であろう。貯蔵穴はカマド脇の北隅部に掘り込まれていた。形態は楕円形で、規模は長径58㎝、短径48㎝、深さ12㎝である。

ピットは検出されなかった。壁溝は長辺で部分的に途切れていた。

出土遺物は土師器坏・皿・暗文皿・甕・小型甕、須恵器高盤脚部？・甕、平瓦がある（第30図１～10）。１は完形の坏で、貯蔵穴内出土。口縁部が内彎する北武蔵型坏である。３は皿で内面に放射暗文が施される。７はカマドの補強材に使用された甕、８はカマド脇から出土した。器壁の厚い甕で、胴部調整は縦方向のケズリが基本となっている。10は平瓦片。厚さ２㎝前後と分厚い。凸面は平行タタキ、凹面は細かい布目（経糸８本、緯糸８本／㎝）痕が残る。模骨は残存部には確認できない。覆土出土で、混入の可能性が高いであろう。

須恵器は11片出土し、坏が６点（末野５・不明１）、甕が１点（末野）、瓶類２点（末野１・南比企１）、蓋１点、盤？１点（末野）となる。

時期は熊野Ⅰ～Ⅱ期と考えられる。

A区第12号住居跡（第31図）

第12号住居跡は調査区南端の48－９・10グリッドに位置する。北側に第10・11号住居跡がほぼ軸を揃えて隣接している。住居上面を第１・７・８号溝跡に削平されていた。平面形は整った方形で、規模は長軸長3.66ｍ、短軸長3.60ｍ、深さ0.30ｍである。主軸方位はＮ－54°－Ｗを指す。

床面は概ね平坦で、堅く踏み固められていた。埋土は第３層が焼土を主体に構成される層で、明らかに投棄されたものと思われる。第２・４層にも焼土粒子の混入が目立った。対照的に第５～10層には焼土がほとんど含まれていない。

カマドは北西壁に設置される。燃焼部は壁を僅かに切り込み、底面は皿状に掘り込まれていた。ピットは検出されなかった。

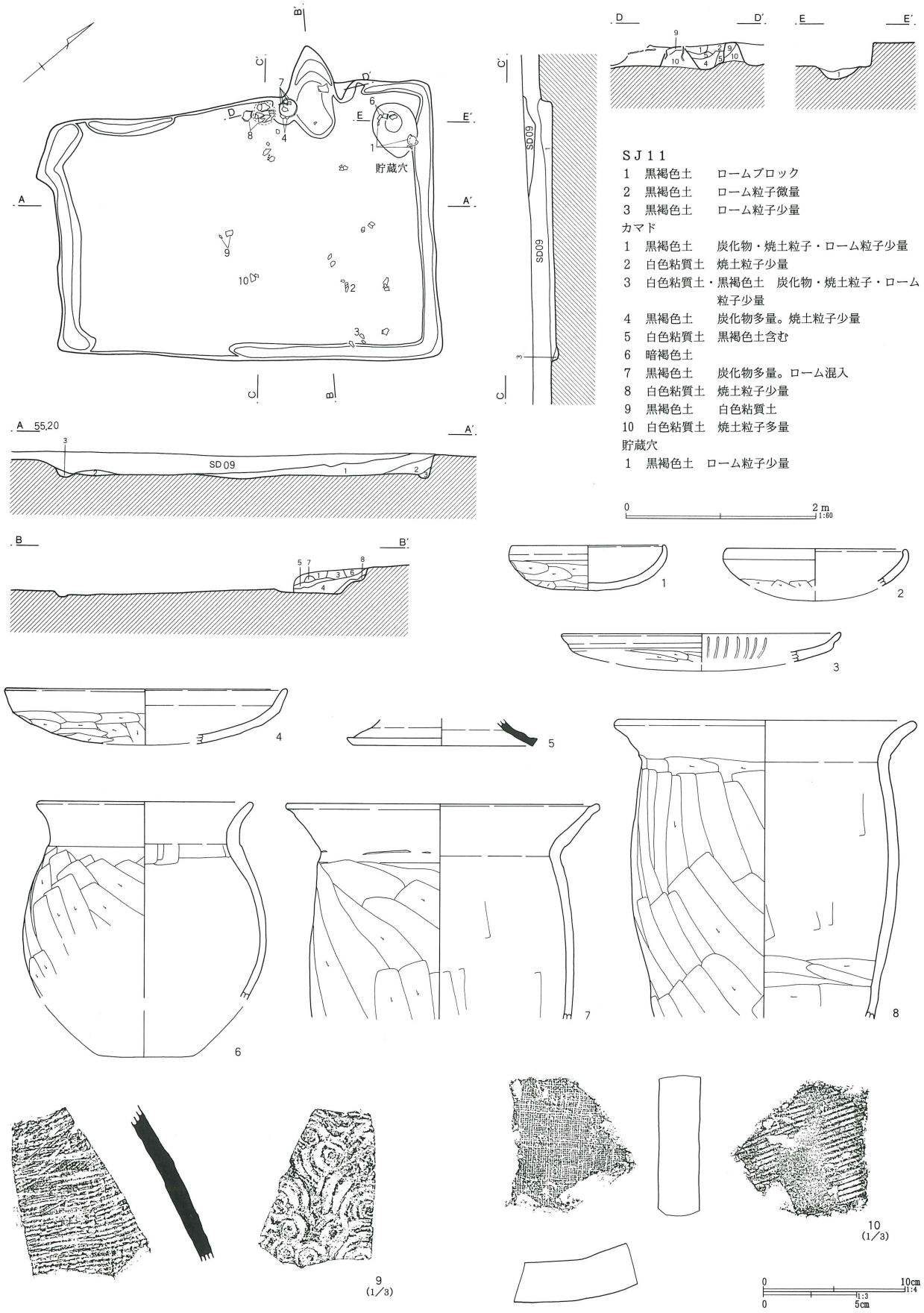
壁溝は一部途切れている。深さ約５㎝。

出土遺物は極めて多い（第32～36図）が、全て破片である。大半の遺物が、第２層・３層対応層から出土しており、焼土と共に投棄されたものと考えられる。器種としては、土師器坏・暗文坏・皿・椀・

第13表　A区第11号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	土師坏	10.8	3.2		ＡＢＣ	A	明褐色	100%	No.1・3・4。貯蔵穴
2	土師坏	(12.6)	2.7		ＢＣ	A	褐色	25%	No.31。覆土
3	土師暗文皿	(19.6)	2.0		ＡＢＣ	A	明褐色	5%	No.36。覆土。内面放射暗文
4	土師皿	(19.6)	3.8		ＡＢＣ	A	明褐色	20%	No.48。カマド袖
5	須恵高盤脚部		1.7	(12.7)	ＢＤ片	B	灰褐色	10%	カマド。末野産
6	土師小型甕	(14.9)	14.0		ＡＢＥ	A	暗褐色	35%	No.1 貯蔵穴
7	土師甕	22.0	15.2		ＡＢＤ	A	明褐色	75%	No.47 カマド袖
8	土師甕	(20.9)	21.0		ＡＢ	A	暗褐色	40%	No.13・43。覆土
9	須恵甕				Ｅ片	A	暗灰色		No.40・41。床面。末野産
10	平瓦				ＢＤＥ	B	褐色		No.39。覆土。凹面布目凸面平行叩き

第30図　A区第11号住居跡・出土遺物



暗文皿・甕・壺・甑・小型甕・板状土製品、須恵器長頸瓶・短頸壺・蓋・坏・円面硯・盤脚部・甕、土製支脚、土錘、鉄製品がある。第32図１～４は内彎口縁の北武蔵型坏。５～７は器形は暗文坏と同一であるが、内面の暗文は施されない。８・10～21は暗文坏。見込部から口縁に向かって放射状暗文が施されるものが大半であるが、19は斜格子状暗文が施文されている。14の暗文は間隔を置いて施される。22～25は北武蔵型土師器皿、27～31は暗文皿である。27・31は放射状暗文が施されるが、31は不鮮明である。28・30は螺旋暗文、29はあまり明確ではないが、螺旋暗文が崩れたような円形文様を不規則に施文しているようにみえる。32は内面に朱墨かとも思われる痕跡が認められるが、字には読めない。33～42は甕。胴部器壁の厚いものと薄いものがある。胴部の膨らみは弱く、縦方向のケズリを加えるものが多い。53は板状土製品。土器のような丸味はなく、側面はタテ・ヨコ２面が面取りされている。表面は軽いヘラケズリ、裏面は撫でられている。土師質で、硬質な焼き上がり。置きカマドか。

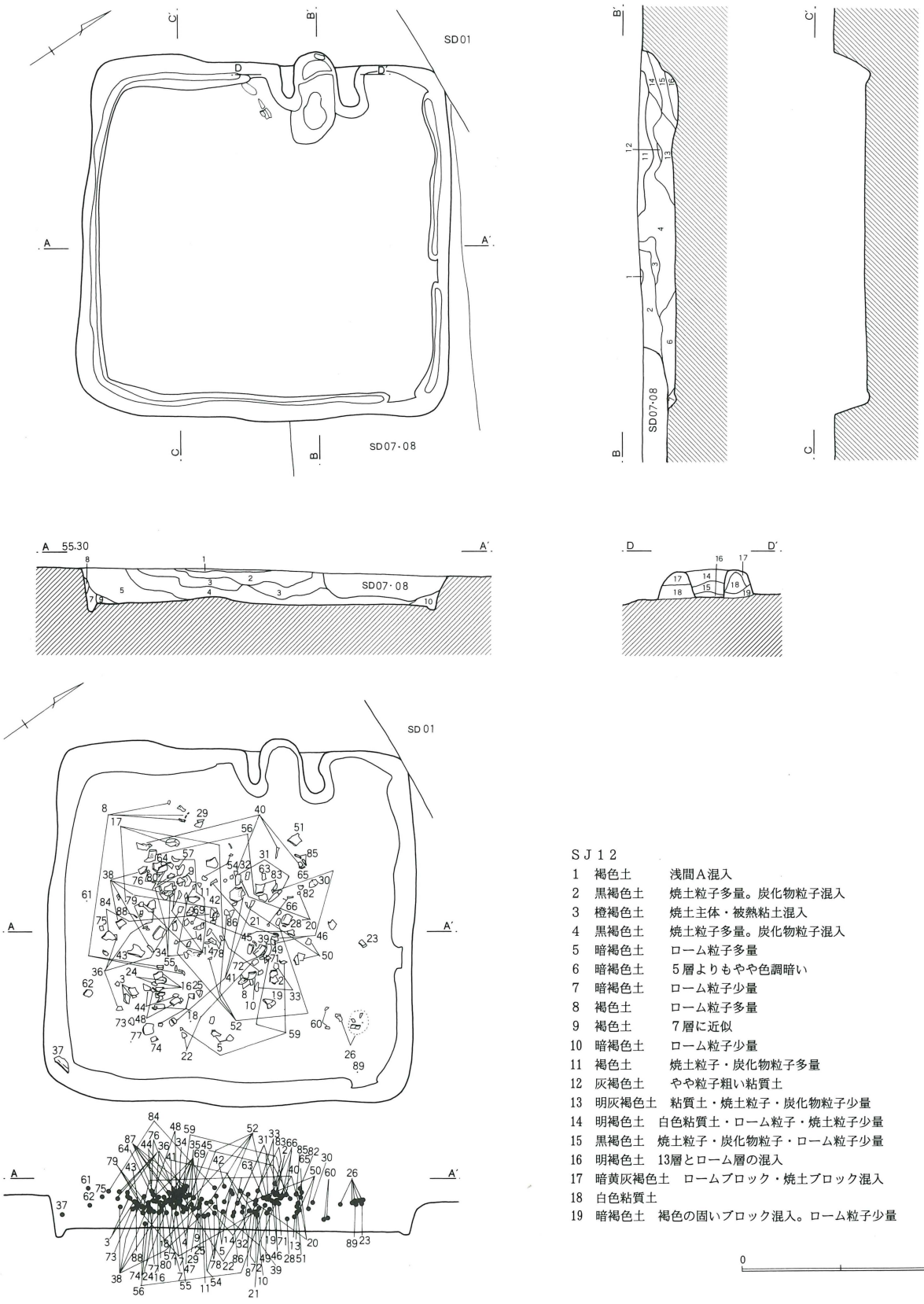
54～57は須恵器壺・瓶類である。54は徳利形の細頸短頸瓶か。胴部は木口状工具によるカキ目が施されている。肩部内面が強く窪み、この部分で接合したものか。末野産。55・56は湖西産の長頸瓶。58～71は須恵器蓋。58～61は中小形のかえり蓋で、58は秋間産と思われる。天井部が全面回転ヘラケズリされ、かえりが突出する。長頸瓶の蓋か。62～66は大型のかえり蓋、67・68は無かえり蓋である。58以外は末野産。

72～80は須恵器坏。72～74は小型坏で、72・73は底部手持ちヘラケズリ、74はヘラ切り後ナデ調整である。76～79は口径15.8～18.6cmの大型坏である。76は底部ヘラ切り後外縁部のみ回転ヘラケズリ調整。中心部にはヘラ切り痕が残る。77～79は底部全面回

第14表　A区第12号住居跡出土遺物観察表（第32～36図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(12.2)	3.1		A B	B	淡褐色	25%	覆土。外面風化
2	土師坏	12.3	3.6		A B D	A	明褐色	50%	№2075・2076
3	土師坏	12.3	3.7		A B	B	淡褐色	70%	№181・1116他
4	土師坏	12.0	3.7		A B	B	褐色	50%	№718・1783
5	土師坏	(13.3)	4.3		A B	B	褐色	40%	№2047・2048
6	土師坏	(13.0)	4.6		B D	A	淡褐色	25%	覆土。口縁外面黒斑
7	土師坏	(12.0)	4.0		A D	A	黄褐色	40%	№1385・1718
8	土師暗文坏	(13.0)	4.2		A B	B	明褐色	30%	№2152・2173。内面風化
9	土師椀	(17.0)	5.5		A B D	A	褐色	10%	№2004
10	土師暗文坏	(12.2)	3.4		A B	A	明褐色	45%	№2154
11	土師暗文坏	(13.0)	4.1		B	A	明褐色	20%	№1791。内面放射状暗文
12	土師暗文坏	(13.6)	3.5		B	A	茶褐色	25%	覆土。内面放射暗文
13	土師暗文坏	(15.0)	4.0		A B	A	明褐色	35%	№1682
14	土師暗文坏	12.9	4.3		A B	A	淡褐色	75%	№1床面。№1780。内面放射暗文。4単位施文
15	土師暗文坏	15.0	4.2		B D	B	明褐色	30%	覆土。内面放射暗文
16	土師暗文坏	14.5	4.9		A B	A	淡褐色	65%	№187・2033他
17	土師暗文坏	14.3	5.4		A B D	B	淡褐色	90%	№410・1706他。全体にやや風化
18	土師暗文坏	14.8	4.8		A B	A	明褐色	70%	№1535・1582
19	土師暗文坏	(15.0)	4.5		A B	A	明褐色	35%	№1560
20	土師暗文坏	(15.6)	5.8		A B D	A	明褐色	30%	№29・116
21	土師暗文坏	(16.8)	5.3		A B D	A	淡褐色	40%	№1698・1819
22	土師皿	(16.0)	3.2		B	A	茶褐色	30%	№204・2158。暗文系無文皿
23	土師皿	(16.0)	3.0		A B C	B	淡褐色	10%	№1474
24	土師皿	(16.4)	3.6		A B D	B	橙褐色	25%	№2114・2035
25	土師皿	(16.0)	3.6		A B	A	明褐色	40%	№1593
26	土師椀	10.2	7.1		A B	B	褐色	65%	№161・163他。体部外面二次被熱。部分的に煤付着

第31図　Ａ区第12号住居跡・遺物分布図

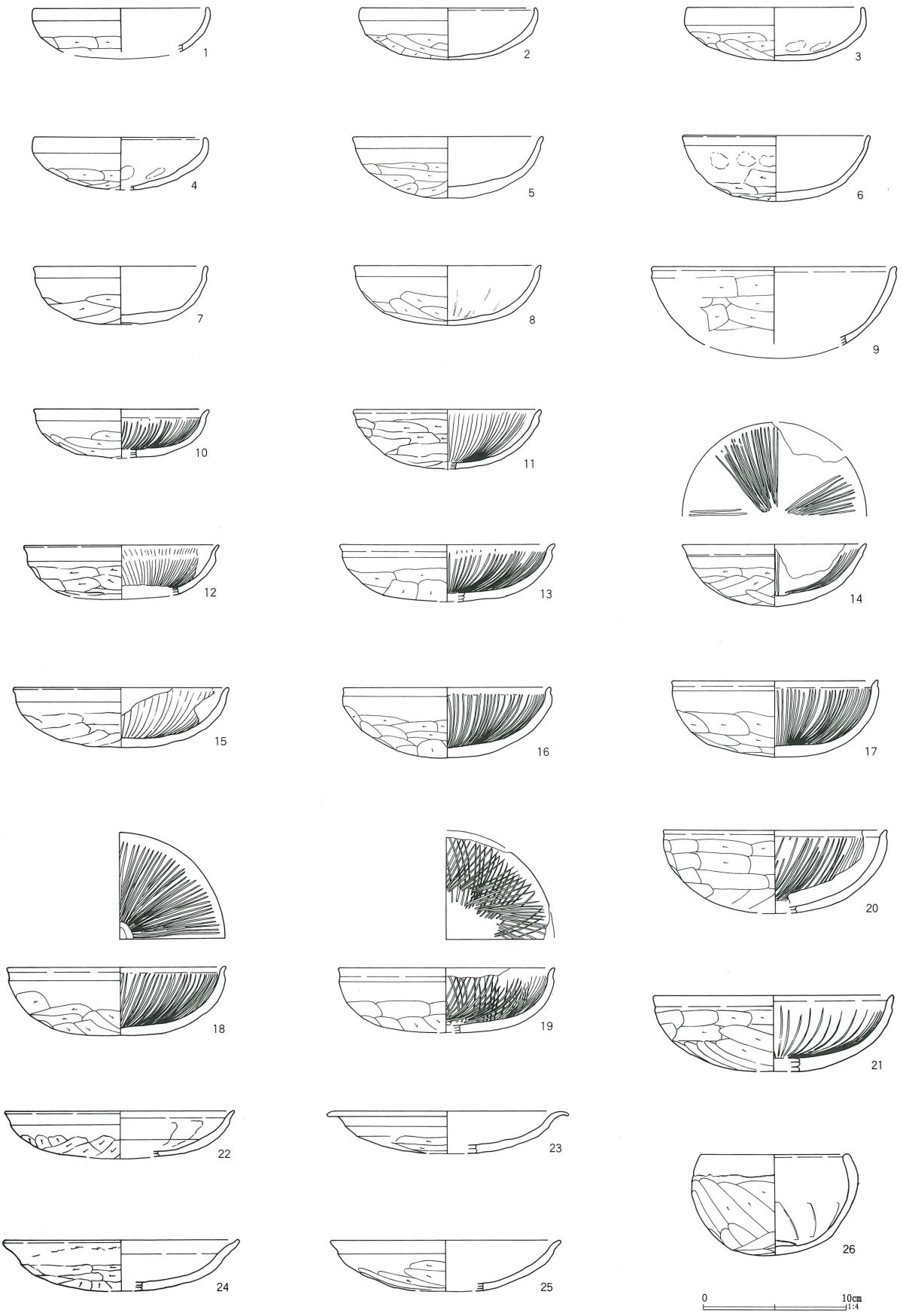


ＳＪ１２

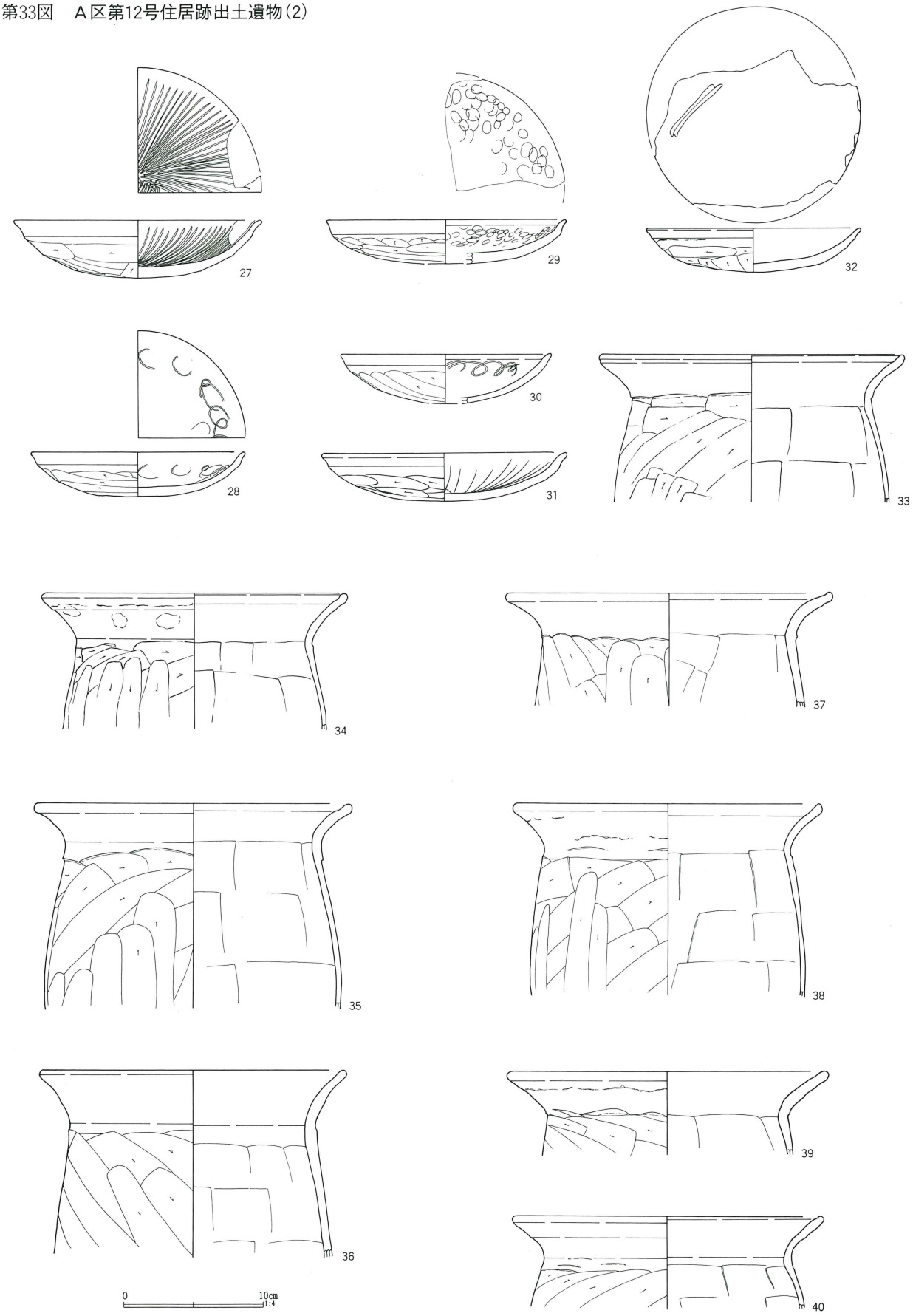
1　褐色土　浅間Ａ混入
2　黒褐色土　焼土粒子多量。炭化物粒子混入
3　橙褐色土　焼土主体・被熱粘土混入
4　黒褐色土　焼土粒子多量。炭化物粒子混入
5　暗褐色土　ローム粒子多量
6　暗褐色土　５層よりもやや色調暗い
7　暗褐色土　ローム粒子少量
8　褐色土　ローム粒子多量
9　褐色土　７層に近似
10　暗褐色土　ローム粒子少量
11　褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多量
12　灰褐色土　やや粒子粗い粘質土
13　明灰褐色土　粘質土・焼土粒子・炭化物粒子少量
14　明褐色土　白色粘質土・ローム粒子・焼土粒子少量
15　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量
16　明褐色土　13層とローム層の混入
17　暗黄灰褐色土　ロームブロック・焼土ブロック混入
18　白色粘質土
19　暗褐色土　褐色の固いブロック混入。ローム粒子少量

0　2 m　1:60

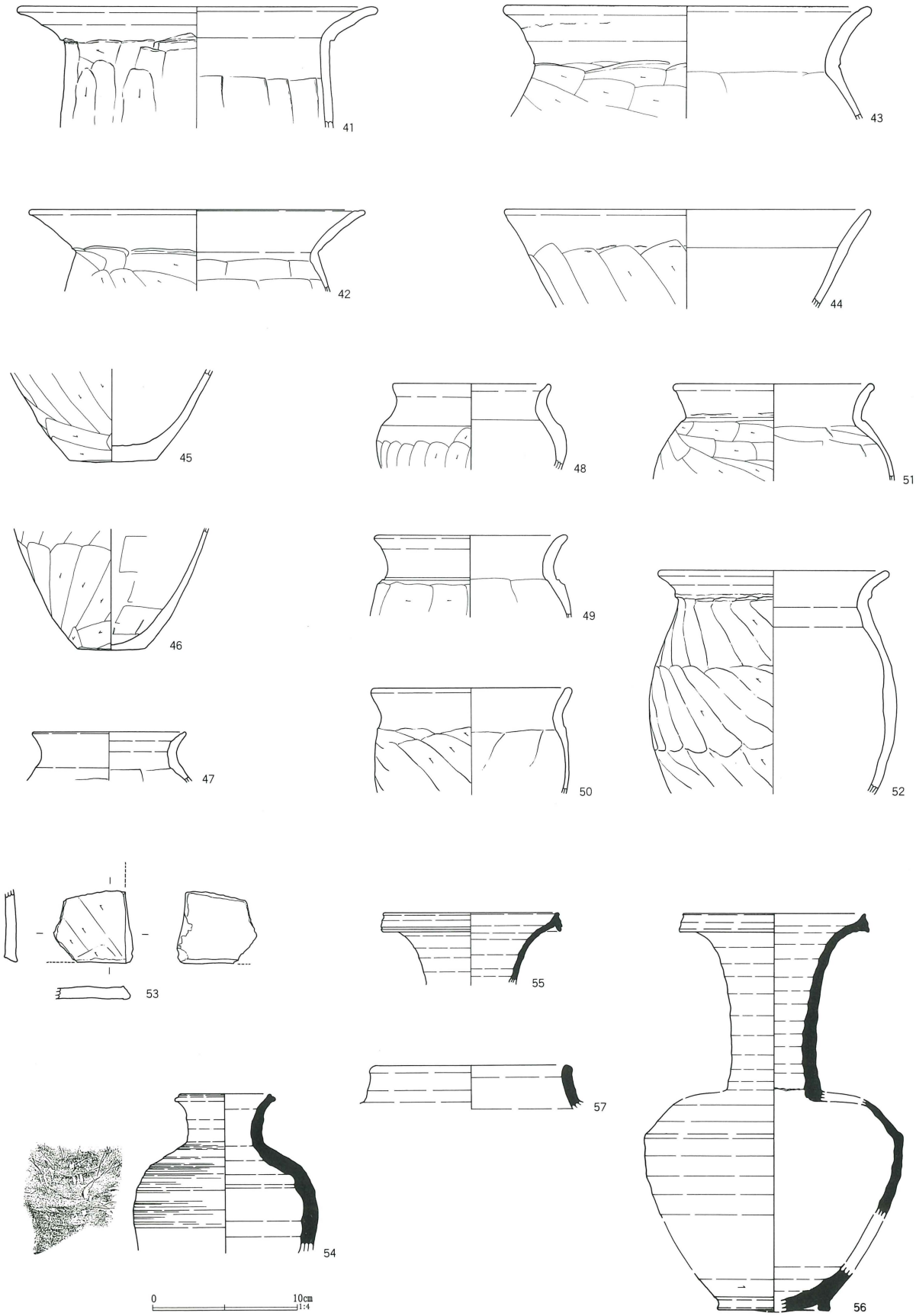
第32図　A区第12号住居跡出土遺物(1)



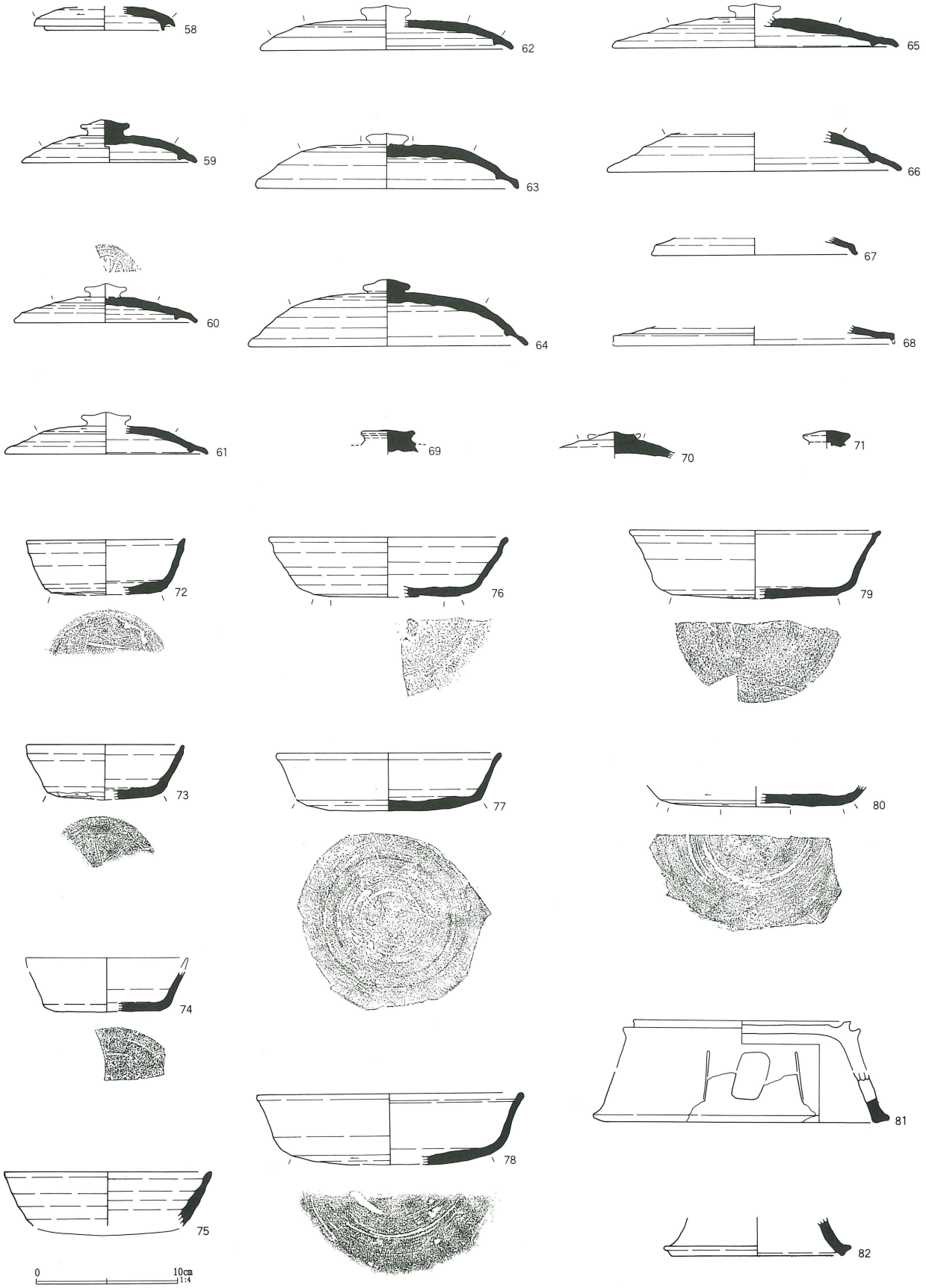
第33図　A区第12号住居跡出土遺物(2)



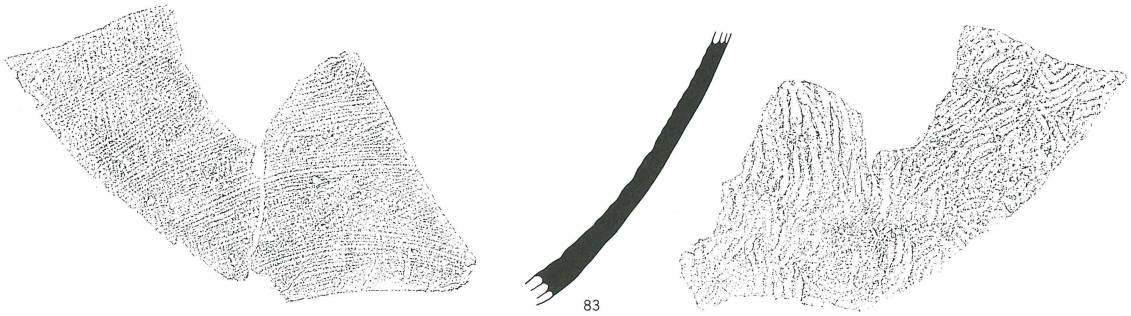
第34図　A区第12号住居跡出土遺物(3)

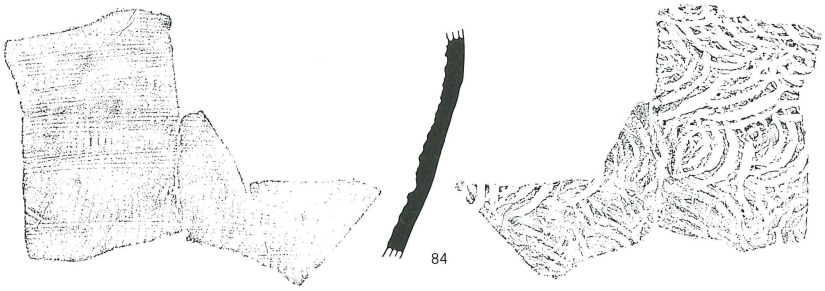


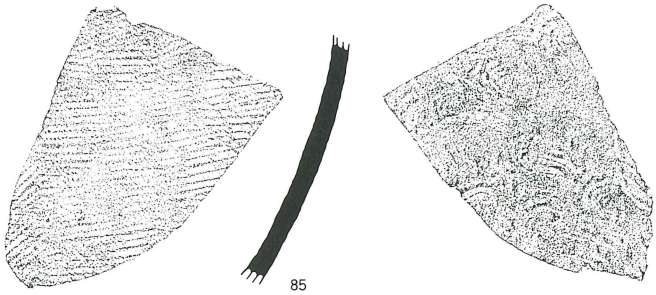
第35図　A区第12号住居跡出土遺物(4)

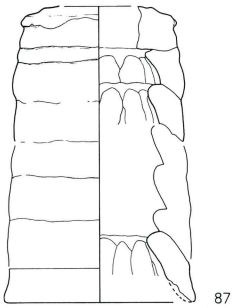


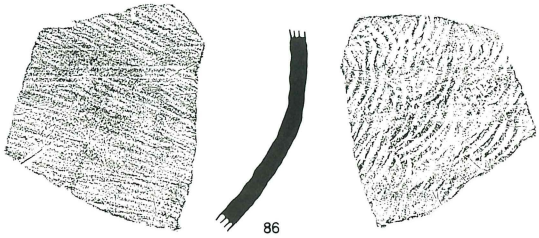
第36図　A区第12号住居跡出土遺物(5)

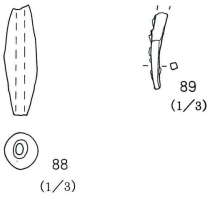












番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
27	土師暗文皿	(17.6)	4.1		ＡＢＣ	Ａ	明褐色	40%	覆土。内面放射暗文
28	土師暗文皿	15.2	3.1		ＡＢ	Ａ	明褐色	75%	No.8。床面。内面ﾗｾﾝ暗文部分的に残る
29	土師暗文皿	(17.0)	3.1		ＡＢＣ	Ａ	明褐色	25%	No.1709
30	土師暗文皿	(15.0)	3.5		ＡＢ	Ａ	明褐色	25%	No.1616
31	土師暗文皿	17.4	3.4		ＡＢ	Ｂ	褐色	60%	No.1647・2087。内面中央部一方向のヘラミガキ
32	土師皿	(15.2)	3.1		ＡＢＤ	Ｂ	明褐色	50%	No.2088。内面「一」状に暗赤色顔料塗彩　朱書か
33	土師甕	(21.5)	10.5		ＢＣＤＧ	Ａ	褐色	25%	No.2136・1690。
34	土師甕	21.4	9.6		ＡＢＤ	Ａ	淡褐色	25%	No.1863・1875他。
35	土師甕	22.4	14.7		ＡＢ	Ａ	淡褐色	70%	No.1742・1805他。口縁部全周
36	土師甕	(21.6)	13.4		ＡＢＣ	Ａ	褐色	25%	No.128・753他
37	土師甕	22.8	8.1		ＡＢＧ	Ａ	褐色	25%	No.1566
38	土師甕	(21.8)	13.7		ＡＣ	Ａ	明褐色	35%	No.1728・1736他
39	土師甕	(22.4)	6.0		ＡＢ	Ａ	褐色	25%	No.2（床）
40	土師甕	(21.8)	6.6		ＡＢＣ	Ａ	明褐色	50%	No.1608・1611他。歪みあり
41	土師甕	(24.2)	8.3		ＢＧ	Ｂ	褐色	20%	No.197・2143他
42	土師甕	(22.9)	5.6		ＡＢ	Ａ	褐色	25%	No.54
43	土師壷	(25.0)	7.7		Ａ	Ａ	褐色	25%	No.2111
44	土師甑	(25.0)	6.8		ＡＣ	Ａ	明褐色	25%	No.6・149
45	土師甕		6.3	6.0	ＡＢ	Ａ	明褐色	60%	No.1200・1436
46	土師甕		8.5	4.8	ＡＣ	Ａ	褐色	40%	No.1649・1664他
47	土師小型甕	(10.6)	3.3		ＡＢ	Ｂ	褐色	30%	No.1917。外面二次被熱
48	土師小型台付甕	10.6	5.9		ＡＢＤ	Ａ	褐色	60%	No.188・193。外面煤付着
49	土師小型台付甕	(13.0)	5.7		ＡＢ	Ｂ	褐色	45%	No.4（床）
50	土師小型甕	13.6	7.2		ＡＢＧ	Ｂ	褐色	40%	No.1669・1992。
51	土師小型台付甕	(13.4)	6.7		ＡＢＤ	Ｂ	淡褐色	25%	No.1606
52	土師小型甕	(15.6)	15.4		ＢＣＤ	Ａ	褐色	35%	No.1833・1902他。外面二次被熱
53	土師竈形土製品	覆土。長さ5.0cm。幅5.4cm。厚さ7～9mm。胎土ＡＢＣ。焼成Ａ。褐色。土師質で堅緻							
54	須恵細頸短頸壷	6.2	11.0		Ｃ片	Ｃ	灰黒色	60%	No.886・1821。末野産。肩部で接合か
55	須恵長頸瓶	(12.0)	5.0		Ｈ	Ａ	灰色	25%	No.2119。湖西産。内面自然降灰
56	須恵長頸瓶	12.5	(27.4)	7.6	Ｆ	Ａ	灰色	25%	No.1713・2082。湖西産。3片あり接合しない
57	須恵短頸壷	(13.0)	3.0		Ｃ片	Ａ	暗灰色	10%	No.1721。末野産
58	須恵蓋	(10.0)	1.6		Ｂ	Ａ	淡灰色	15%	覆土上層。秋間産か。かえり径8.4cm
59	須恵蓋	12.2	3.0		Ｃ片	Ａ	灰色	80%	No.324・551他。末野産。かえり径10.0cm
60	須恵蓋	(12.7)	1.8		Ｃ片	Ｂ	灰色	25%	No.1555・1556。末野産。かえり径10.0cm
61	須恵蓋	(14.2)	2.0		Ｃ片	Ｂ	灰色	10%	No.71。末野産。かえり径12.0cm
62	須恵蓋	(17.6)	2.1		Ｃ片	Ａ	茶褐色	15%	No.1570。末野産。かえり径15.2cm。つまみ欠失
63	須恵蓋	(18.4)	3.1		Ｃ片	Ａ	暗青灰色	30%	No.2091。末野産。かえり径15.5cm。つまみ欠失
64	須恵蓋	(19.6)	4.7		Ｃ片	Ａ	紫灰色	30%	No.1719。末野産。かえり径17.0cm。ﾛｸﾛ左回転
65	須恵蓋	(20.0)	2.2		ＢＣ片	Ｂ	灰色	15%	No.277。末野産。かえり径16.8cm
66	須恵蓋	(20.6)	2.7		Ｃ片	Ａ	灰色	20%	No.1420・1422他。末野産。かえり径16.8cm
67	須恵蓋	(14.3)	1.2		Ｃ片	Ｃ	灰色	5%	覆土。末野産。中型か小型の無かえり蓋
68	須恵蓋	(19.8)	1.3		Ｃ	Ｂ	灰色	5%	覆土。末野産か。口径やや不安定 大型の無かえり蓋
69	須恵蓋		1.6		ＢＣ	Ｂ	灰色	90%	No.1784。末野産。つまみ径3.9cm
70	須恵蓋		1.9		Ｃ片	Ｂ	黄灰色	80%	覆土。末野産
71	須恵蓋		1.2		ＢＣ片	Ｂ	灰色	90%	No.1689。末野産。つまみ径3.4cm
72	須恵坏	(11.0)	3.9	(7.8)	Ｃ片	Ａ	灰色	40%	No.3(床)。末野産　底部２ａ手法
73	須恵坏	(11.0)	3.8	8.2	Ｃ片	Ａ	暗灰色	25%	No.1572。末野産　底部２ａ手法
74	須恵坏		2.8	(7.2)	ＢＣ片	Ａ	灰褐色	20%	No.1574。末野産。底部Ａ１ａ手法
75	須恵坏	(14.5)	3.8		Ｃ片	Ａ	灰色	10%	No.1136。末野産
76	須恵坏	(16.7)	4.2	(10.2)	Ｃ片	Ｂ	暗灰色	15%	No.516・799。末野産。底部Ａ３ｂ手法
77	須恵坏	(15.8)	4.1	13.0	Ｃ片	Ａ	灰色	55%	No.1573。末野産　底部３ａ手法
78	須恵坏	(18.6)	5.0		Ｃ片	Ｃ	黄灰色	30%	No.2016・2018他。末野産。底部３ａ手法
79	須恵坏	(17.6)	4.8	(11.6)	ＢＤ片	Ｂ	暗黄灰色	35%	No.1741・1749他。末野産。底部３ａ手法
80	須恵坏		1.5	12.2	Ｃ片	Ｂ	淡灰色	45%	No.1882。末野産。底部Ａ３ｃ手法

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
81	須恵円面硯		3.4	(21.0)	B片	A	灰色	15%	覆土。ＳＪ63と接合。末野産。方形透し+刻み加飾
82	須恵脚付盤		2.7	(12.0)	ＢＣ片	A	青灰色	15%	№19。末野産。瓶か盤脚部か
83	須恵甕				C片	A	暗灰色		№692·2083。末野産。大甕胴下部片
84	須恵甕				C片	B	黄灰色		№9·408。末野産。大甕胴部片
85	須恵甕				C片	A	暗灰色		№18。末野産
86	須恵甕				C片	B	淡灰色		№2105。末野産。外面平行タタキ・内面当具痕
87	土製支脚		(15.5)		A	B	明褐色	40%	№15·1379他
88	土錘	№1734。長さ4.3cm。最大径1.3cm。孔径0.3～0.4cm。重さ5.6ｇ。胎土ＢＣ。焼成Ａ。褐色。残存100%							
89	不明鉄製品	№933。残長3.0cm。棒状							

転ヘラケズリ。80も大型坏と思われる。底部ヘラ切り後、外縁部と体部下端は回転ヘラケズリ。中心部にはヘラが届いていない。81は円面硯脚部で、長方形透しと未貫通の刻みがみえる。82は盤脚部か。83～86は甕。87は土製支脚である。

須恵器は312片出土した。坏は140点・甕48点（いずれも末野産）、蓋は110点あり、末野産が109点、秋間産１点。壺・瓶類は11点あり、４点が末野産、湖西産が７点である。円面硯・高台坏・盤？は各１点あり、いずれも末野産である。時期は熊野Ⅱ期と考えられる。

Ａ区第13号住居跡（第37図）

第13号住居跡は48·49－11グリッドに位置する。第18号土壙がカマド上面に重複していた。平面形は方形で、規模は長軸長3.70ｍ、短軸長3.35ｍ、深さ0.32ｍである。主軸方位はＮ－100°－Ｅを指す。

床面は平坦で、カマド前面から住居中央付近を中心に堅く踏み固められていた。埋土は焼土・炭化物を多量に含む暗褐色から黒褐色土を基調とし、床面に炭化材が遺存していたことから、いわゆる焼失家屋と考えられる。

カマドは東壁に設置され、上面は第18号土壙の攪乱を受けている。袖の遺存状態は悪く、白色粘土が僅かに確認された程度である。燃焼部は壁を掘り込み、底面は皿状に窪む。第５・６層下面が火床面に相当するものと推定される。

ピットは１本検出されたが、柱穴にはならない。貯蔵穴はカマド右脇に設けられていた（１号貯蔵穴）。楕円形で、規模は長径84cm、短径60cm、深さ54cm。カマド左脇にも土壙が１基検出されたが、上面に貼床が施されていた。規模は長径108cm、短径72cm、深さ20cmである。２号貯蔵穴としたが、掘り方の可能性もある。壁溝は検出されなかった。

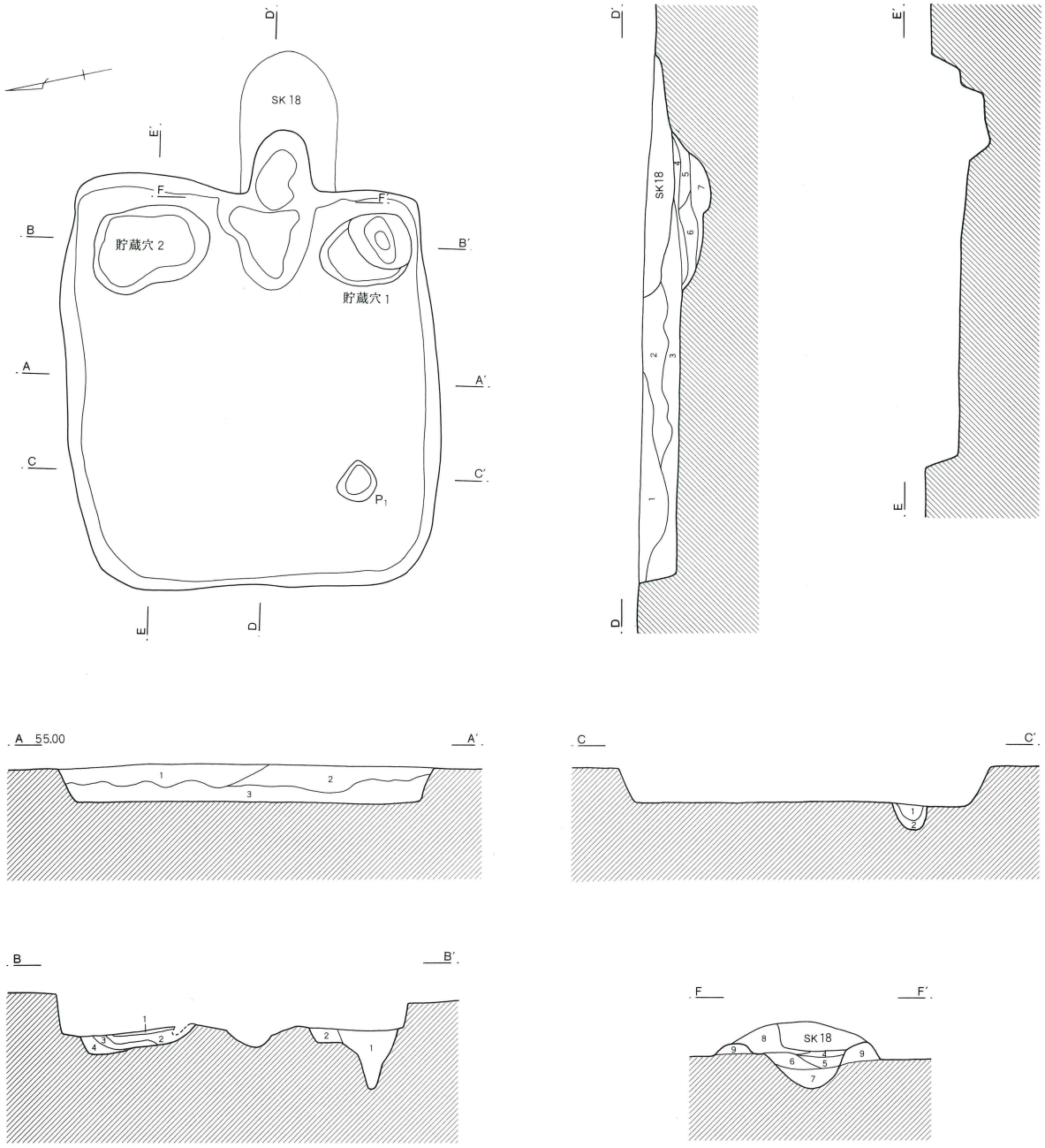
出土遺物は土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・蓋・高台付椀・鉢がある（第39図）。遺物は全体に浮いているものが多く、特にカマド左脇からは遺存率の高い土師器坏、須恵器坏がまとまって出土した。第38図１と５の土師器坏、10の土師器坏と12の須恵器坏は２枚重なった状態で出土した。棚状施設など、壁外、または上部から転落した可能性があろう。

第39図１～10は土師器坏。底部は平底または弱い丸底風で、９を除き、体部のヘラケズリ調整は施されない。11～15は須恵器坏で、底部は回転糸切り離し。11・14・15は末野産、13は南比企産である。12は全体に厚手で胎土は細かい。産地不明。群馬産の可能性がある。16・17は末野産の高台椀と椀蓋。19はすり鉢と思われる。20～25はコの字状口縁甕である。口縁部の屈曲はあまり強くない。

第15表　Ａ区第13号住居跡出土遺物観察表（第39図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	12.1	3.6		ＡＢＣＤ	A	褐色	85%	№101
2	土師坏	12.0	3.8		ＢＣ	A	褐色	95%	№106
3	土師坏	(12.3)	3.4		ＣＤ	A	褐色	55%	№77 №117床直 覆土。内面指押圧痕
4	土師坏	12.0	3.7		ＢＣＥ	A	褐色	85%	№241。指押圧痕明瞭

第37図　A区第13号住居跡



SJ13
1　暗褐色土　焼土粒子・微細なローム粒子少量
2　暗褐色土　焼土粒子多量。ロームブロック少量
3　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多量
　　ロームブロック少量
4　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子やや多量
　　ローム粒子・白色粘質土
5　白色粘質土　最下層部焼土化
6　黒色土　炭化物粒子多量。焼土粒子少量
7　暗褐色土　白色粘質土・ロームブロック混入
8　暗褐色土　白色粘質土・ロームブロック混入
9　白色粘質土　焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子
　　少量

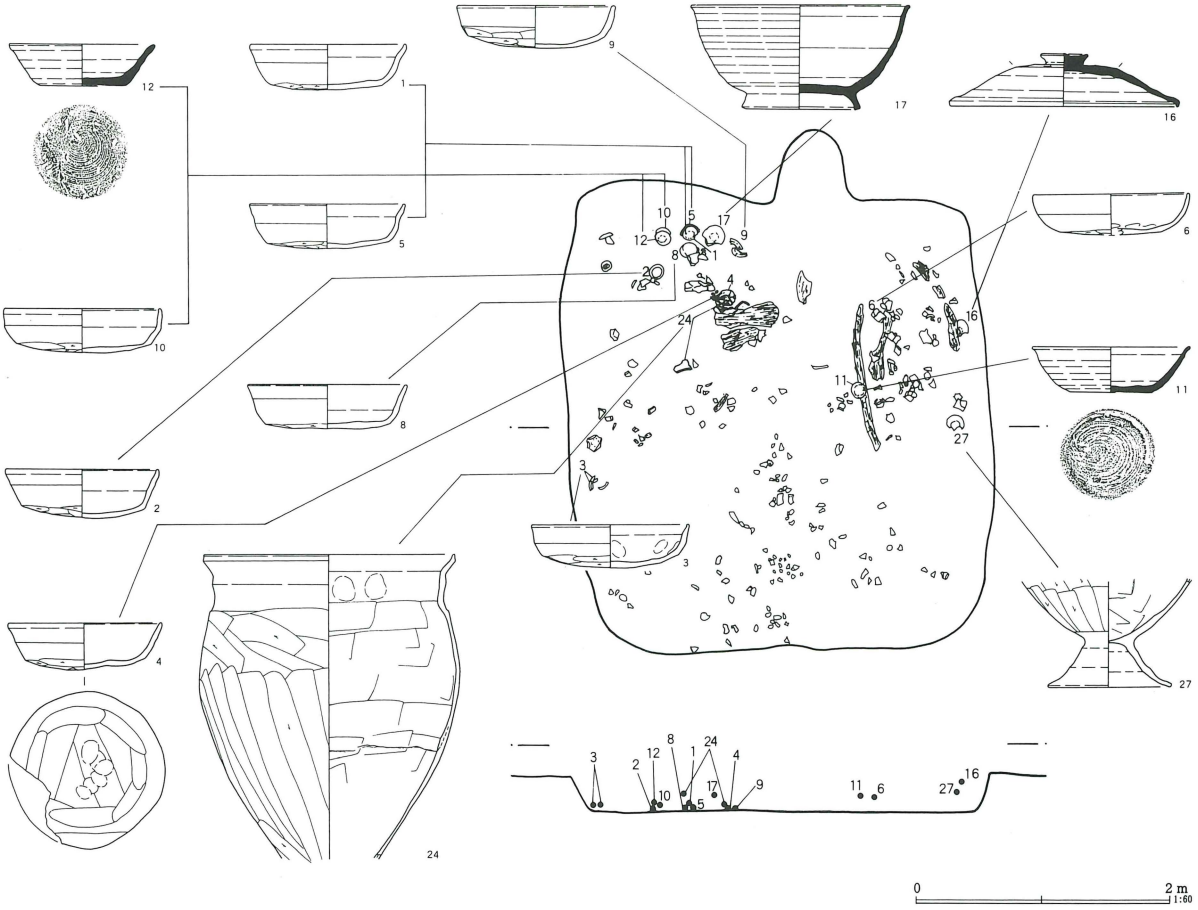
貯蔵穴1
1　暗褐色土　焼土粒子やや多量。炭化物粒子・ローム粒子少量
2　明褐色土　焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子・白色粘質土
　　粒子少量

貯蔵穴2
1　明褐色土　焼土粒子・ローム粒子少量
2　明褐色土　ロームブロック・焼土粒子多量
3　暗褐色土　ローム粒子多量
4　黒褐色土　ローム粒子をブロック状に混入

ピット1
1　黒褐色土　ローム粒子少量
2　黒褐色土　ロームブロック混入

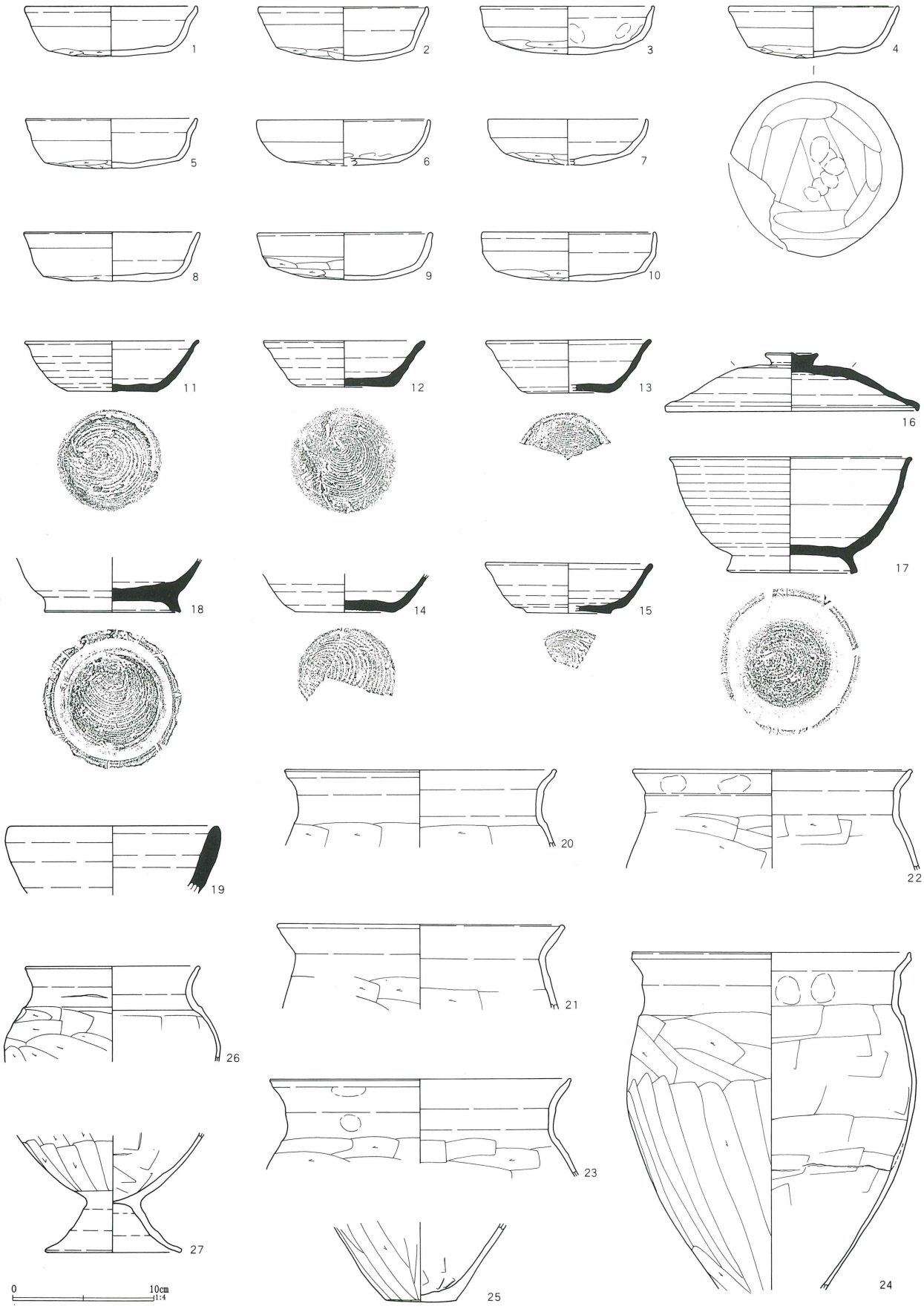
0　2 m　1:60

第38図　A区第13号住居跡遺物分布図



番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
5	土師坏	12.2	3.5		ＡＢＣ	A	褐色	75%	№102。
6	土師坏	(12.2)	3.2		ＡＢＣ	A	淡褐色	30%	№134。内面指押圧痕
7	土師坏	(11.3)	3.2		ＡＢＣ	B	褐色	35%	覆土
8	土師坏	12.5	3.5		ＡＢＣ	A	褐色	100%	№103
9	土師坏	12.3	3.4		ＡＢＣ	A	暗褐色	95%	№240 覆土。口縁部外面煤付着
10	土師坏	12.3	3.5		ＣＤ	A	褐色	90%	№105。口縁部煤付着
11	須恵坏	12.3	3.6	6.4	ＣＥ片	B	黄灰色	100%	№131。末野産。底部Ｂ０手法
12	須恵坏	11.3	3.2	6.8	Ｅ	B	灰褐色	100%	№104。産地不明。底部Ｂ０手法
13	須恵坏	(11.6)	3.7	(6.0)	Ｅ針	A	灰色	25%	№38。南比企産。底部Ｂ０手法
14	須恵坏		2.7	7.0	Ｅ片	B	黄灰色	40%	№49。末野産。底部厚い。底部Ｂ０手法
15	須恵坏	(11.8)	3.5	(6.0)	ＢＥ片	A	灰色	20%	№82。覆土。末野産。底部Ｂ０手法
16	須恵蓋	(17.8)	4.2		ＣＥ片	B	黄灰色	50%	№132。末野産。つまみ径3.8cm
17	須恵高台椀	17.2	8.2	8.5	ＣＥ片	B	灰褐色	95%	№236･239。末野産。底部回転糸切り後高台貼り付け
18	須恵高台椀		3.8	9.6	ＤＥ片	B	黄灰色	70%	№116。末野産。回転糸切り後高台貼り付け
19	須恵すり鉢	(14.8)	4.8		ＣＥ片	A	灰色	15%	覆土。末野産
20	土師甕	(19.2)	5.5		ＡＢＣ	A	明褐色	20%	№14･115
21	土師甕	(20.2)	6.0		ＡＣＤ	A	褐色	10%	№9･164
22	土師甕	(19.6)	7.1		ＢＣＤ	A	褐色	15%	貯蔵穴
23	土師甕	(21.4)	7.0		ＡＢＣ	A	褐色	25%	№25 覆土
24	土師甕	(19.8)	24.0		ＢＣＥＧ	A	褐色	40%	№84･111
25	土師甕		5.6	5.1	ＢＣＤ	A	褐色	45%	№5･11他
26	土師小型台付甕	(12.3)	6.7		ＡＢＣ	A	褐色	25%	№133･166 覆土
27	土師小型台付甕		8.4	9.5	ＡＣＤ	B	褐色	60%	№35

第39図　A区第13号住居跡出土遺物



須恵器は155片出土した。高台椀を含む坏・椀類が106点（末野99・南比企３・産地不明４）、蓋27点（末野24・南比企３）、甕11点（末野10・不明１）、壺・瓶類10点（末野７・不明３）、磨鉢１点（末野）である。坏口縁部の外反は弱く、底径もまだ大きい。また、大振りの高台椀と椀蓋を含み、皿は器種組成に加わっていない段階である。時期は熊野Ⅴ期頃と考えられる。

Ａ区第14号住居跡（第40図）

第14号住居跡は47－７グリッドに位置する。西壁部は調査区外に延び、全容は不明である。平面形は方形系で、残存規模は長軸長2.22ｍ、短軸長1.56ｍ、深さ0.50ｍである。主軸方位はＮ－105°－Ｅを指す。

床面は概ね平坦で、堅く踏み固められていた。埋土の状態は、第１層を除くと、ロームブロックが霜降り状に含まれ、人為的に埋め戻された状況が観察された。

カマドは東壁の南端に設置される。埋土や壁面に被熱焼土がほとんどなく、カマドの存在に疑いをもったが、底面とその前面に灰・焼土が散布していたこと、埋土中に白色粘土が多く堆積していたことからカマドと認定した。袖は検出されず、底面の掘り込みもなく、床面と同一レベルで続く。ピットは１本検出されたが、柱穴とは異なるであろう。

出土遺物は極めて少なく、須恵器坏１点と土師器坏小片が２点検出されたに留まる。第40図１はカマド前面の床面から出土した須恵器坏である。口径13.6㎝、底径8.1㎝、器高3.9㎝。胎土に白色粒子・白色針状物質を含む。焼成は良好で、色調は淡青灰色。80％残存。註記№１。南比企産で、底部は回転糸切り後、周辺部回転ヘラケズリ調整が施されている。時期は熊野Ⅲ期と考えておきたい。

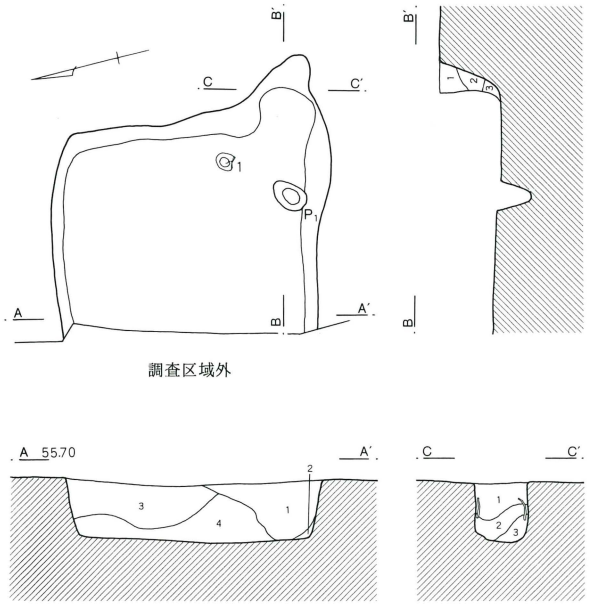
Ａ区第15号住居跡（第41図）

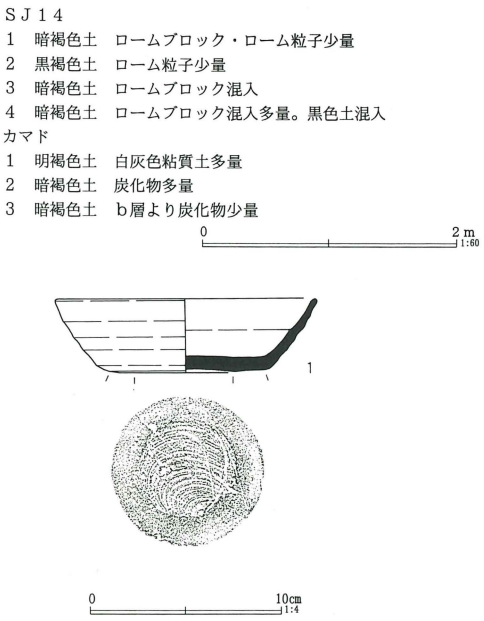
第15号住居跡は48－10･11グリッドに位置する。第１・43号溝跡により、上面から床面にかけて大きく攪乱され遺存状態は悪い。平面形は長方形で、規模は長軸長3.30ｍ、短軸長2.62ｍ、深さ0.20ｍである。主軸方位はＮ－45°－Ｅを指す。

床面は概ね平坦であるが、西部を中心に削平されていた。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土・黒褐色土を基調としていたが、堆積状況は不明瞭である。

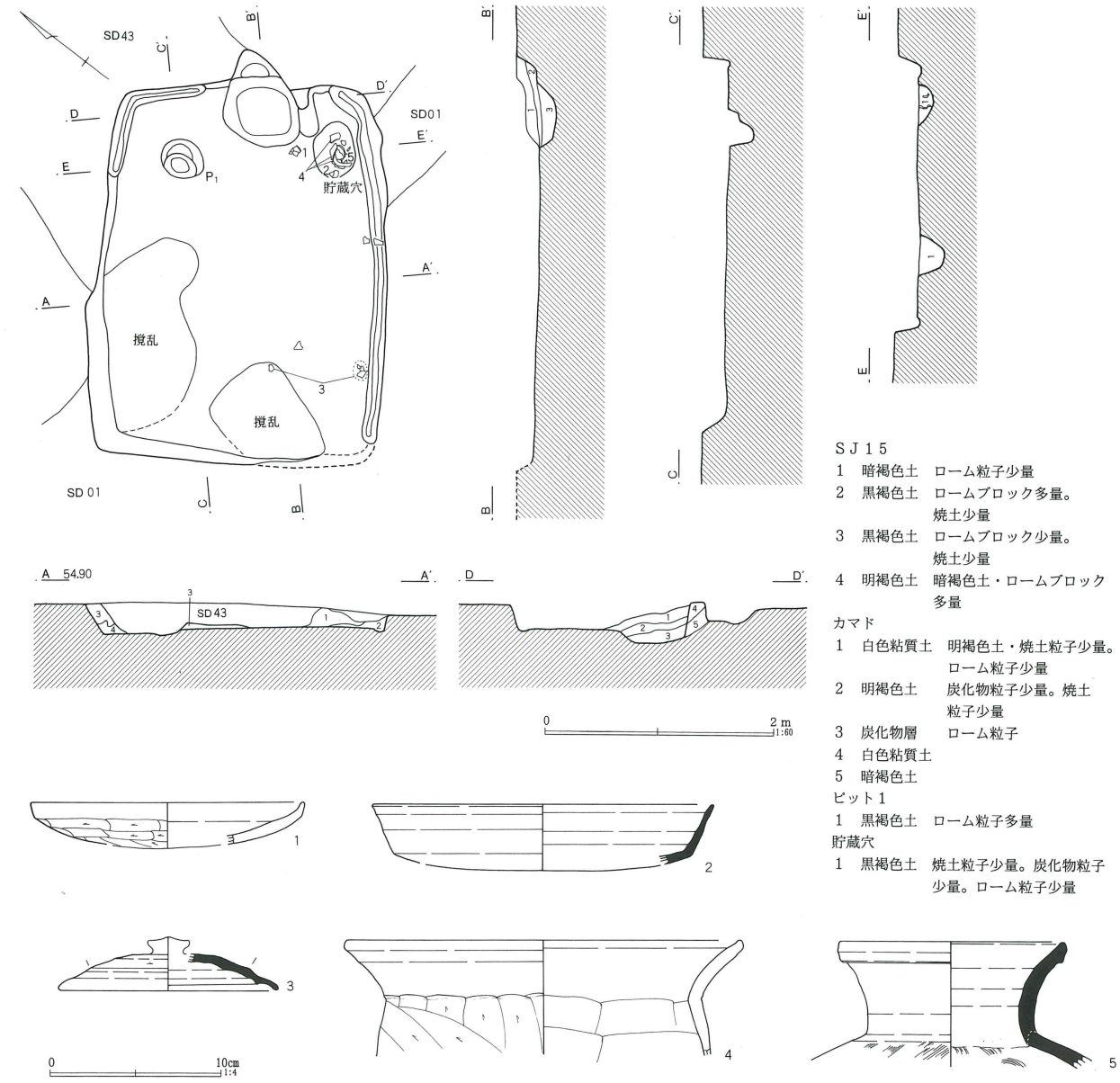
カマドは北東壁に設置される。上面を第43号溝跡に削平され遺存状態は良くない。燃焼部底面は床面よりも掘り下げられ、先端は壁を僅かに切り込んでいた。左袖部は溝跡によって大きく削平されていた。

第40図　Ａ区第14号住居跡・出土遺物





第41図　A区第15号住居跡・出土遺物



第16表　A区第15号住居跡出土遺物観察表（第41図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師皿	(16.0)	2.4		AB	B	褐色	20%	№2。床面
2	須恵盤	(20.0)	3.4	17.6	C片	A	淡褐色	10%	№3。貯蔵穴内。末野産。薄手で均質な作り
3	須恵蓋	12.7	2.1		C片	A	灰色	50%	№11·13。床面。末野産
4	土師甕	23.0	6.7		AC	B	淡褐色	55%	№4。貯蔵穴内
5	須恵短頸壷	13.0	7.3		BC片	A	暗灰色	80%	№5。貯蔵穴内。末野産

右袖部は暗褐色土の上に白色粘土を積み上げていたが、遺存状態は良くない。

貯蔵穴はカマド右脇のコーナー部に設置されていた。平面形は楕円形で、規模は長径48cm、短径36cm、深さ13cmである。ピットは1本検出された。壁溝は部分的に巡る。

出土遺物は少なく、土師器皿・甕、須恵器盤・蓋・壺がある（第41図1～5）。土師器皿（1）・須恵器蓋（3）は床面出土、須恵器盤（2）・壺（5）、土師器甕（4）は貯蔵穴内から出土した。須恵器盤（2）

の残存する底部にはヘラケズリ痕はみられない。末野産。３は口径11cm前後の小型坏に対応する蓋で、内面にかえりが付く。４の土師器甕は胴部器壁が厚く、タテ及びナナメ方向のヘラケズリが施されている。５の壺は胴部外面に平行タタキ、内面同心円当て具痕が残る。

須恵器は16片出土し、内訳は坏３点（末野２・南比企１）、盤１点（末野）、蓋４点（末野）、壺１点（末野）、甕７点（末野６・南比企１）である。時期は熊野Ⅰ期新相～Ⅱ期と考えられる。

Ａ区第16号住居跡（第42図）

第16号住居跡は45－８グリッドに位置する。南壁から東壁にかけて調査できたが、大半は調査区外に延びている。重複遺構との新旧関係は、第17号住居跡、第５号掘立柱建物跡を切り、第11号溝跡に切られていた。平面形は方形系と推定されるが、若干歪みがある。残存規模は長軸長2.42ｍ、短軸長1.50ｍ、深さ0.28ｍである。主軸方位は南壁を基準にするとＮ－100°－Ｅを指す。

床面は平坦で堅く踏み固められていた。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で構成され、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマド・ピットなどの付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器・須恵器細片が覆土中から検出されたが、遺構に確実に伴うものはない。

時期は重複遺構との関係から９世紀後半またはそれ以降と考えられ、中世の竪穴状遺構となる可能性もある。

Ａ区第17号住居跡（第42図）

第17号住居跡は調査区南西部の45･46－８グリッドに位置する。重複する第28号住居跡を切り、第16・18号住居跡、第５号掘立柱建物跡、第11号溝跡に切られており、正確な規模は不明である。平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長5.58ｍ、短軸長5.16ｍ、深さ0.49ｍである。主軸方位はＮ－９°－Ｅを指す。

床面は北東隅がやや軟弱だった他は、全体に堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックが多量に含まれる層（第３層）を含み、南東側から埋め戻された様相がうかがえる。

カマドは北壁に設けられていた。燃焼部の大半は第11号溝跡に破壊され、燃焼部と煙道部先端が僅かに残存するのみである。側壁上部は被熱し、埋土には焼土が多量に含まれていた。

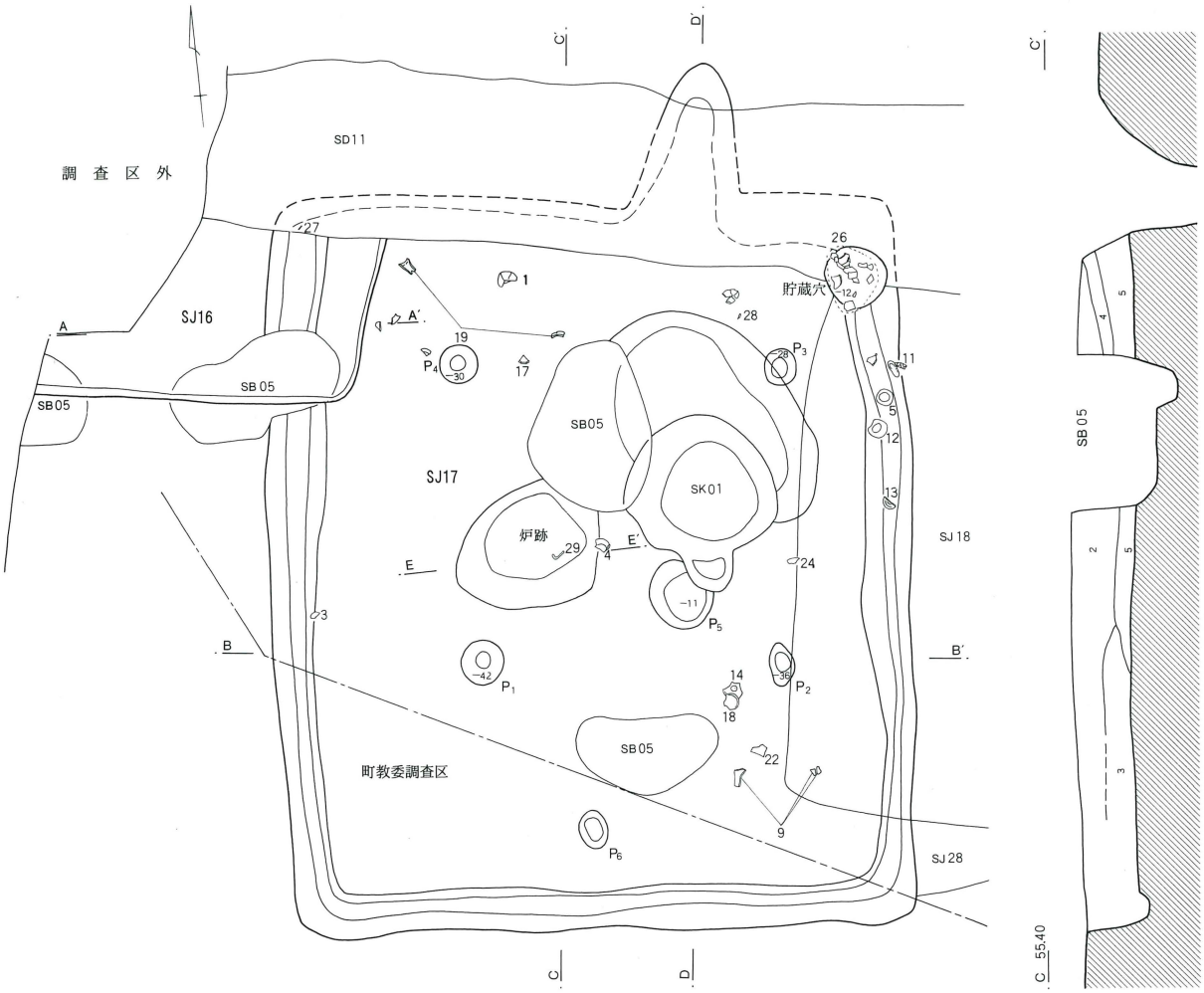
貯蔵穴は不明確であるが、北東コーナー付近に遺物を包含する掘り込みがあり、あるいは貯蔵穴の一部かとも思われた。但し、壁溝と重なり、溝跡によって北半は破壊されているため確証は得られなかった。

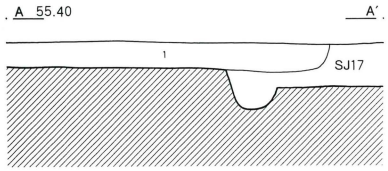
ピットは６本検出された。Pit１～４は主柱穴である。住居中央部の床面には浅い炉跡状の焼土層が堆積していた。上面に灰層が被り、その下面は赤く被熱していた。鉄滓等の遺物もなく性格は不明。北端部は第５号掘立柱建物跡によって切られていた。また、カマド前面の床面には土壙が掘り込まれていた（SK１）。上面に灰層と硬化した床面が形成されていたことから、床下土壙と考えられる。底面には黒色炭化物層が形成されていた（第16層）。壁溝は全周する。深さ５～10cm。

出土遺物は土師器坏・暗文坏・甕・壺、須恵器坏・椀・蓋・高台付皿・壺・甕と鉄製品がある（第43・44図）。

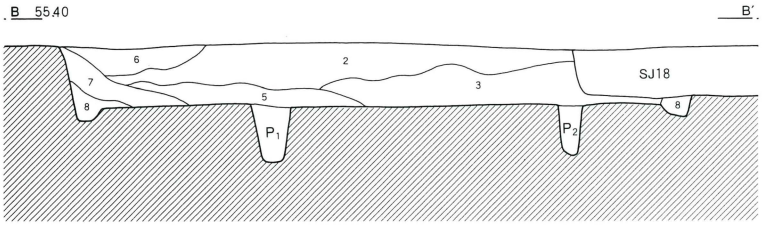
第43図１～４は土師器坏。口縁部は内彎気味に納め、底部はやや丸底風である。５は平底暗文坏で、内面放射十螺旋暗文。底部と体部下位がヘラケズリされる。東壁際から12の須恵器坏と並んだ状態で出土した。６～８は蓋。９は南比企産の須恵器無台椀である。10～17は須恵器坏である。10は口径の大きい扁平な坏で、南比企産。12・13は口径13.5cmほどの末野産の坏。底部は回転糸切り後無調整である。14の坏は18の高台付皿と共に遺構確認面から出土したもので、本住居に伴うものではなかろう。19はコップ形土器で、南比企産。底部と体部下端がヘラケ

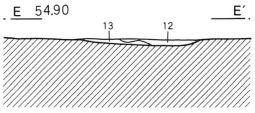
第42図　A区第16・17号住居跡





ＳＪ１６
1　暗褐色土　ロームブロック混在

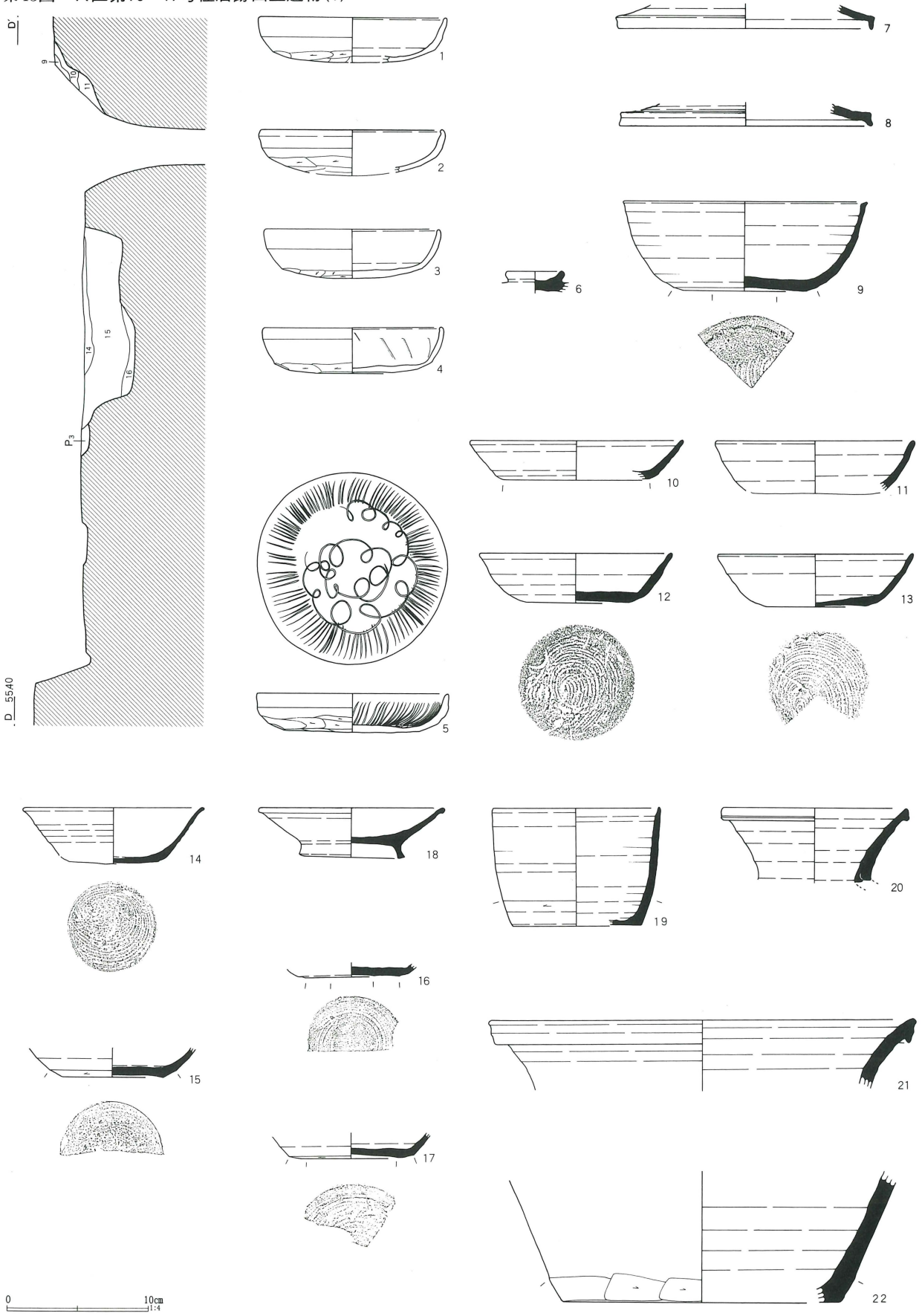




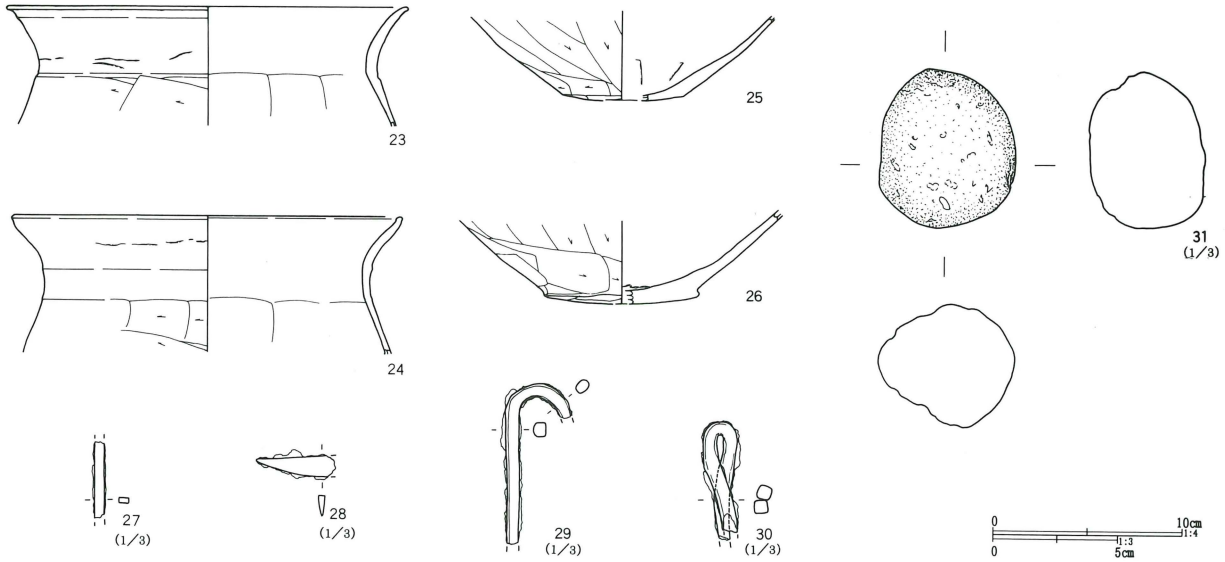
ＳＪ１７
2　褐色土　小ロームブロック・焼土粒子多量
　　炭化物・粘土粒子少量
3　明褐色土　灰白色粘土ブロック・ロームブロック
　　焼土粒子多量
4　暗褐色土　炭化物粒子・ローム粒子少量
5　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子霜降状に混入
6　黒褐色土　ロームブロック多量
7　褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
8　明褐色土　ローム粒子少量
9　暗褐色土　焼土ブロック混入
10　灰白色土　粘質土・焼土ブロック多量
11　灰白色土　焼土微量
12　灰層　焼土・炭化物混入
13　焼土
14　明灰褐色土　粘土・焼土・ローム含む
15　褐色土とロームブロックの混土層
16　黒色炭化物層

0　2 m　1:60

第43図　A区第16・17号住居跡出土遺物(1)



第44図　A区第16・17号住居跡出土遺物(2)



第17表　A区第17号住居跡出土遺物観察表（第43・44図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	13.2	3.2		A D	B	褐色	70%	№28。覆土下層
2	土師坏	(12.8)	3.0		A B	B	褐色	25%	覆土
3	土師坏	(12.4)	3.4	(10.0)	A B	B	褐色	35%	№35
4	土師坏	(12.5)	3.2	(11.2)	A	A	褐色	40%	№23。覆土下層
5	土師暗文坏	13.6	2.7		A B D	A	明褐色	95%	№17。壁溝上。内面放射＋ﾗｾﾝ暗文
6	須恵蓋		1.5		C F片	B	黄灰色	50%	覆土。末野産。蓋つまみ
7	須恵蓋	(18.0)	1.6		B針	A	灰色	5%	覆土。南比企産
8	須恵蓋	(17.9)	1.6		C片	A	青灰色	5%	覆土。末野産
9	須恵椀	(17.2)	6.3	(8.6)	B針	A	灰色	20%	№4・8。覆土下層。南比企産。底部B3ｄ手法
10	須恵坏	(15.0)	2.8	(10.4)	B C針	A	灰色	15%	覆土。南比企産。底部回転ヘラケズリ
11	須恵坏	(14.0)	3.5		C片	A	灰色	25%	№20。覆土。末野産
12	須恵坏	13.5	3.5	7.1	C片	A	灰色	95%	№16。壁溝上。末野産。底部B0手法
13	須恵坏	(13.8)	3.7	7.2	C F片	B	灰色	50%	№14 SK01内。末野産。底部B0手法
14	須恵坏	(12.6)	4.0	6.2	C F	A	淡褐色	65%	№11。確認面。末野産。底部B0手法。黒色粒子多量
15	須恵坏		2.1	7.2	C F片	A	灰色	50%	覆土。末野産。低部B3ｄ手法
16	須恵坏		0.8	6.5	C針	A	灰色	50%	覆土。南比企産。底部B3ｄ手法
17	須恵坏		1.7	(8.8)	C片	A	灰色	25%	№27。覆土上層。末野産。底部B3ｄ手法
18	須恵高台皿	13.0	3.6	6.6	C片	B	淡褐色	80%	№10。確認面。末野産
19	須恵コップ形	(11.8)	8.3	9.2	B針	A	紫灰色	25%	№26・32。覆土下層。南比企産。
20	須恵壷	(13.0)	5.2		B C	A	青灰色	10%	覆土。末野産
21	須恵甕	(30.0)	4.9		C片	A	黒灰色	5%	覆土。末野産
22	須恵甕		9.3	(19.6)	C片	B	灰白色	10%	№7。覆土下層。末野産
23	土師甕	(21.0)	6.3		A B D	A	褐色	15%	覆土
24	土師甕	(20.5)	7.2		A	A	褐色	15%	№12。床面
25	土師壷		4.5	6.4	A B	B	暗褐色	80%	覆土
26	土師壷		4.9	8.2	A B	B	褐色	70%	貯蔵穴内+№36。底部突出
27	不明鉄製品	№34。床面。残長3.0cm。棒状							
28	刀子？	№21。床面。残長3.1cm。切先部。鉄製							
29	不明鉄製品	№24。残長6.3cm。棒状屈曲							
30	不明鉄製品	残長4.6cm。棒状交差							
31	軽石	SJ16 №783 長径6.2cm。短径5.4cm。厚さ4.6cm。重さ95ｇ							

ズリされる。23・24は土師器甕。器壁は薄く、胴部はヨコ・ナナメ方向補ヘラケズリが施される。

須恵器は166片出土し、坏91点（末野69・南比企16・不明６）、椀１点（南比企）、高台椀３点（末野）、蓋

13点（末野10・南比企３）、甕52点（末野51・不明１）、壺・瓶類４点（末野３・不明１）、盤１点（末野）、コップ形土器１点（南比企）がある。末野産須恵器の比率が圧倒的に高い。

時期は熊野Ⅲ期と考えられる。

Ａ区第20号住居跡（第45図）

第20号住居跡は45－８グリッドに位置する。東壁部の周辺が調査されたのみで、大半は調査区外に延びている。北側には第51号土壙が重複するが、新旧関係は不明確である。平面形は方形系と推定され、残存規模は長軸長3.30ｍ、短軸長1.08ｍ、深さ0.60ｍである。主軸方位はＮ－90°－Ｅを指す。

床面はやや起伏をもち、堅く締まっていた。

埋土は下層にカマドから流出した白色粘土が堆積していた（第４層）。

カマドは東壁に２基検出された。第１号カマドは南側にあり、燃焼部は壁を切り込んで構築されていた。掘り込みは深く、第６・７層が灰層に相当するものと考えられる。袖はほとんど流出したものと思われ、断面観察によっても明確に把握することはできなかった。第２号カマドは北側にあり、煙道部が検出されたのみである。掘り込みも浅く床面まで達していない。遺存状態から第２号→第１号カマドに付け替えられたものと考えられる。

貯蔵穴はカマド脇の南東コーナー部に掘り込まれている。床面からの深さ18㎝。ピット・壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・蓋・高台椀・壺・高盤、鉄製品、不明土製品がある（第45図）。１・２は扁平、平底風の土師器坏。４～６は須恵器坏。いずれも底径は口径の1/2を上回っている。５はやや大振りである。９は高盤脚部。２条の線刻で加飾されるが、貫通していない。２単位または４単位の施文であろう。11～13は土師器甕。いわゆる「コ」の字状口縁甕であるが、11・12は口縁部の屈曲が弱く、13は典型的な形態になっている。14は円柱状の土製品で、用途不明。15は関箆被片刃箭鏃、16は刀子片である。

須恵器は53片出土し、坏36点、高台椀３点、蓋２点、高盤１点、甕10点、壺・瓶類１点がある。すべて末野産と考えられる。時期は熊野Ⅴ期に比定される。

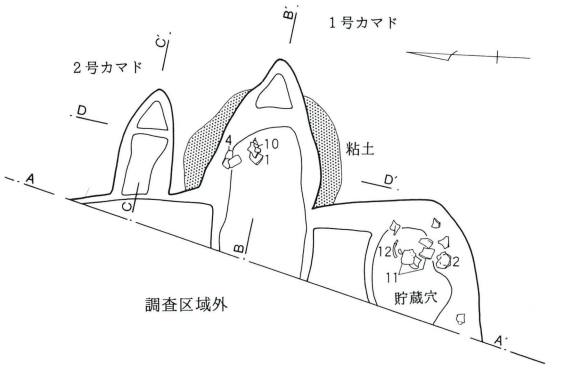
Ａ区第22号住居跡（第46図）

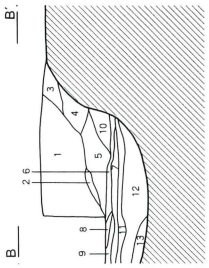
第22号住居跡は45－８グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第23・24号住居跡を切り、第21号住居跡に切られていた。平面形は方形で、規模

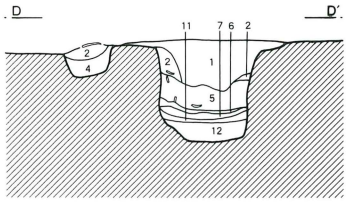
第18表　Ａ区第20号住居跡出土遺物観察表（第45図）

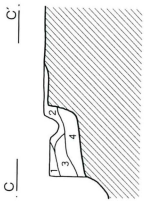
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	12.4	3.0	10.4	ＡＢＤ	Ｃ	黄褐色	65%	カマド+No.4。粉っぽい素地土 口縁部に爪先状の凹み
2	土師坏	12.3	3.5	9.7	ＡＢ	Ｂ	褐色	90%	No.13。貯穴上部
3	須恵蓋	(19.0)	1.4		片	Ｂ	淡灰色	10%	覆土。末野産
4	須恵坏	(12.0)	3.4	(6.6)	Ｃ片	Ｂ	灰白色	60%	No.18。カマド内　末野産　底部Ｂ０手法
5	須恵坏	(13.4)	3.9	(7.6)	Ｃ片	Ｃ	黄灰色	20%	No.20　覆土　末野産　底部Ｂ０手法
6	須恵坏	(11.6)	3.3	(6.4)	Ｃ片	Ｂ	灰色	35%	覆土。末野産　底部Ｂ０手法
7	須恵高台椀		3.2	7.6	Ｃ片	Ａ	暗青灰色	80%	覆土。末野産
8	須恵壺	(12.0)	4.2		ＢＣ片	Ａ	青灰色	20%	覆土。末野産
9	須恵高盤		5.9		ＣＤ	Ｃ	暗灰色	40%	覆土。末野産。高盤脚部。2条1単位の刻線。
10	土師小型台付甕		3.7	7.7	ＡＢ	Ａ	橙褐色	70%	No.16　カマド内
11	土師甕	(20.2)	14.3		ＡＢ	Ａ	褐色	30%	No.6・11　貯穴上部
12	土師甕	(19.8)	5.0		ＡＥ	Ａ	明褐色	30%	No.8　貯穴上部
13	土師甕	(19.4)	7.7		ＡＣ	Ａ	橙褐色	45%	覆土
14	不明土製品	カマド。残長3.1㎝。直径1.4㎝。重量5.26g。円柱状（中実）をなす。両端欠失。淡褐色							
15	鉄鏃	残長9.0㎝。片刃箭。関箆被　覆土							
16	刀子	カマド。残長6.4㎝。茎部							

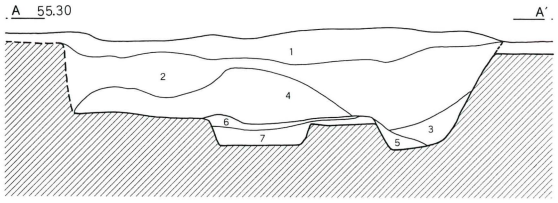
第45図　A区第20号住居跡・出土遺物









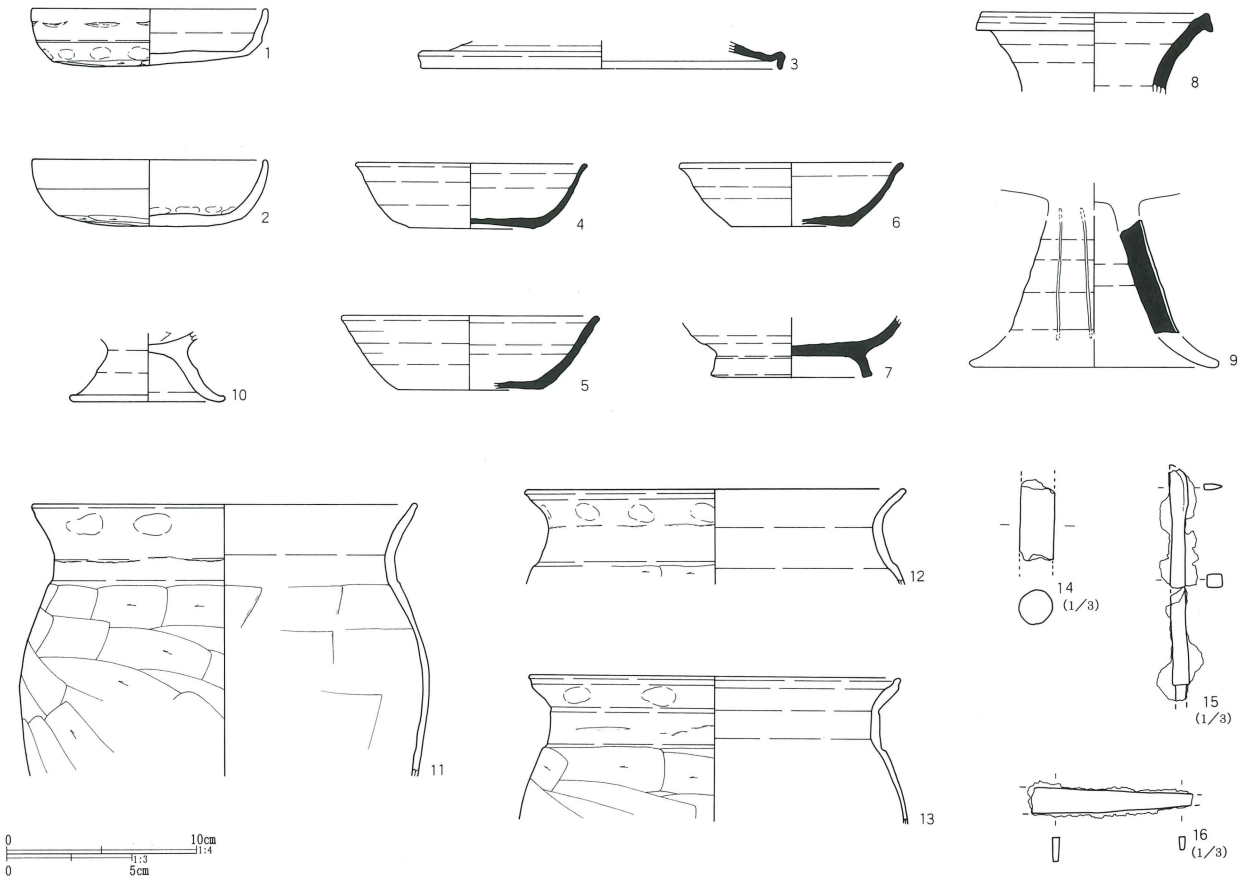


1号カマド
1　灰白色粘質土
2　焼土層
3　白色粘質土　　ローム粒子少量
4　暗灰褐色粘質土　焼土粒子多量
5　暗褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子少量
6　灰層　　灰多量
7　焼土層　　炭化物粒子　・焼土粒子多量
8　暗茶褐色土　　炭化物粒子・焼土粒子・白色粘質土多量。
9　黒褐色土　　焼土粒子・炭化物粒子多量
10　黒褐色土　　炭化物粒子・焼土粒子少量
11　黒色土　　灰を主体にカーボン粒子・焼土粒子混入
12　灰白色粘土　　ロームブロック・焼土ブロック混入
13　褐色土　　粘土粒子・焼土ブロック多量

ＳＪ２０
1　明灰褐色土　　暗褐色土混入。焼土粒子・白色粘土ブロック少量
2　明灰褐色土　　ロームブロック・ローム粒子少量
3　暗灰褐色土　　ロームブロック多量
4　灰白色粘質土　焼土粒子少量
5　黒色土　　カーボン粒子・焼土粒子混入
6　灰白色粘土
7　褐色土　　焼土粒子多量

2号カマド
1　黄灰色土　焼土粒子混入
2　焼土　　黄灰色粘土混入
3　明褐色土　焼土ブロック・焼土粒子・黄灰色粘土混入
4　黄褐色土　ローム粒子主体。褐色土混入

0　2m　1:60



は長軸長3.65ｍ、短軸長3.42ｍ、深さ0.07ｍである。主軸方位はＮ－105°－Ｅを指す。

床面は第24号住居跡の覆土中に形成され、概ね平坦であるが、硬化面は認められなかった。南壁部を中心とした部分は第21号住居跡に削平されていた。

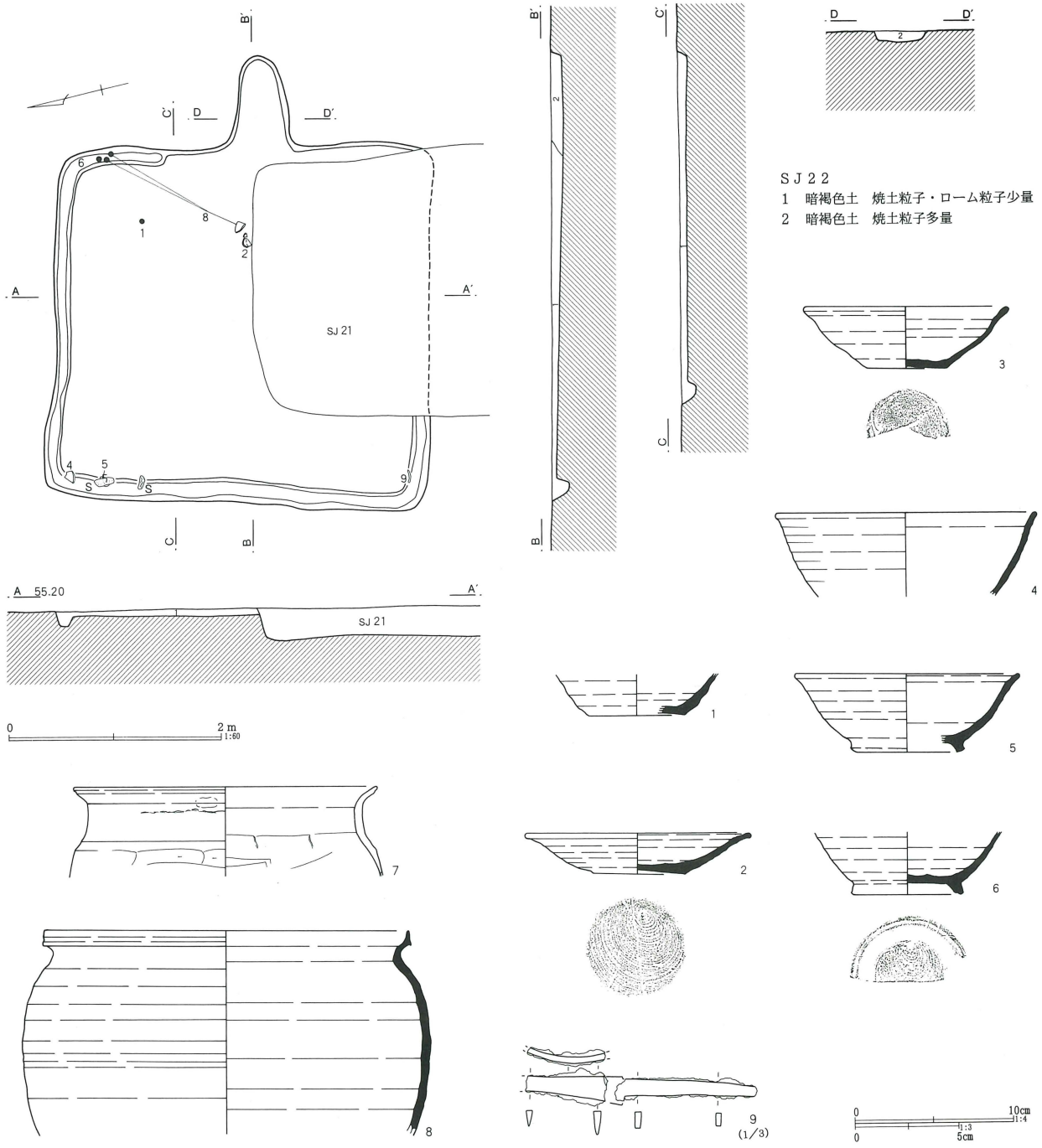
埋土は焼土混じりの暗褐色土を基調としており、覆土が浅いために堆積状況は不明確である。

カマドは東壁のほぼ中央に設置されていた。燃焼部は壁を切り込んでおり、底面の掘り込みは浅い。埋土には焼土粒子が多量に含まれているが、被熱層、灰層は検出されなかった。

ピットは検出されなかった。壁溝はカマドの周辺を除いて巡る。

出土遺物は少ない。須恵器坏・皿・高台椀・鉢、

第46図　Ａ区第22号住居跡・出土遺物



第19表　A区第22号住居跡出土遺物観察表（第46図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	須恵坏		2.6	(6.0)	B	A	明灰色	20%	№9。覆土。素地土緻密。産地不明。底部B0手法
2	須恵皿	14.0	2.6	5.9	D片	B	褐色	70%	№17。覆土。末野産
3	須恵坏	(12.6)	3.8	5.0	B	A	灰色	35%	覆土。素地土緻密で薄手。産地不明。底部B0手法
4	須恵高台椀	(16.2)	5.3		C片	B	灰色	20%	№12。覆土。末野産
5	須恵高台椀	(14.0)	4.9	(6.4)	C片	D	灰褐色	20%	№13。覆土。末野産
6	須恵高台椀		4.0	6.8	C片	B	淡灰色	35%	SJ23 №5。末野産
7	土師甕	(19.0)	5.6		AB	A	褐色	10%	カマド
8	須恵鉢	(23.0)	12.8		BC	A	灰色	15%	№5･6他。覆土。産地不明。素地土比較的緻密
9	刀子	№15　床直。残長10.4cm。2片接合しないが同一個体であろう　位置は推定　刃部分は若干湾曲する							

土師器甕、刀子が検出された（第46図）。第46図９の刀子以外は床面よりも浮いた状態で出土した。１・３は須恵器坏。末野産かとも思われるが、胎土が比較的緻密。底部は回転糸切り後無調整。２は須恵器皿。４～６は高台椀。４は大振りである。７は土師器甕で、口縁部は「コ」の字状に屈曲する。８は須恵器鉢。比較的薄手の造りである。

須恵器は42片出土し、器種別出土数は坏26点（末野産23・南比企産１・産地不明２）、高台椀３点（末野）、蓋４点（末野）、鉢４点（不明）、甕５点（末野）となる。時期は熊野Ⅵ期と考えられる。

A区第23号住居跡（第47図）

第23号住居跡は調査区南西部の45－８・９グリッドに位置する。第24号住居跡の内側に重なっている。重複遺構との新旧関係は、第24号住居跡を切り、第21・22号住居跡、第38号掘立柱建物跡、第34号土壙に切られていた。平面形は方形で、規模は長軸長3.72ｍ、短軸長3.42ｍ、深さ0.17ｍである。主軸方位はＮ－０°を指す。

床面はやや凹凸をもつが、バリバリに踏み固められていた。埋土は、ロームブロック混じりの暗褐色土を基調としており、大きな土層変化は観察されなかった。

カマドは北壁に設置される。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれ、底面は擂鉢状に窪む。袖はロームブロックと白色粘土混じりの褐色土で構築されるが、かなり流出した状況であった。ピットは検出されなかった。壁溝は全周する。深さ５cm程度。

出土遺物は少なく、土師器暗文坏・台付甕、須恵器坏、砥石が検出された（第47図）。１は平底暗文坏。２は南比企産の須恵器坏。３は末野産の須恵器坏。カマド内から出土した。底部は回転糸切り後、手持ちで周辺を削っている。５は小型台付甕、６は砥石である。須恵器は45片出土し、内訳は坏が34点、高台椀が１点、甕が４点、鉢が１点、蓋が５点となる。産地別の総計は、末野産28点、南比企産７点、不明10点となる。時期は熊野Ⅲ期新相～Ⅳ期と考えられる。

A区第24号住居跡（第48図）

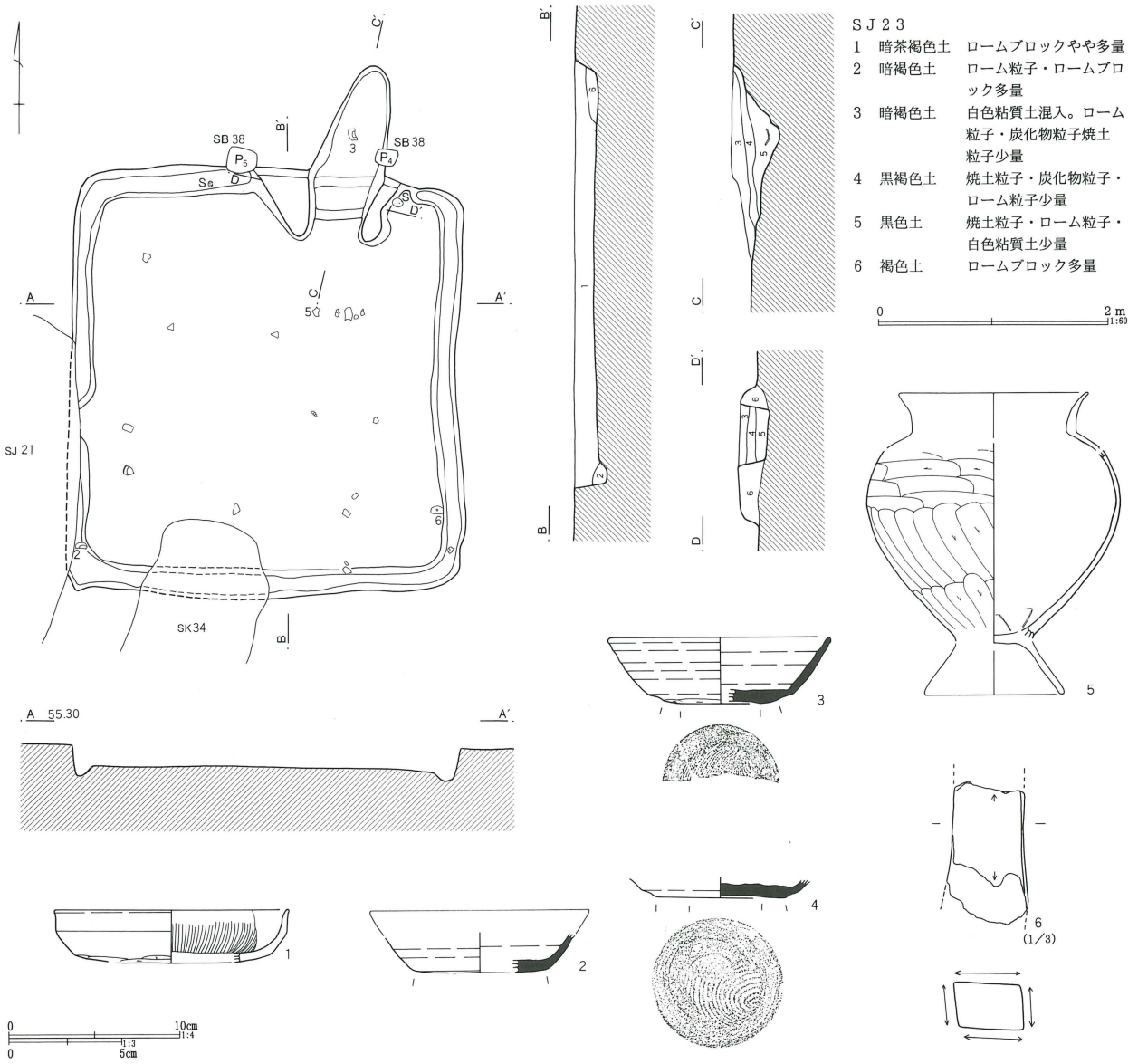
第24号住居跡は調査区南西部の45－８・９グリッドに位置する。第21～23号住居跡、第38号掘立柱建物跡、第34・41号土壙と重複し、本住居跡が最も古い。平面形は整った方形で、規模は長軸長5.85ｍ、短軸長5.80ｍ、深さ0.17ｍである。主軸方位はＮ－17°－Ｗを指す。

残存する床面は、平坦で堅く踏み固められていた。埋土はロームブロックを多く含む褐色系土が基調となり、埋め戻された可能性もある。

カマドは北壁に設置され、燃焼部は壁を僅かに切り込んでいた。袖の遺存状態は良くないが、ローム混じりの褐色土の上に白色粘土を積み上げて構築されていた。第２～４層が天井部崩落土、第５層が灰層と考えられる。

貯蔵穴はカマド脇の北東コーナーに掘り込まれている。楕円形プランで、規模は長径102cm、短径90cm、深さ50cmである。

第47図　A区第23号住居跡・出土遺物



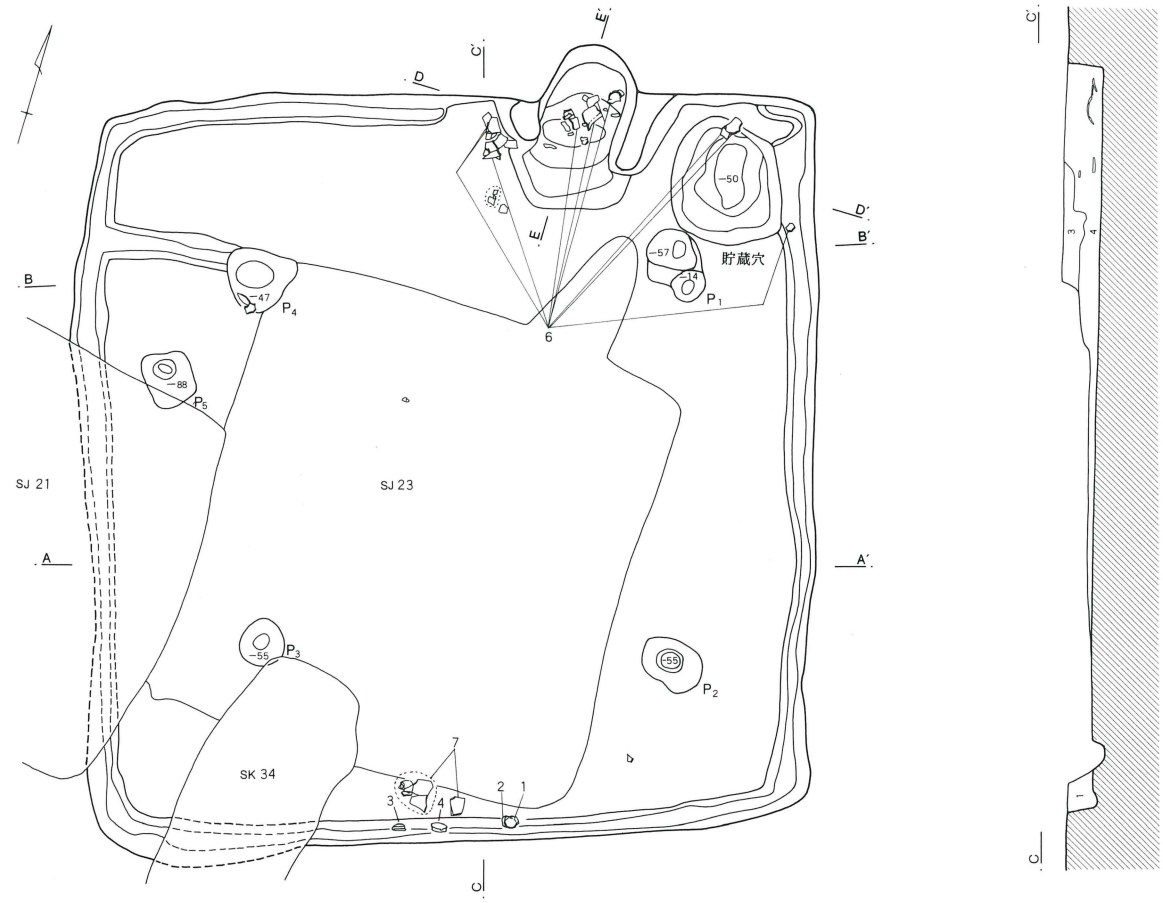
第20表　A区第23号住居跡出土遺物観察表（第47図）

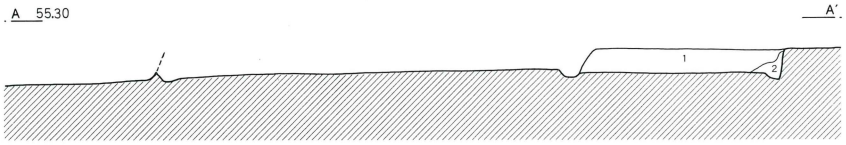
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師暗文坏	(13.6)	3.0	(11.4)	A B	B	褐色	15%	覆土。内面放射暗文
2	須恵坏		2.2	(7.6)	針	A	灰色	25%	№6。覆土。南比企産。底部回転ヘラケズリ
3	須恵坏	(12.8)	3.8	(6.7)	B C D片	A	暗灰色	50%	カマド。末野産。底部B2b手法
4	須恵坏		1.0	7.4	C D片	C	褐色	95%	カマド袖。末野産。底部B2b手法
5	土師台付甕		11.3		A B	A	褐色	35%	№10。覆土
6	砥石	残長6.2cm。重量75.9g。凝灰岩製。覆土。上下両端欠失。四面とも使用され平滑							

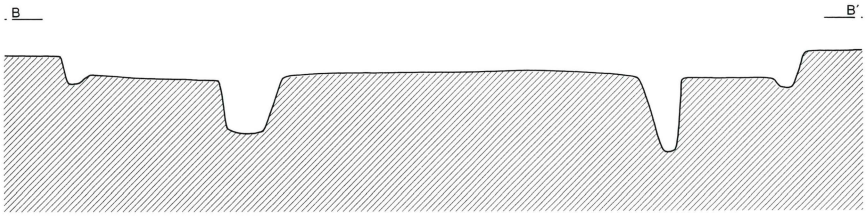
ピットは5本検出された。Pit 1～4が主柱穴である。深さ47～57cm。壁溝はほぼ全周する。深さ5～10cm。また、西壁からPit 4に向かって溝が延びていた。間仕切り溝の可能性もあろう。

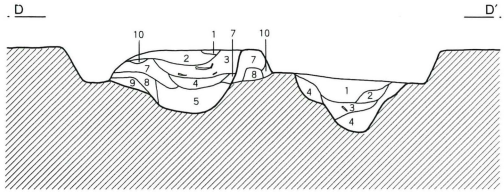
出土遺物は土師器坏・暗文坏・甕がある（第49図）。1～5は土師器坏である。1・2は内屈口縁の北武蔵型坏で、南壁際から2枚重なった状態で出土した（1が上、2が下）。3は有段口縁坏、4は暗文坏でいずれも南壁際からまとまって出土した。5は4と同タイプの暗文坏で、貯蔵穴内出土。6・7は土師器甕。6はカマドとその周囲から散乱した状態で出土した。7は1～4の土師器坏と共に南壁付近から出土した。

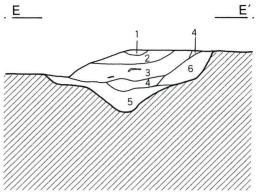
第48図　A区第24号住居跡











ＳＪ２４

1　暗茶褐色土　ロームブロック・ローム粒子多量
　　炭化物粒子少量
2　黒褐色土　ローム粒子少量
3　暗褐色土　ロームブロック多量
4　明褐色土　ロームブロック混入

カマド

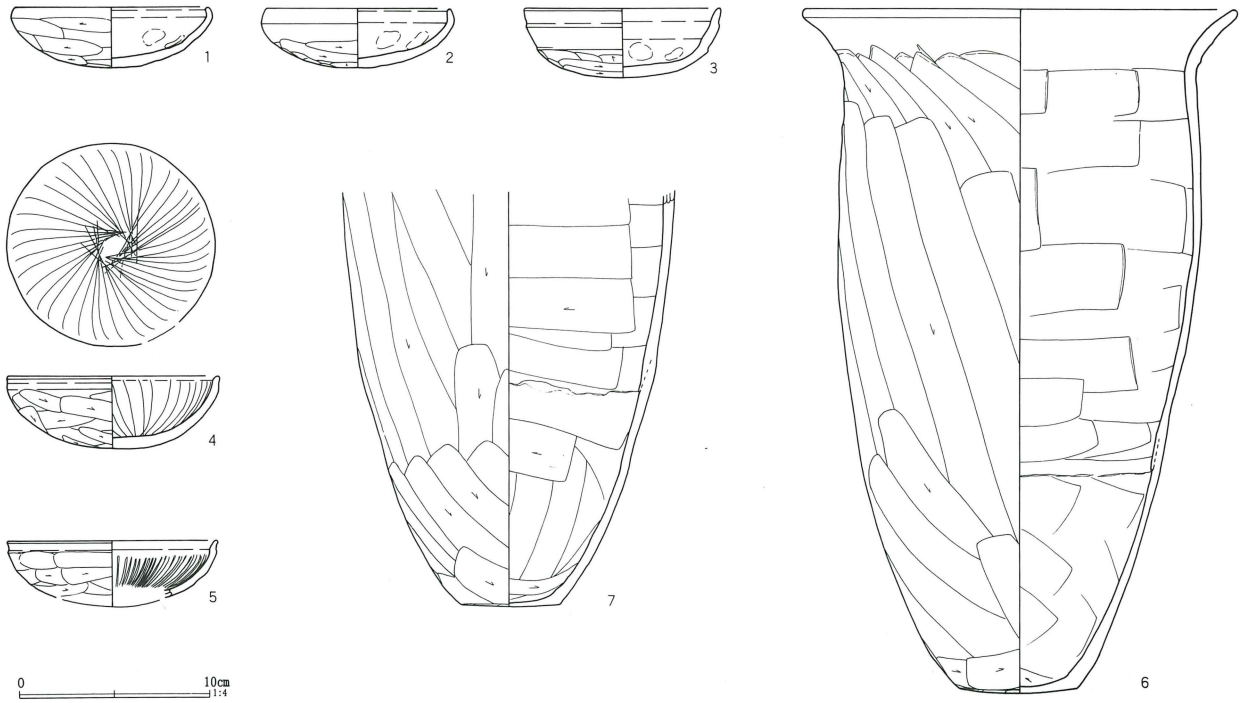
1　黒褐色土　炭化物粒子混入
2　褐色土　ローム粒子・粘土粒子少量
3　明褐色土　灰白色粘土ブロック多量。
　　ローム粒子・焼土粒子少量
4　赤褐色土　焼土
5　黒灰色土　灰・炭化物主体。
　　ロームブロック少量
6　褐色土　焼土粒子・ローム粒子少量
7　白色粘土　ロームブロック少量
8　褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量
9　明褐色土　ロームブロック・ローム粒子多量
10　褐色土　ロームブロック少量

貯蔵穴

1　暗褐色土　ロームブロック少量
2　黒褐色土　ロームブロック少量
3　明褐色土　ロームブロック・ローム粒子多量
4　黄褐色土　ローム主体。褐色土混入

0　2 m　1:60

第49図　A区第24号住居跡出土遺物



第21表　A区第24号住居跡出土遺物観察表（第49図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	10.2	3.2		ＡＣ	A	褐色	95%	№23。内面指押圧痕
2	土師坏	9.7	3.2		ＡＢＣ	A	褐色	100%	№24。内面指押圧痕
3	土師坏	10.3	3.7		ＡＢＣＤ	A	明褐色	100%	№28。内面指押圧痕
4	土師暗文坏	11.1	3.9		ＢＣＤＥ	A	明褐色	100%	№27。内面放射暗文
5	土師暗文坏	(11.0)	3.0		ＡＢＣＤ	A	褐色	30%	貯蔵穴。内面放射暗文
6	土師甕	20.6	36.0	6.3	ＡＢＣＤ	A	褐色	75%	№19・20他。
7	土師甕		21.8	5.3	ＡＢＣＤ	A	淡褐色	60%	№25・26。

須恵器は13片出土しているが、いずれも細片で実測可能なものはない。また、混入遺物が大半である。時期は熊野Ⅰ期と考えられる。

A区第28号住居跡（第50図）

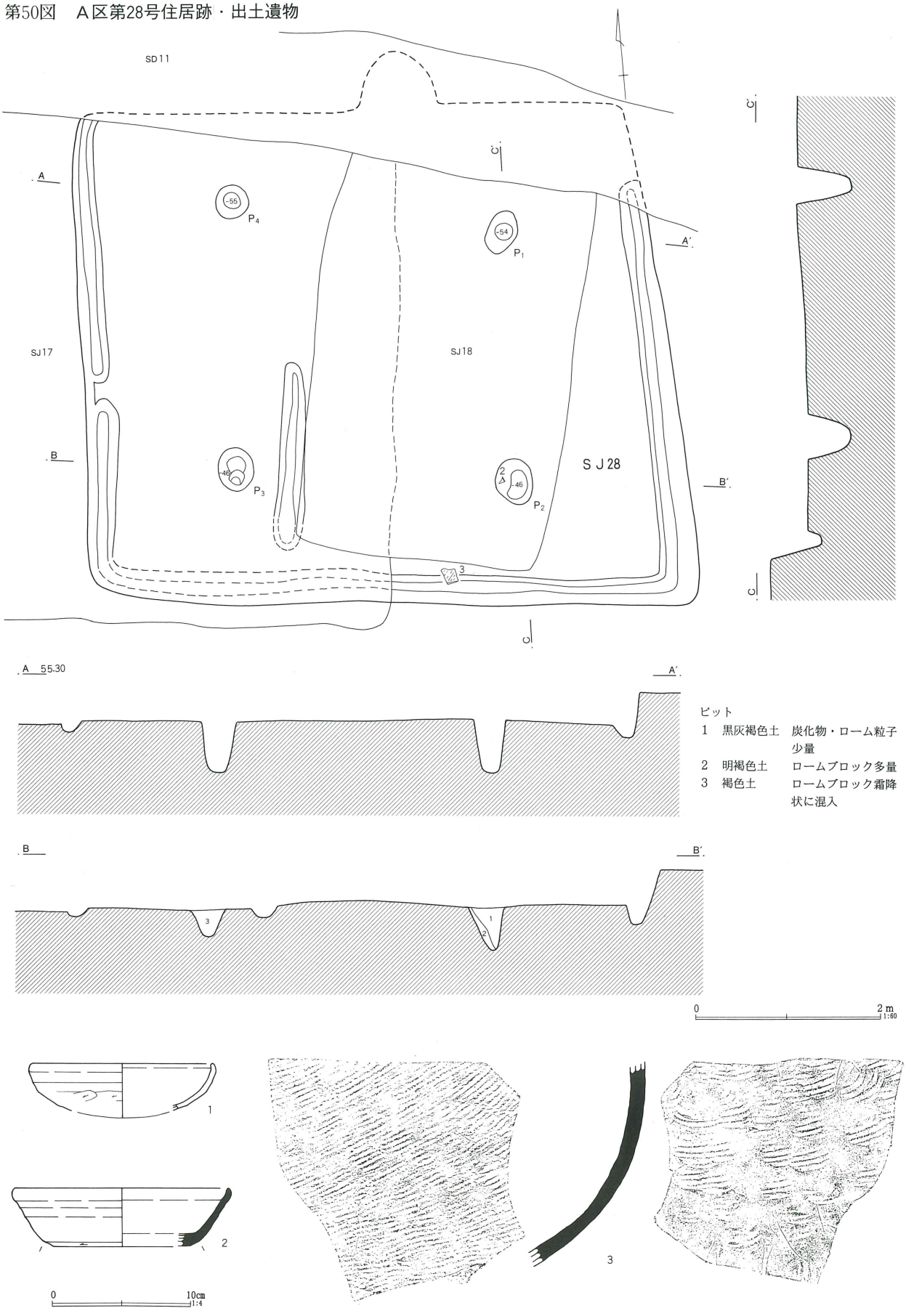
第28号住居跡は45・46－８・９グリッドに位置する。第17・18号住居跡及び第11号溝跡によって遺構の大半は削平され、遺存状態は極めて悪い。平面形はやや歪んだ方形と推定され、規模は長軸長6.66ｍ、短軸長5.45ｍ（推定）、深さ0.35ｍである。主軸方位はＮ－５°－Ｅを指す。第17号住居跡に軸を揃えて重複することから、本住居跡から17号住居跡に建て替えられた可能性がある。

床面は第17・18号住居跡に削平されており、遺存状態は悪いが、残存する床面は平坦で堅く締まっていた。埋土の状態も不明確であるが、ローム混じりの褐色土を基調としており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

カマドは検出されなかった。第11号溝跡によって破壊されたものと思われる。ピットは４本検出された。主柱穴に対応するものと思われる。深さは46～55cm。壁溝は一部不明確な部分もあるが、西壁部も第17号住居跡床面下から確認された。深さは10～15cm。

出土遺物は少なく、土師器坏、須恵器坏、須恵器甕が検出されたに留まる（第50図）。１は土師器坏。内屈口縁の北武蔵型坏。２は須恵器坏。底部と体部下端は回転ヘラケズリ。３は須恵器甕胴部片。外面擬斜格子タタキ、内面同心円文当て具。時期は不明確であるが、熊野Ⅱ期～Ⅲ期前半と考えておきたい。

第50図　A区第28号住居跡・出土遺物



第22表　A区第28号住居跡出土遺物観察表（第50図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(13.0)	3.4		AB	A	褐色	20%	覆土。
2	須恵坏	(15.5)	4.2	(10.0)	D片	B	黒灰色	15%	Pit2 No.1。末野産。底部＋体部下端回転ヘラケズリ
3	須恵甕				C片	A	明灰色		No.1。末野産。斜格子状叩き＋同心円状当具

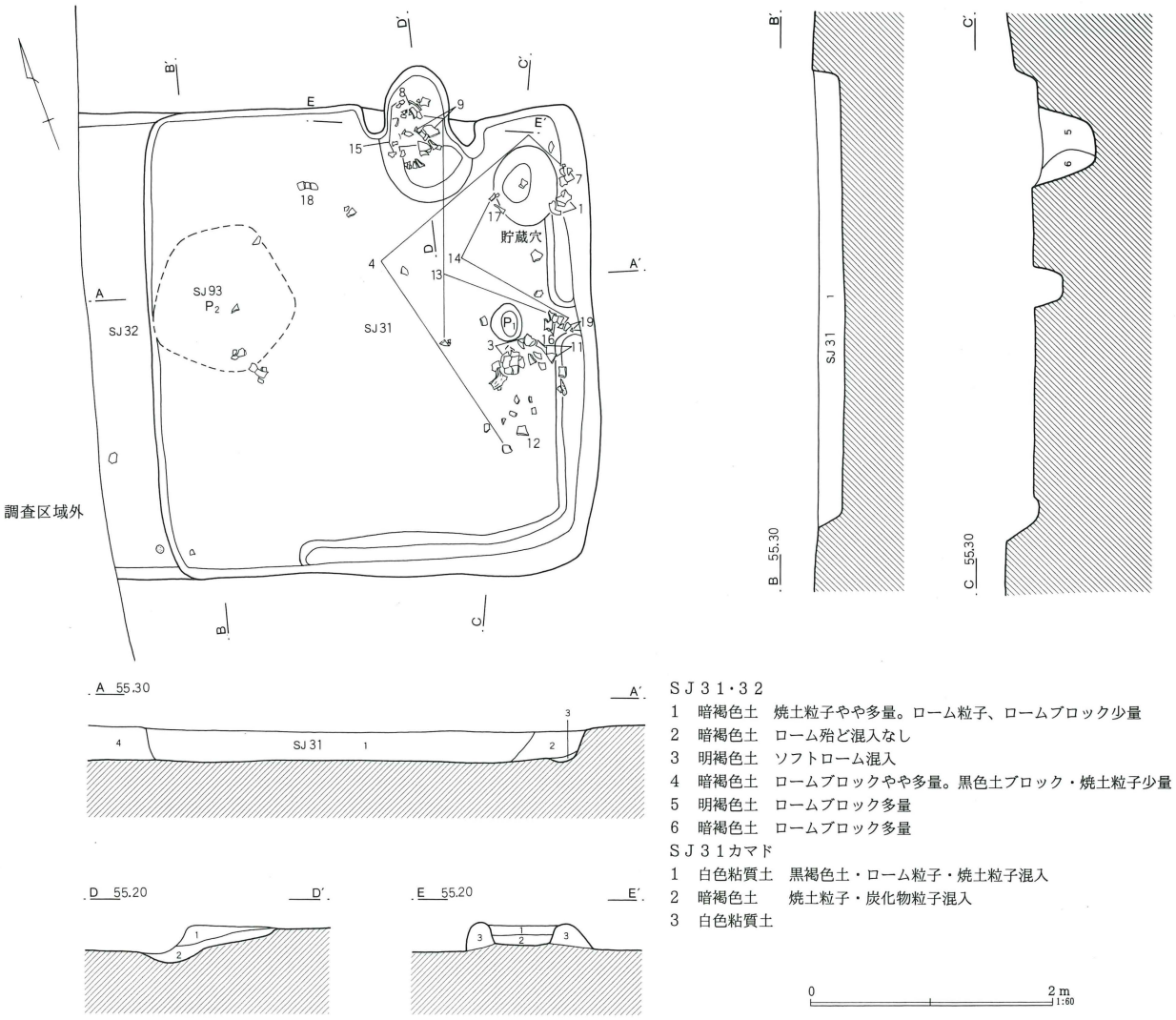
A区第31・32号住居跡（第51図）

第31・32号住居跡は44・45－8グリッドに位置する。遺構確認段階で、第31号住居跡西壁ラインが認識されたため、第32号住居跡から第31号住居跡に建て替えられたと理解したが、床面及び南北の壁は変化なく続くことが判明した。本来同一住居であった可能性もある。また、第93～95号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。第33号掘立柱建物跡との関係は不明確であるが、壁ラインの遺存状態から見て本住居跡の方が新しい可能性が高い。

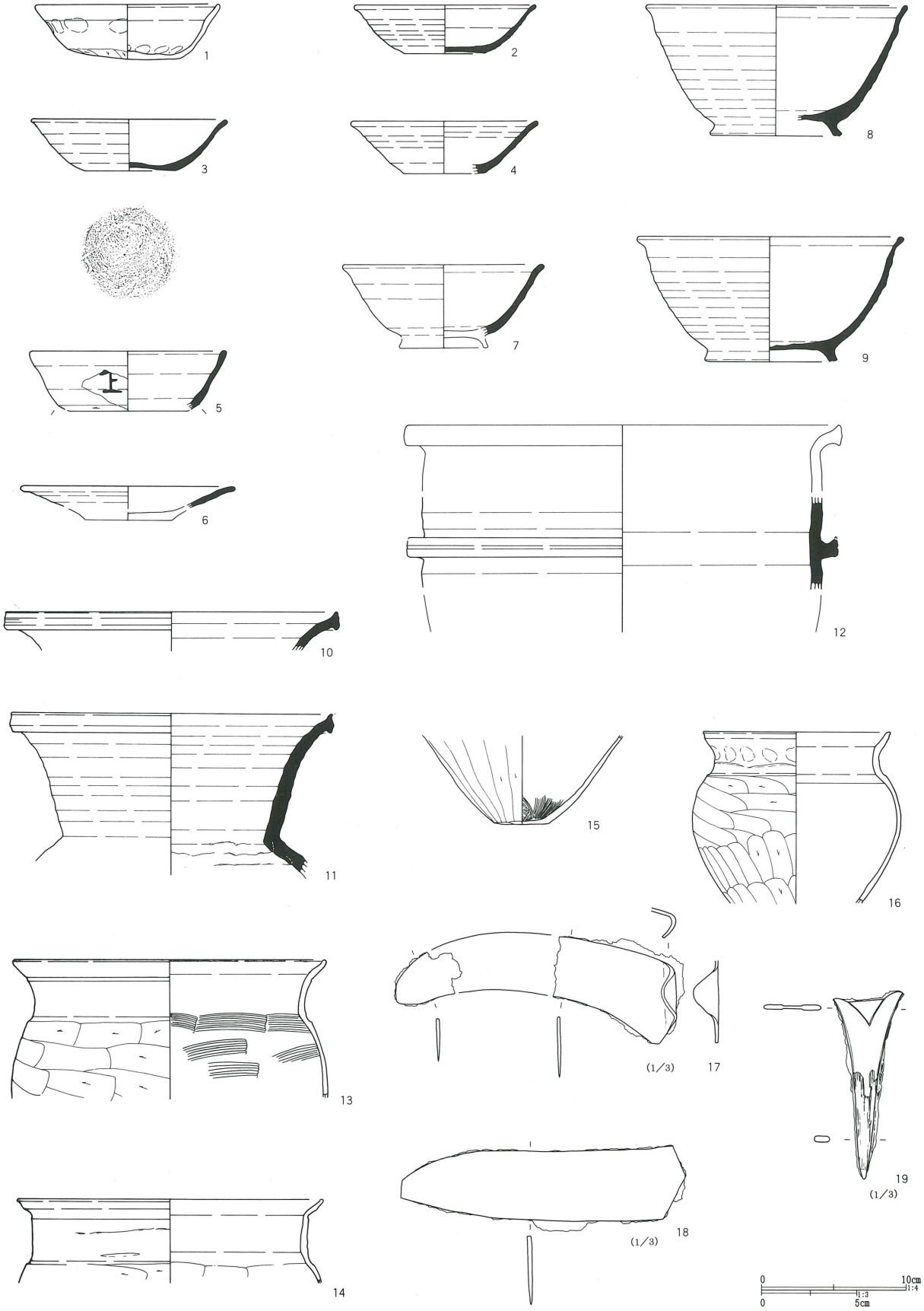
第31号住居跡は平面形は方形で、規模は長軸長3.90m、短軸長3.72m、深さ0.18mである。第32号住居跡は西壁部が調査区外に延び、横長の長方形となるものと推定される。東西長が4.20m以上となる他は、第31号住居跡と同一規模と考えられる。主軸方位はN－18°－Eを指す。

床面は平坦でカマド前面と住居中央部付近が堅く踏み固められていた。埋土は焼土粒子混じりの暗褐

第51図　A区第31・32号住居跡



第52図　A区第31・32号住居跡出土遺物



第23表　A区第31・32号住居跡出土遺物観察表（第52図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	12.6	3.8	7.8	A D	B	褐色	60%	SJ31・32No.59・60。覆土
2	須恵坏	(12.4)	3.3	5.5	C片	A	青灰色	40%	SJ31・32No.36。覆土。末野産。底部B0手法
3	須恵坏	13.3	3.6	6.2	C D片	C	茶褐色	90%	No.47・69。覆土下層。末野産。底部B0手法
4	須恵坏	(12.6)	3.6	(5.8)	C片	A	青灰色	40%	No.20・58他。末野産。底部B0手法
5	須恵坏	(13.4)	4.0		B C	B	灰白色	10%	カマド。産地不明(群馬産か？)体部に墨書「口上」
6	須恵皿	(14.6)	1.5		片	D	灰黒色	20%	SJ31 覆土。末野産
7	須恵高台椀	(13.6)	5.0		B	A	暗灰色	45%	SJ31・32No.56・57。覆土。産地不明。微細砂粒多く含む
8	須恵高台椀	(17.8)	8.9	(8.9)	C片	C	淡灰色	35%	SJ31カマドNo.2。末野産
9	須恵高台椀	18.1	8.6	8.2	C片	A	灰色	95%	SJ31カマドNo.8.11他。末野産
10	須恵甕	(23.0)	2.7		C片	A	灰色	5%	覆土。末野産
11	須恵甕	22.2	11.3		C片	A	青灰色	65%	SJ31・32No.31・34他。覆土。末野産
12	須恵甑		6.4		片	A	淡青灰色	10%	No.21。覆土。末野産。突帯上端欠失
13	土師甕	(21.6)	9.5		A B	A	明褐色	20%	SJ31カマドNo.3。SJ31・32No.45・52。覆土
14	土師甕	(21.0)	5.8		A B	A	明褐色	20%	SJ31・32No.42・63。覆土下層
15	土師甕		6.1	4.0	A B E	A	褐色	50%	SJ31カマドNo.7・18
16	土師小型台付甕	12.8	11.8		A B	A	褐色	60%	SJ31・32No.44・46他。床+覆土下層
17	鎌	No.40・41。覆土。残長9.3cm。幅3.8cm。No.40先端部　No.41柄装着部							
18	不明鉄製品	No.73。覆土。残長14.7cm。幅3.7cm。							
19	不明鉄製品	No.65。覆土。残長9.7cm。							

色土を基調としており、大きな土層変化は見られなかった。

カマドは北壁に設置される。燃焼部は壁を切り込んで掘り込まれていた。袖は白色粘土を積み上げているが遺存状態はあまり良くない。第１層は天井部崩落土、第２層が灰層に相当する。

ピットは１本検出されたが、住居に伴うものではなかろう。壁溝は東壁から南壁にかけて検出されたが、西壁部分には認められなかった。

第31・32号住居跡から出土した遺物は、土師器坏・甕・小型台付甕、須恵器坏・高台椀・皿・甕・甑と鉄製品がある（第52図）。１は土師器坏。平底でやや深身である。２～４は須恵器坏。底径は口径の1/2以下に縮小している。５は混入資料と思われ、体部に「□上」の墨書がある。６は須恵器皿。７～９は須恵器高台椀で大小２種がある10・11は須恵器甕、12は須恵器甑である。13～16は「コ」の字状口縁甕。16は小形台付甕である。17は鉄鎌、18は不明鉄製品。鎌に似るが、刃部の屈曲がない。小刀状となる。19も不明鉄製品。雁股鏃に似るが、刃部が連結している。木質が遺存することから柄に差し込んで使用されたものと思われる。

須恵器は130片出土した。内訳は坏が77点（末野71・南比企５・不明１）、高台椀７点（末野５・不明２）、皿10点（末野９・不明１）、蓋７点（末野）、甕28点（末野）、甑１点（末野）となる。時期は熊野Ⅵ期と考えられる。

A区第34号住居跡（第53図）

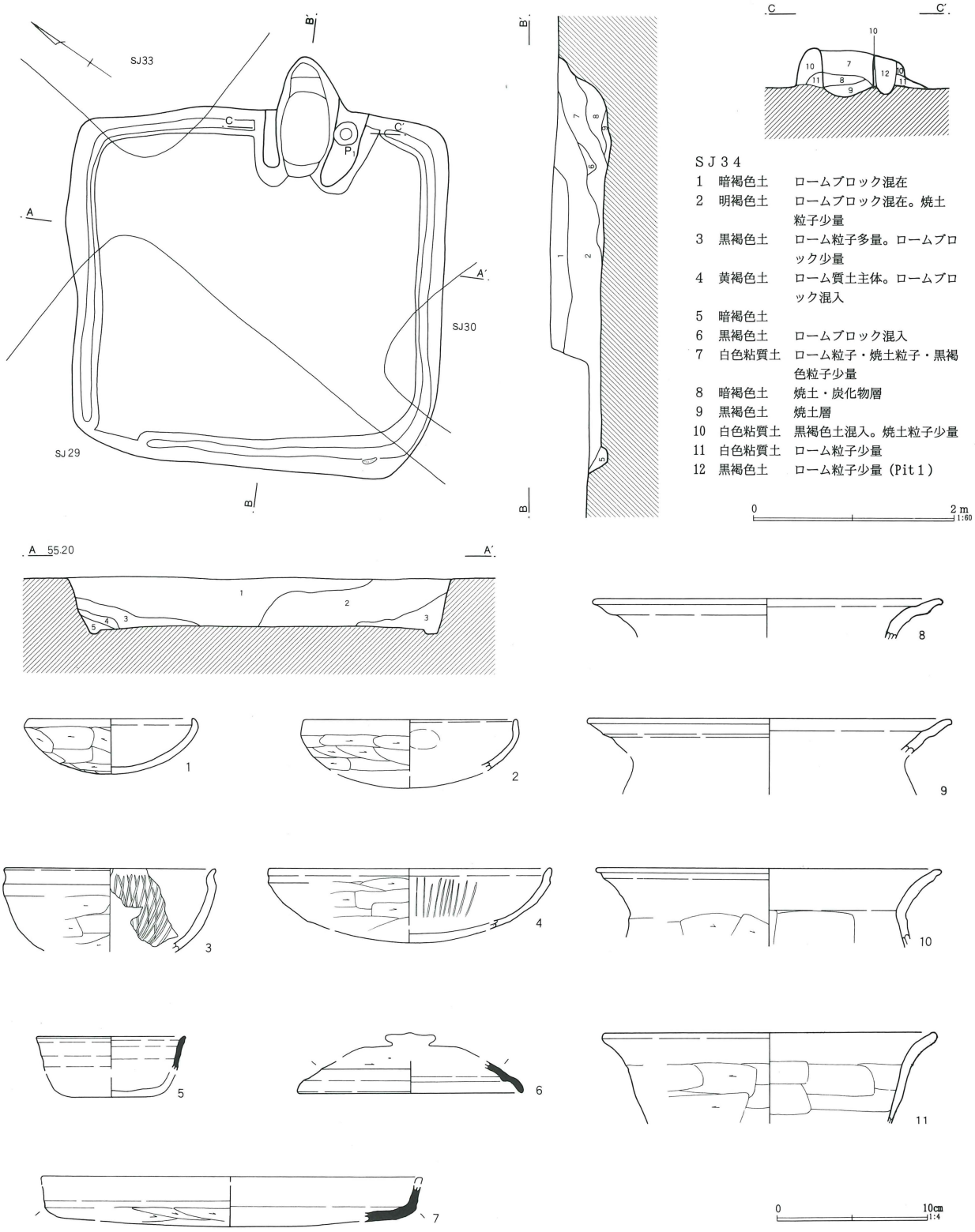
第34号住居跡は44－９グリッドに位置する。第29・30・33・92号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。平面形は方形で、規模は長軸長3.80ｍ、短軸長3.60ｍ、深さ0.54ｍである。主軸方位はＮ－58°－Ｅを指す。

床面は概ね平坦で、全体に堅い。特にカマド前面から住居中央付近が良く踏み固められていた。埋土の状況について観察すると、特に第１・２層にロームブロックが霜降り状に混在し、人為的に埋め戻されたものと思われる。

カマドは北東壁に設置され、燃焼部は壁を僅かに掘り込んでいる。袖は白色粘土を積み上げて構築されるがかなり流出していた。第７～９層が天井部崩落土、９層下面が火床面と推定される。

ピットは１本カマド袖部に検出されたが、住居に伴うものではない。壁溝は西コーナー部を除き全周

第53図　A区第34号住居跡・出土遺物



する。深さは5㎝程度。

出土遺物は少なく、全て小片である。器種としては、土師器坏・暗文坏・甕・甑、須恵器坏・蓋・盤がある（第53図）。土師器坏は内屈・内彎口縁の北武蔵型坏（1・2）、3の暗文坏は内面に斜格子暗文が施される。5は小振りの須恵器坏となろう。6はかえり蓋。7は盤で、底部は手持ちヘラケズリが施されている。8～10は土師器甕、11は甑と思われる。

第24表　A区第34号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(11.0)	3.7		ＡＢＣＤ	Ａ	淡褐色	20%	SJ34覆土＋SJ29
2	土師坏	(14.2)	3.4		ＣＥ	Ａ	褐色	20%	覆土
3	土師暗文坏	(14.0)	5.5		ＡＤ	Ａ	橙褐色	5%	覆土　内面斜格子暗文
4	土師暗文坏	(18.8)	4.0		ＢＣ	Ａ	褐色	5%	覆土。内面放射暗文
5	須恵坏	(9.8)	2.3		ＢＣＥ	Ａ	灰黒色	15%	末野産
6	須恵蓋	(14.8)	2.1		ＣＥ片	Ａ	灰色	5%	末野産
7	須恵盤		2.4		ＢＣＥ	Ａ	灰色	5%	末野産
8	土師甕	(22.8)	2.6		ＡＢＣ	Ａ	淡褐色	5%	覆土
9	土師甕	(24.2)	2.3		ＡＢＣ	Ａ	暗褐色	5%	覆土
10	土師甕	(22.9)	5.2		ＡＢＣＥ	Ａ	淡褐色	5%	覆土
11	土師甑	(22.0)	6.0		ＡＢＥ	Ａ	暗褐色	5%	覆土

遺物は小片が多く、時期決定し難いが、熊野Ⅰ～Ⅱ期の範疇で捉えて良いものと考える。

Ａ区第35号住居跡（第54図）

第35号住居跡は43･44－９･10グリッドに位置する。断面観察及び、壁溝の状況から、第36号住居跡から第35号住居跡に東壁と南壁部を縮小して建て替えられたものと判断した。重複遺構との新旧関係は、第16・25号掘立柱建物跡を切り、第33号住居跡に上面を削平されていた。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長4.74ｍ、短軸長3.36ｍ、深さ0.33ｍである。主軸方位はＮ－15°－Ｅを指す。

床面は概ね平坦で全体に堅く締まっていた。埋土は大きく上下の２層に分かれ、上層（第１層）に多量のローム粒子が含まれていた。

カマドは北壁に設置されていた。燃焼部は壁を切り込み、一段立ち上がって煙道部に続く。袖は灰褐色の粘質土を用いているが、あまり明確なものではなかった。第１～４層が天井部崩落土、第５層が灰層、第６層は掘り方と考えられる。

ピットは５本検出されたが、いずれも住居に伴うものではない。カマド前面から土壙が１基検出された（SK１）。上面は貼床され、埋土は埋め戻された状態である。住居に伴う床下土壙と考えられる。

壁溝は東壁部が不明確であるが、他の部分は巡っていた。

出土遺物は比較的まとまっているが、床面よりも浮いているものが多い。器種としては、土師器坏・暗文坏・甕・台付甕、須恵器坏・皿・高台付皿・高台椀・蓋・瓶・甕、灰釉陶器、石製紡錘車がある（第54・55図）。第54図１～３は土師器坏。３は体部ヘラケズリ、内面に放射状暗文が施される。４～６は須恵器蓋。４は無鈕式となろう。７～９は須恵器坏、10～15は高台椀16・17は皿、18・19は高台付皿である。19の見込部は摩滅しており、硯に転用された可能性がある。20は「コ」の字状口縁甕、21～23は小型台付甕である。25は灰釉陶器皿で、外面は無釉、内面は灰釉が刷毛塗りされている。胎土から浜北産の可能性がある。26は長頸瓶、27～30は甕である。31は滑石製紡錘車で、覆土上層から出土した。

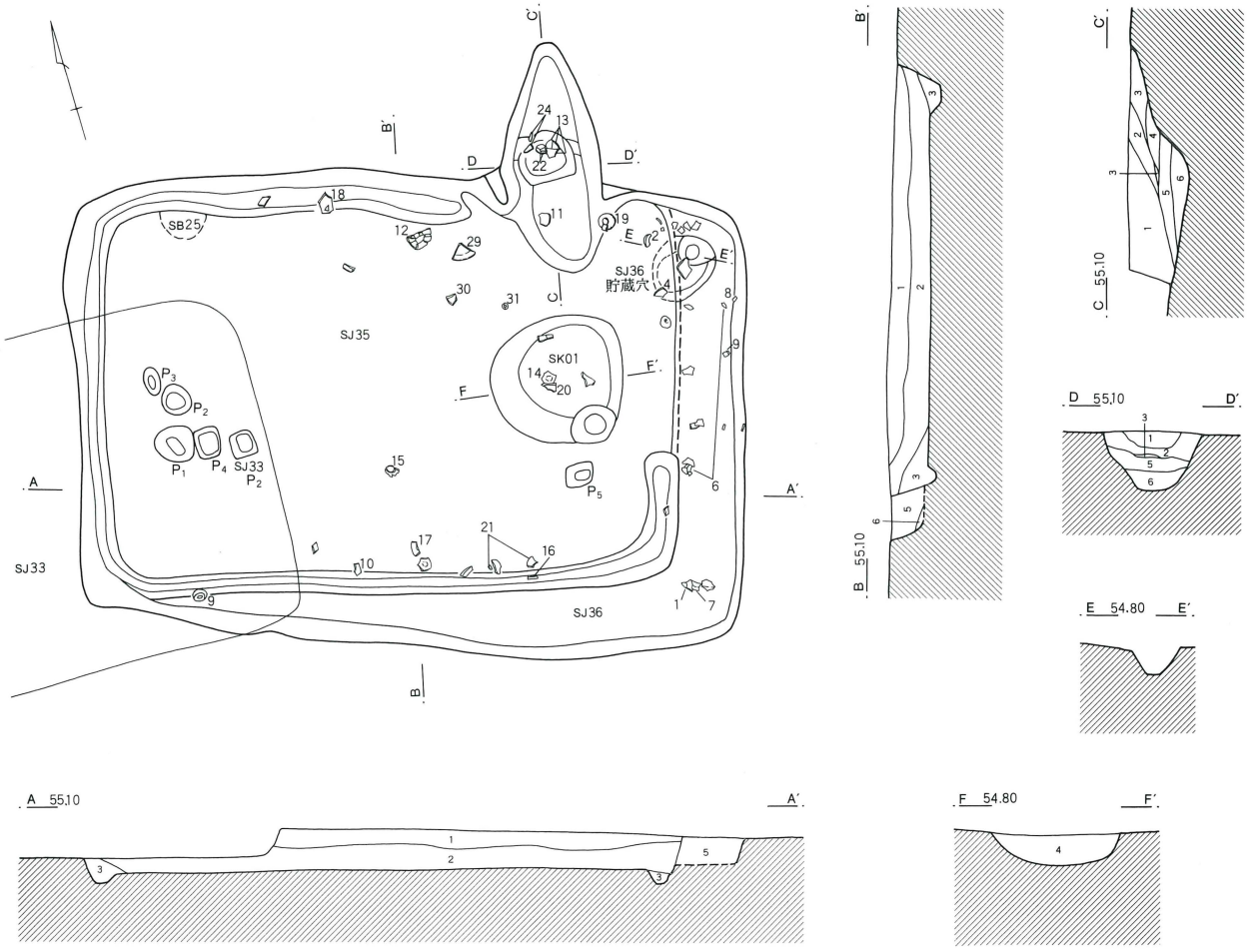
須恵器は304片出土した。坏が184点（末野172・南比企12）、高台椀22点（末野）、皿が45点（末野43・不明２）、高台皿が２点（末野）、蓋が19点（末野18・南比企１）壺・瓶類８点（末野５・南比企２・不明１）、甕が23点（末野22・南比企１）鉢が１点（末野）である。その他灰釉陶器皿と瓶が各１点出土している。

時期は熊野Ⅵ期と考えられる。

Ａ区第36号住居跡（第54図）

第36号住居跡は43･44－９･10グリッドに位置する。断面観察及び、壁溝の状況から、第36号住居跡から第35号住居跡に東壁と南壁部を縮小して建て替えられたものと判断した。重複遺構との新旧関係は、第16・25号掘立柱建物跡を切り、第33号住居跡に上面

第54図　A区第35・36号住居跡・35号住居跡出土遺物(1)



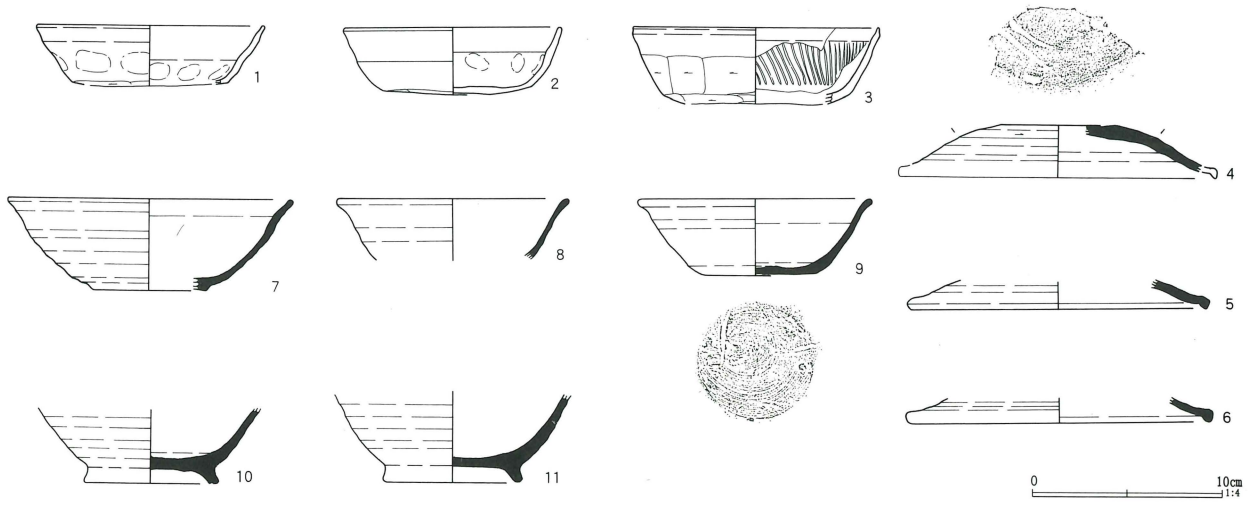
ＳＪ３５・３６

1　明褐色土　ローム粒子多量。焼土粒子・炭化物粒子少量
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子少量
3　暗褐色土　ローム粒子ほとんど含まない
4　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒子多量。黒色土がブロック状に混入
5　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
6　暗灰褐色土　ローム粒子少量

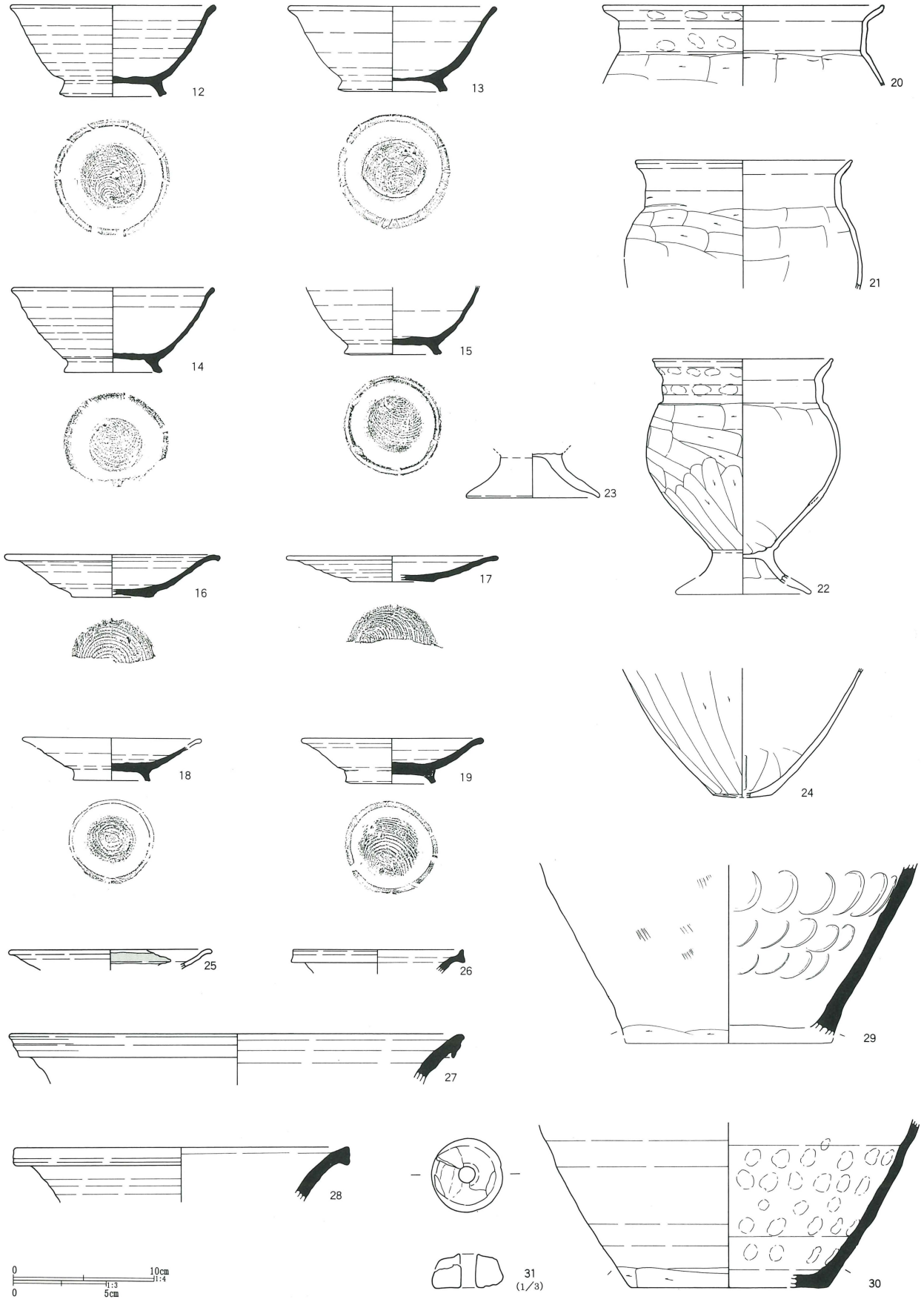
カマド

1　明褐色土　焼土粒子多量。ローム粒子少量
2　灰褐色土　粘質土主体
3　灰褐色土　焼土ブロック主体
4　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子少量
5　黒褐色土　灰・焼土・炭化物混入
6　黄灰色土　粘質土・焼土粒子・ローム粒子混入

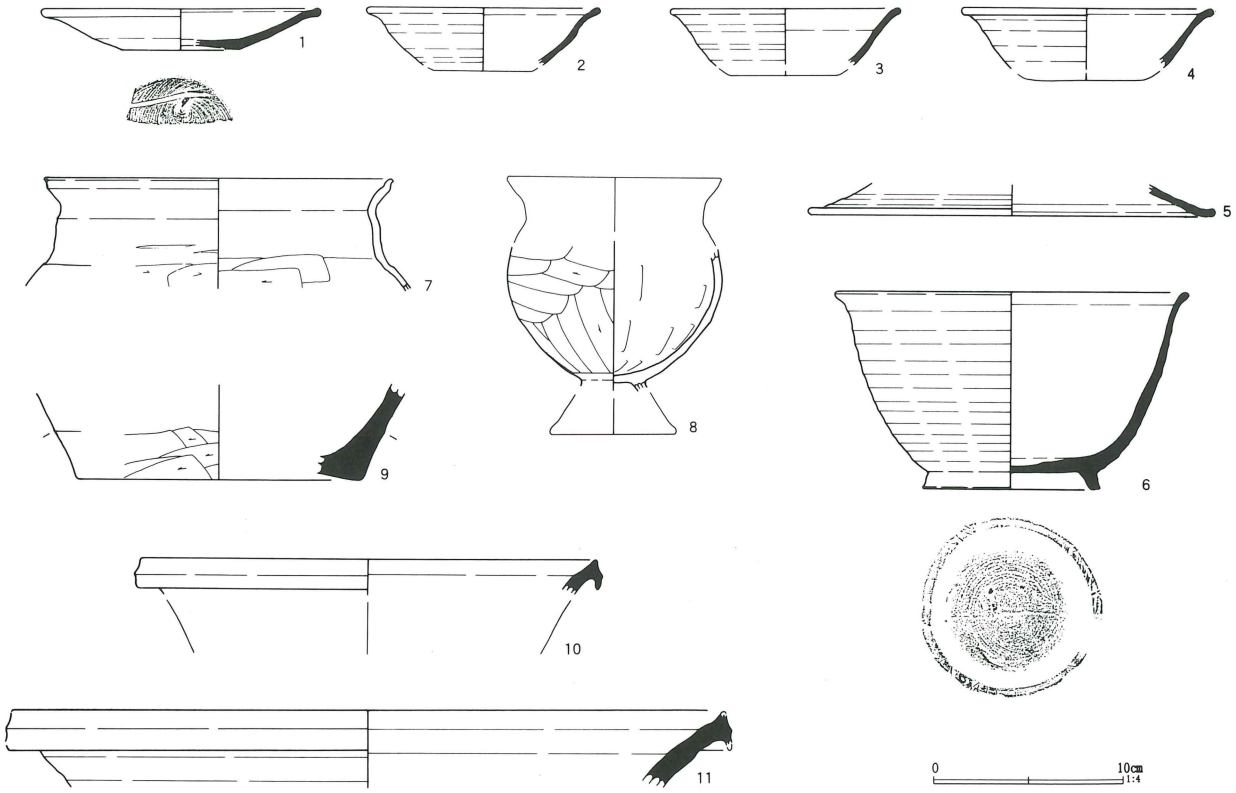
0　2 m　1:60



第55図　A区第35号住居跡出土遺物(2)



第56図　Ａ区第36号住居跡出土遺物



を削平されていた。

平面形は横長の長方形で、規模は長軸長5.46ｍ、短軸長3.70ｍ、深さ0.25ｍである。主軸方位はＮ－19°－Ｅを指す。

床面は重複する第35号住居跡よりもやや浅い位置にあったようで、35号住居跡と同一レベルまで掘り下げたために掘り方まで達してしまった。埋土はローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土を基調とするが、特に埋め戻したような形跡は確認できなかった。

カマドは第35号住居跡のそれと同一地点に設置されたものと考えられる。貯蔵穴はカマド脇の北東コーナー部に設けられていた。楕円形で、規模は長径54㎝、短径42㎝、深さ23㎝である。

住居に伴うピットは検出されなかった。壁溝は存在しない。

出土遺物は少なく、須恵器坏・皿・高台椀・蓋・甕、土師器甕・台付甕がある（第56図）。１は須恵器皿としたが、蓋の可能性もある。２～４は坏。５は口径が大きく、椀蓋と考えた。６は大振りの高台椀である。７は土師器のいわゆる「コ」の字状口縁甕である。

須恵器は破片数で102点出土した。坏が84点（末野83・南比企１）、高台椀１点、皿６点、蓋１点、甕７点、壺瓶類２点、鉢１点（いずれも末野産）である。時期は熊野Ⅵ期、第35号住居跡と同一段階であろう。

Ａ区第39号住居跡（第57図）

第39号住居跡は46－10グリッドに位置する。重複する第41・48号住居跡を切っていた。第７号・第８号掘立柱建物跡との関係は、床面の遺存状態や重複する第41号住居跡カマドの断面観察から本住居跡の方が新しいものと判断した。平面形は長方形で、規模は長軸長4.80ｍ、短軸長4.04ｍ、深さ0.20ｍである。主軸方位はＮ－10°－Ｅを指す。

床面はやや起伏が顕著で、カマド前面から中央部は非常に堅く踏み固められていた。一方、壁際は全体にやや軟弱であった。埋土はローム粒子やロームブロック混じりの褐色土を基調としており、すべて自然堆積とは思われない。

第25表　A区第35号住居跡出土遺物観察表（第54·55図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(12.0)	3.1	(8.4)	ＡＢ	B	褐色	20%	覆土
2	土師坏	11.3	3.6	7.8	ＡＢ	A	茶褐色	55%	№3　覆土下層
3	土師暗文坏	(13.0)	4.0		ＡＢ	B	褐色	15%	覆土。器形歪む　内面放射暗文
4	須恵蓋		2.4		Ｃ片	A	灰色	25%	№4。覆土。末野産。天井部Ｂ0手法
5	須恵蓋	(15.6)	1.5		ＢＦ片	C	灰色	5%	覆土。末野産
6	須恵蓋	(15.8)	1.3		Ｂ片	B	青灰色	5%	覆土。末野産
7	須恵坏	(14.8)	4.8	(6.0)	ＢＣＦ	A	灰色	10%	覆土。末野産？　片岩は確認できない。底部Ｂ0手法
8	須恵坏	(12.0)	3.2		Ｃ針	A	灰色	30%	覆土。南比企産
9	須恵坏	12.1	4.0	6.0	Ｂ片	B	暗灰色	95%	№19。覆土。末野産。底部Ｂ0手法
10	須恵高台椀		4.0	6.8	Ｄ片	C	明褐色	90%	№21。覆土。末野産
11	須恵高台椀		4.6	7.0	Ｃ片	D	黄灰褐色	70%	カマドNo4。末野産
12	須恵高台椀	14.4	6.5	6.8	Ｃ片	B	黄灰色	75%	№14。床面。末野産
13	須恵高台椀	(14.6)	6.1	6.8	ＢＣＤ片	D	淡褐色	65%	カマドNo8。末野産。
14	須恵高台椀	(14.0)	6.0	6.8	ＢＤ片	A	灰色	25%	№9。覆土。末野産
15	須恵高台椀		4.8	6.0	ＣＤ片	B	黄灰色	50%	№22。覆土。末野産
16	須恵皿	(14.4)	3.0	6.0	ＢＣ片	B	灰褐色	25%	№29。覆土。末野産。底部Ｂ0手法
17	須恵皿	(14.6)	1.8	(6.0)	Ｃ片	B	黄灰色	30%	№23。覆土。末野産。底部Ｂ0手法
18	須恵高台皿		2.4	5.4	Ｃ片	A	青灰色	80%	№16。覆土。末野産
19	須恵高台皿	12.6	3.2	5.8	Ｃ片	A	紫灰色	100%	カマドNo1。末野産。見込部磨滅
20	土師甕	(20.0)	5.7		ＡＢＤ	A	明褐色	20%	№8。覆土
21	土師小型台付甕	15.3	9.1		ＡＢ	A	褐色	50%	№27·28。覆土
22	土師小型台付甕	12.7	15.9		ＡＢ	A	淡褐色	70%	カマドNo12·13
23	土師小型台付甕		3.1	9.4	ＡＢ	A	明褐色	90%	覆土
24	土師甕		9.1	(4.2)	ＡＢ	A	褐色	25%	カマドNo5·14
25	灰釉高台皿	(14.0)	1.4		ＢＦ	A	明白色	5%	覆土。浜北産。内面灰釉刷毛塗り
26	須恵長頸瓶	(12.0)	1.7		ＢＦ	A	灰色	10%	覆土。産地不明。南比企産か。白色針未確認
27	須恵甕	(32.0)	3.5		ＢＣ片	A	黒灰色	15%	覆土。末野産
28	須恵甕	(23.5)	3.8		Ｂ針	A	灰色	5%	覆土。南比企産
29	須恵甕		12.1		Ｂ片	A	灰色	25%	№13。覆土。末野産。
30	須恵甕		11.9	(14.0)	Ｃ片	A	明灰色	25%	№12。覆土。末野産。
31	滑石製紡錘車	№11。覆土上層。直径3.8cm。高さ1.8cm。孔径0.9cm。重さ36.0g。上下底部剥落部分あり							

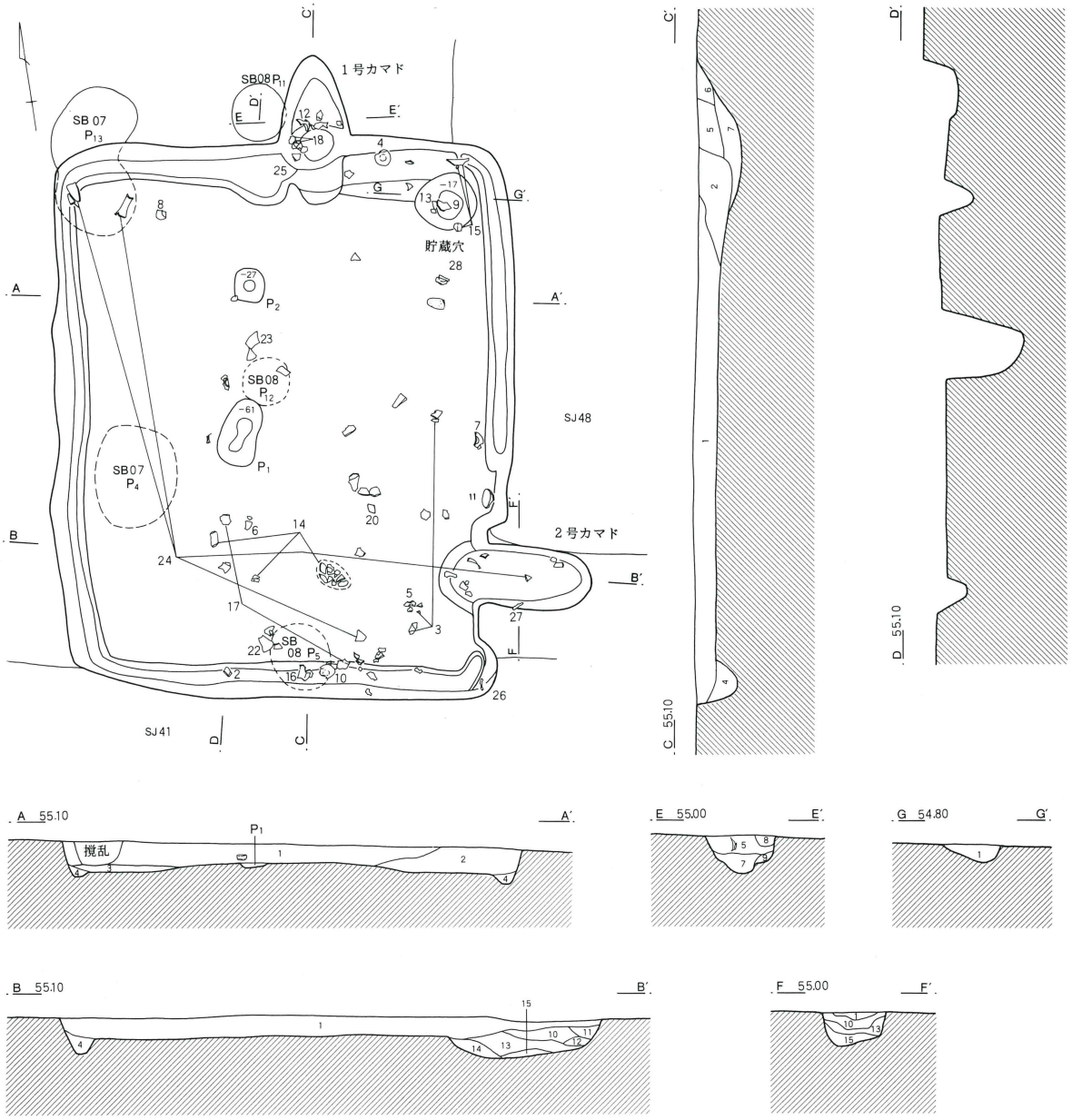
第26表　A区第36号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	須恵皿	(14.4)	2.2	6.2	ＢＣ片	B	黄灰色	25%	№20。覆土。末野産
2	須恵坏	(12.1)	3.0		ＢＣ片	A	灰色	30%	覆土。末野産
3	須恵坏	(12.0)	3.0		ＢＣＥ片	B	暗灰色	15%	覆土。末野産
4	須恵坏	(13.0)	3.2		ＢＥ片	A	灰色	20%	覆土。末野産
5	須恵蓋	(21.2)	1.7		片	B	黄灰色	15%	覆土。末野産
6	須恵高台椀	18.6	10.4	9.2	Ｃ片	A	黒灰色	60%	№10·17。床面+覆土。末野産
7	土師甕	(18.3)	5.8		ＡＢＣ	A	褐色	5%	№19。覆土
8	土師小型台付甕		7.6		ＡＢＣＤ	A	褐色	30%	№11。覆土
9	須恵甕		5.1	(15.0)	片	A	灰色	5%	№12。覆土。末野産
10	須恵甕	(24.0)	1.9		Ｂ片	A	暗灰色	5%	覆土。末野産
11	須恵甕	(37.8)	4.1		ＢＣＥ片	B	灰色	5%	覆土。末野産

カマドは２基検出された。北壁部に掘り込まれたものが第１号カマド、東壁部のそれが第２号カマドとする。いずれも燃焼部は壁を大きく切り込んでいた。埋土の遺存状態から１号カマドから２号カマドに付け替えたものと考えられる。

ピットは２本検出されたが、柱穴となるかどうか不明である。貯蔵穴は北東コーナー部に設置されている。ほぼ円形プランで、直径52cm、深さ17cmである。

第57図　A区第39号住居跡



SJ39

1　明褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量
2　褐色土　ロームブロック多量
3　黄褐色土　黒色土・ロームブロック混入
4　褐色土　ローム粒子微量
5　褐色土　焼土・ローム粒子少量
6　明褐色土　焼土・灰・ローム粒子混入
7　黒褐色土　灰・炭化物・焼土混入（灰層）
8　灰白色粘土　ブロック状
9　褐色土　ローム粒子多量
10　明灰褐色土　粘質土・焼土ブロック多量
11　黄褐色土　ロームブロック多量
12　褐色土　焼土・ローム微量
13　黒灰色土　灰・炭化物・焼土混入（灰層）
14　明褐色土　ローム粒子多量
15　明褐色土　黄灰・粘土ブロック多量

貯蔵穴

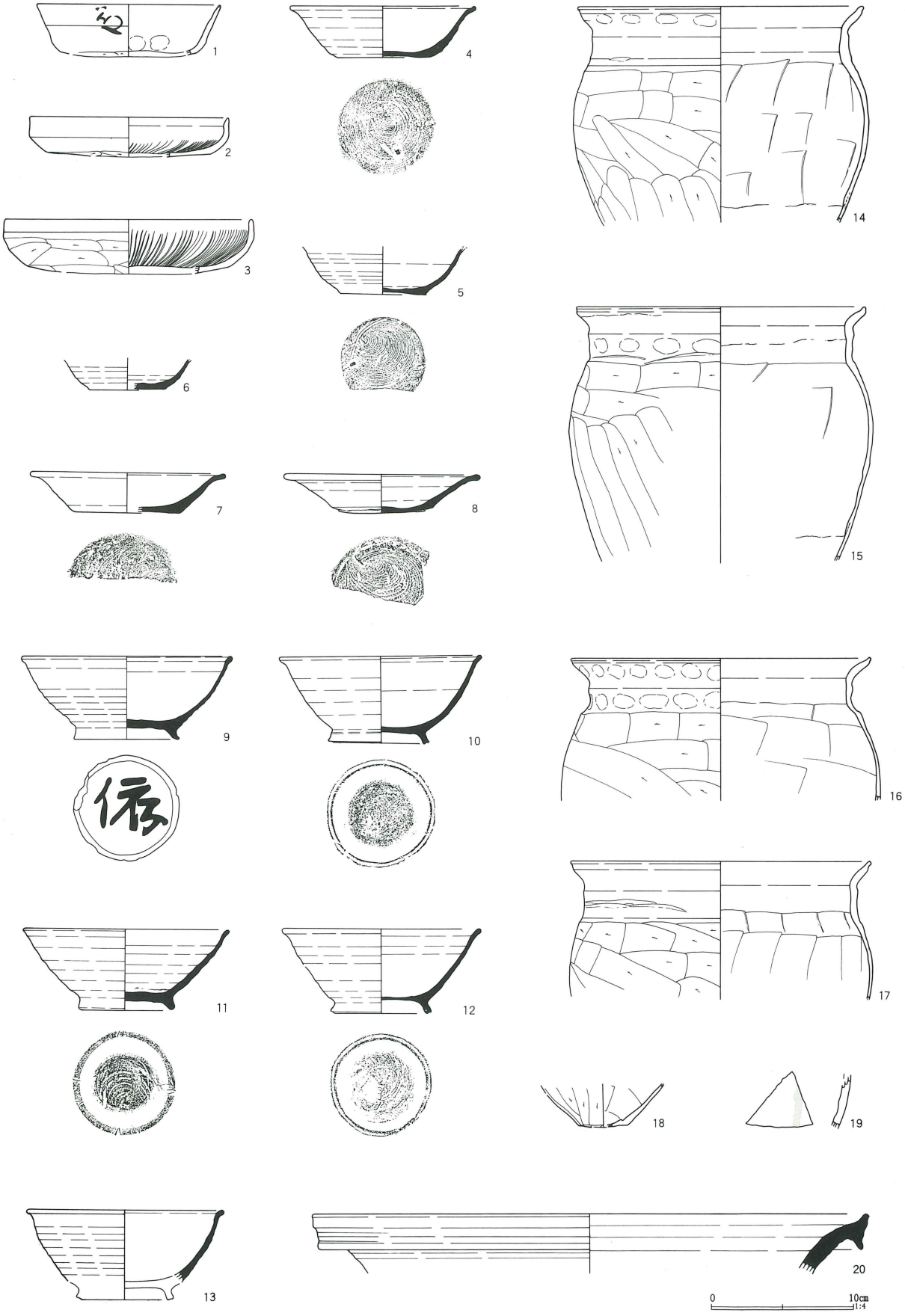
1　明灰褐色土　粘質土・ロームブロック少量。焼土・炭化物混入

0　2m　1:60

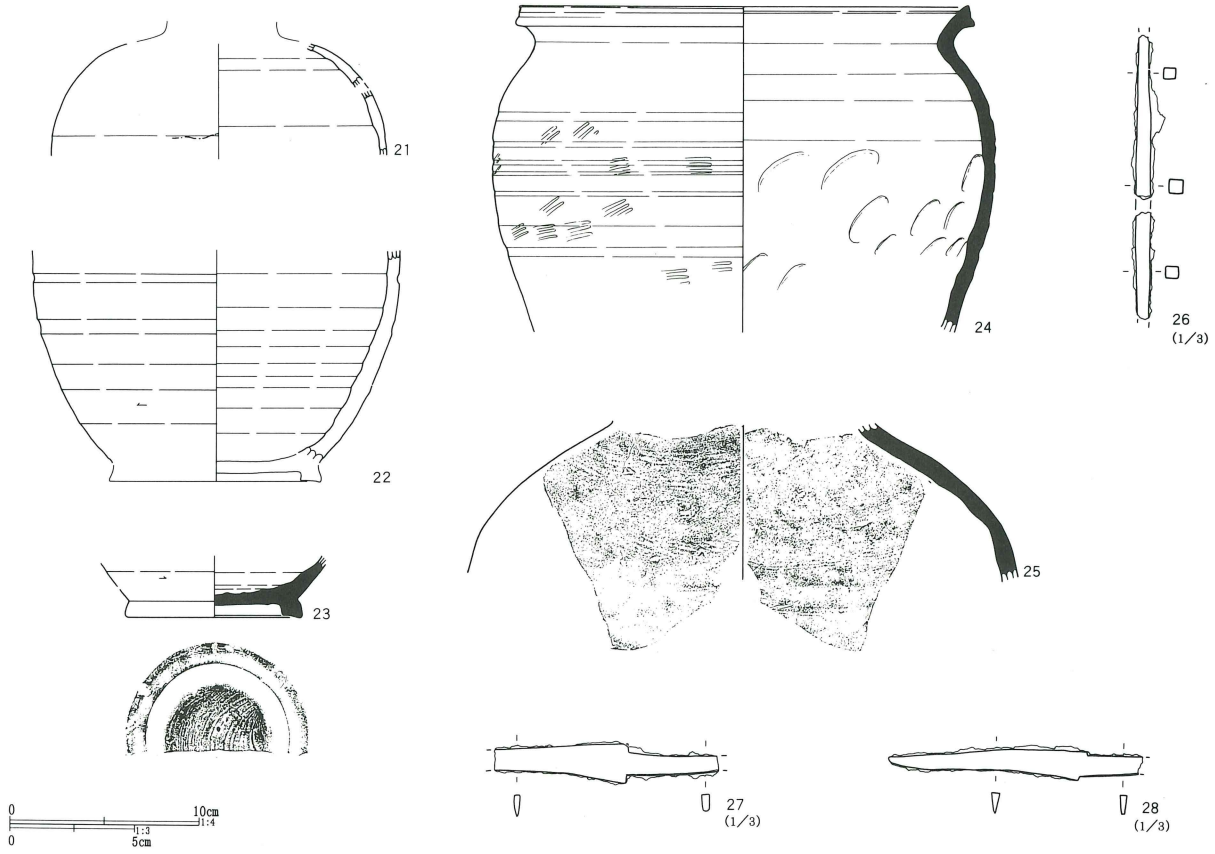
壁溝は全周するが、方形周溝状の掘り方と重なって不明瞭な部分もあった。

出土遺物は比較的まとまっている。土師器坏・暗文坏・甕、須恵器坏・皿・高台椀・甕・鉢、灰釉陶器長頸瓶、鉄製品がある（第58・59図）。1は土師器坏で、外面に墨書痕がある。字は不明瞭であるが、「殿」の可能性がある。2・3の暗文坏は混入と思われる。4～6は須恵器坏で、底部は回転糸切り後無調整。7・8は皿。7は焼きが甘い。9～13は須恵器高台椀。9は貯蔵穴内から出土した。底部に大

第58図　A区第39号住居跡出土遺物(1)



第59図　A区第39号住居跡出土遺物(2)



第27表　A区第39号住居跡出土遺物観察表（第58･59図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(13.0)	3.5		A	A	褐色	10%	覆土。外面墨書「殿」と思われる
2	土師暗文坏	(14.0)	2.7	(11.6)	ABD	A	黄褐色	20%	№21。覆土。内面放射暗文
3	土師暗文坏	(17.4)	3.8		AB	A	茶褐色	30%	№3･34他。覆土。内面放射暗文
4	須恵坏	12.9	3.6	6.6	片	B	黄灰褐色	95%	№62。覆土。末野産。底部B0手法
5	須恵坏		3.3	6.0	C片	A	明灰色	60%	№32。覆土下層。末野産。底部B0手法
6	須恵坏		2.1	(5.4)	B片	A	青灰色	40%	№27。覆土。末野産。底部B0手法
7	須恵皿	(13.6)	2.8	7.4	D片	D	暗灰褐色	35%	№41。覆土。末野産。ﾛｸﾛ目弱い
8	須恵皿	(13.4)	2.7	(6.2)	C片	A	暗青灰色	25%	№64。覆土。末野産。底部糸切り面2枚あり
9	須恵高台椀	(14.6)	5.8	7.2	C片	C	灰褐色	50%	№73。貯蔵穴内。末野産。底部墨書あり
10	須恵高台椀	14.1	6.2	6.5	B片	B	青灰色	90%	№16。ＳＢ08内。末野産
11	須恵高台椀	14.4	5.6	6.3	片	C	黄灰褐色	75%	№39。床面。末野産。外面焼きむらあり
12	須恵高台椀	(13.8)	5.9	6.4	C片	A	淡灰色	50%	1号カマドNo.9。末野産。底部に孔が穿たれている
13	須恵高台椀	(13.6)	5.0		C片	A	灰色	30%	№72･74。貯蔵穴内。末野産
14	土師甕	(20.0)	15.1		AB	A	明茶褐色	40%	№29･30他。覆土。整形やや雑。口縁下無調整部残す
15	土師甕	(20.3)	18.0		AB	A	褐色	15%	№59･60。床面
16	土師甕	(21.0)	10.0		AB	A	褐色	20%	№17･18。ＳＢ08内
17	土師甕	(21.0)	9.7		AB	A	褐色	25%	№15･26。覆土
18	土師甕		3.0	3.6	AB	B	明褐色	65%	1号カマドNo.1
19	灰釉長頸瓶				F	A	明灰色		堀り方。猿投～三河産。内面にｾﾙﾛｰｽ状の吹出し
20	須恵甕	(39.0)	4.2		C片	A	暗灰色	5%	№47。覆土。末野産。口径不安定
21	灰釉長頸瓶				BF	A	灰白色	5%	覆土。猿投産か。外面淡黄緑色の釉
22	灰釉長頸瓶		11.2		CF	A	灰白色	25%	№75。床面。猿投～三河産か。外面回転ヘラケズリ
23	須恵長頸瓶		3.2	9.2	BF	A	紫灰色	50%	№52。覆土。東金子産　底部回転糸切り
24	須恵鉢	(23.6)	17.3		C片	A	青灰色	35%	№8･65他。覆土。末野産

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
25	須恵甕		8.3		C片	A	灰色	20%	1号カマドNo.5。末野産
26	不明鉄製品	No.1。床面。残長10.6cm。棒状							
27	刀子	No.58。床面。残長8.8cm。切先・柄部欠失							
28	刀子	No.69。2号カマド。残長10.1cm。柄部欠失							

きく「侑」の墨書が記されている。14～18は土師器のいわゆる「コ」の字状口縁甕である。19・21・22は灰釉陶器長頸瓶の破片である。20・25は須恵器甕、24は鉢である。10・16は第８号掘立柱建物跡柱穴内に納まるが、本来本住居跡に帰属するものであろう。

須恵器は252片出土し、坏が151点（末野145・南比企６）、皿が12点（末野）、高台椀25点（末野）、壺・瓶類16点（末野６・東金子１・産地不明９）、甕33点（末野）、鉢５点（末野）、蓋９点（末野）、器種不明１点（末野）である。灰釉陶器は５点出土し、椀が１点、瓶が４点となる。須恵器坏が主体で、高台椀と皿を伴う。大振りの椀はなく、蓋も定量存在とはいえない。時期は熊野Ⅵ期後半と考えられる。

Ａ区第40号住居跡（第60図）

第40号住居跡は46・47－10グリッドに位置する。遺構の大半は町教育委員会調査区にあり、北東コーナー部が調査されたに過ぎない。重複遺構との新旧関係は、第９号住居跡、第41号住居跡を切っている。平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長4.18ｍ、短軸長1.44ｍ、深さ0.25ｍである。主軸方位はＮ－98°－Ｅを指す。

残存部の床面は概ね平坦である。埋土の状況は不明確である。

カマドは調査区内には検出されなかった。ピットは調査区内から１本検出された。第41号住居跡の柱穴と重複しており、埋土上部から須恵器坏が２枚と土師器甕破片が重なって出土した。土壙は２基あり、掘り方または、床下土壙と思われる。

壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏（第61図１・２）、内黒椀（３）、須恵器坏（４～８）、灰釉長頸瓶（９）、須恵器蓋（10～12）、須恵器椀（13）、土師器甕（15・16）、小型甕（17）がある。３は口縁部外面に沈線を１条巡らし、内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。４・５の須恵器坏は２枚重なった状態で出土した。底部は回転糸切り後無調整である。９は灰釉陶器長頸瓶である。接合しない破片から復元実測した。13は高台椀と思われる。14は器種が良くわからない。ロクロ整形されるが、酸化焔焼成である。時期は熊野Ⅵ期と考えられる。

Ａ区第41号住居跡（第60図）

第41号住居跡は46・47－10グリッドに位置する。重複する第８号掘立柱建物跡を切り、第39・40・42号住居跡に切られていた。第９号住居跡との関係は不明確である。住居南半は町教育委員会によって調査されており、また、重複遺構の攪乱を受け、遺構の遺存状態はあまり良くない。

平面形は、方形と考えられる。推定規模は長軸長6.30ｍ、短軸長6.10ｍ、深さ0.12ｍである。主軸方位はＮ－７°－Ｅを指す。

床面は概ね平坦で堅く締まっていた。埋土は焼土粒子を含む褐色土を基調としており、カマド前面にはカマドから流出したと思われる白色粘土が広がっていた。

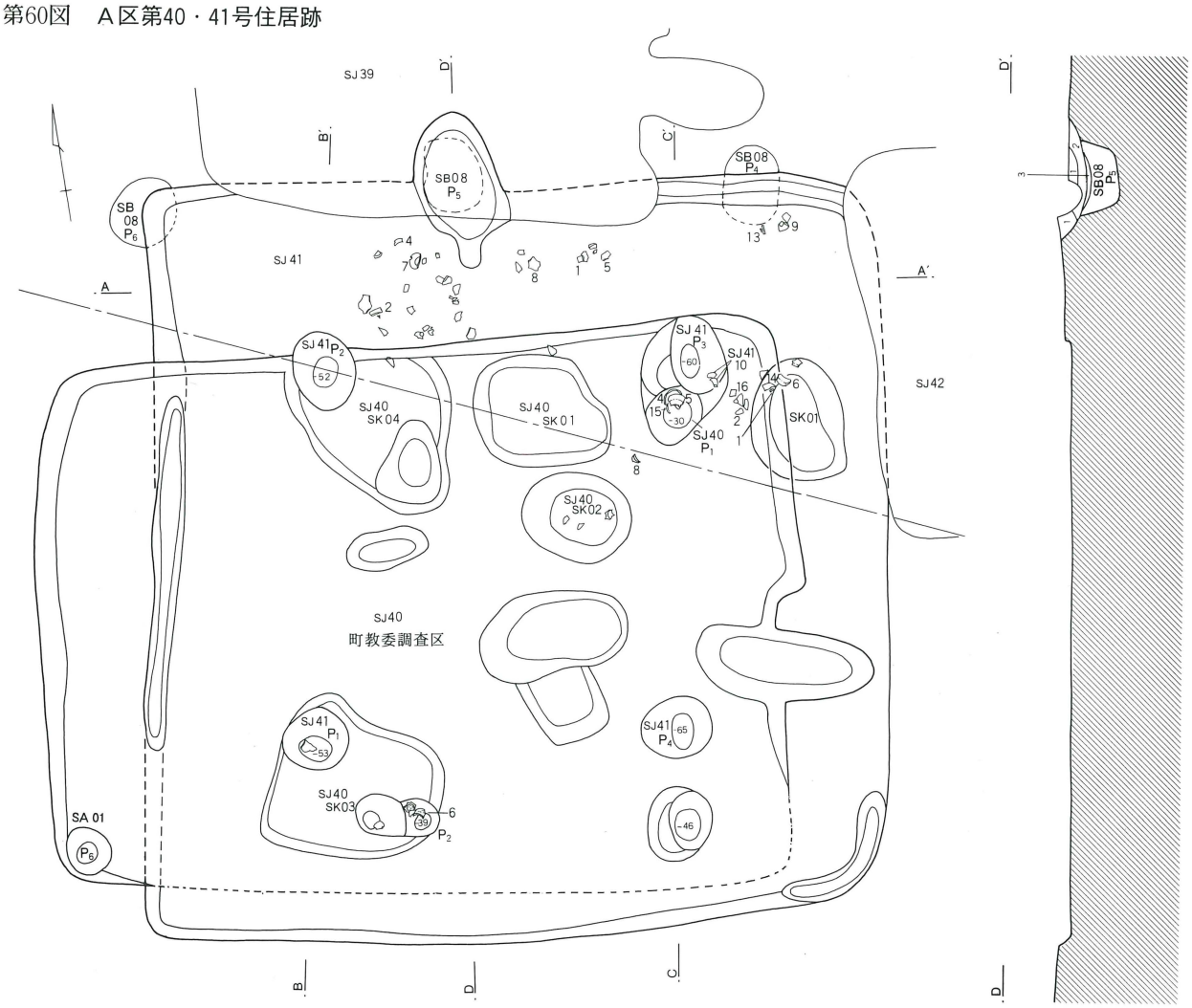
カマドは北壁のほぼ中央に設置されているが、第39号住居跡に上面を削平され、第８号掘立柱建物跡柱穴に燃焼部中央を掘り抜かれていた。

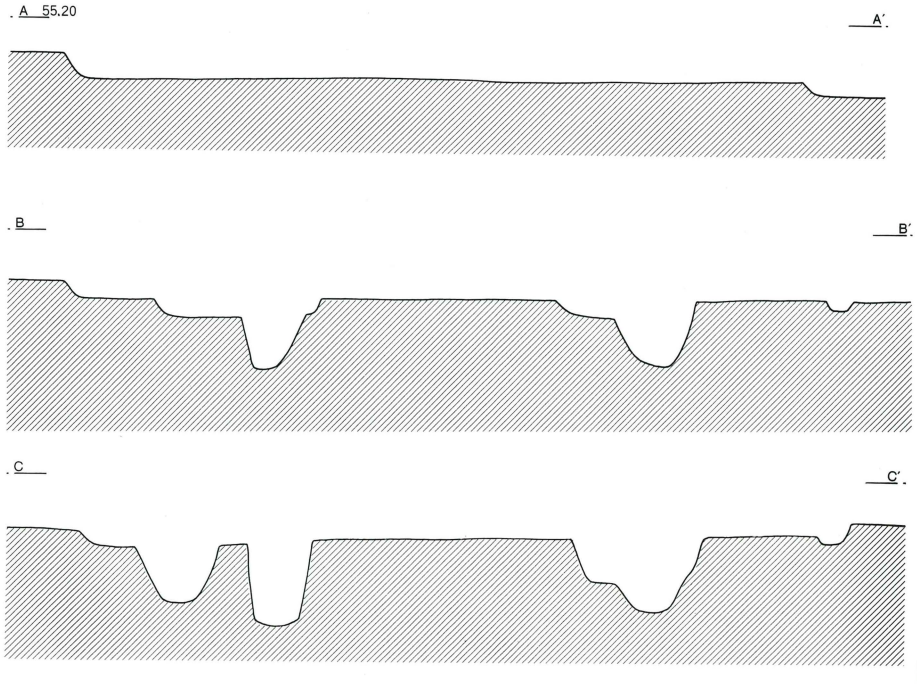
ピットは４本規則的に配され、主柱穴を構成している。土壙は１基検出された。掘り方の一部かもしれない。

壁溝は部分的に検出されたが、全体に巡っていたかどうかは不明確である。

出土遺物は、土師器坏（第62図１～５）、暗文坏（８～11）、甕（12）、須恵器蓋（６）、坏（７）、鉄製品

第60図　A区第40・41号住居跡





ＳＪ４１

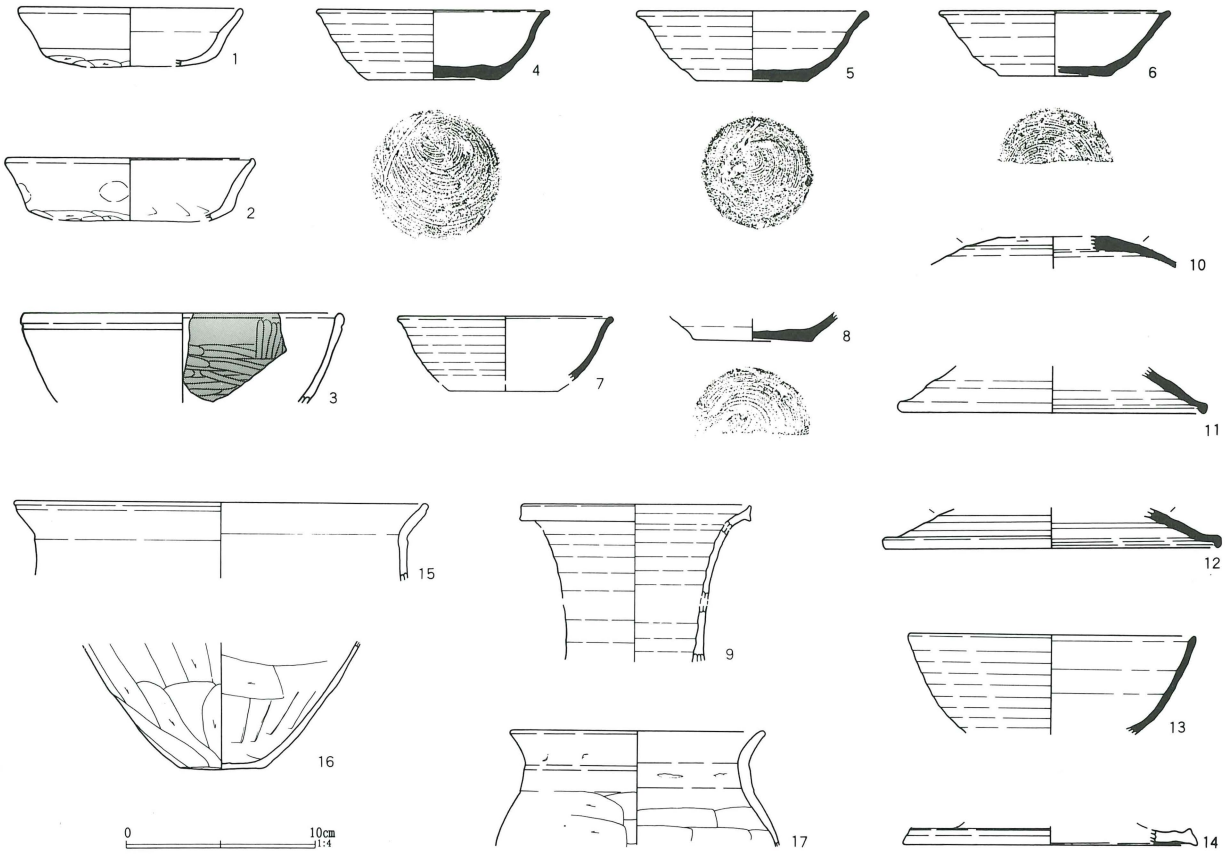
1　明褐色土
　粘質土　ロームブロック・焼土粒子混入

2　明褐色土
　粘質土　焼土ブロック混入

3　黒褐色土
　灰・炭化物多量　焼土粒子少量含む

0　2 m
1:60

第61図　A区第40号住居跡出土遺物

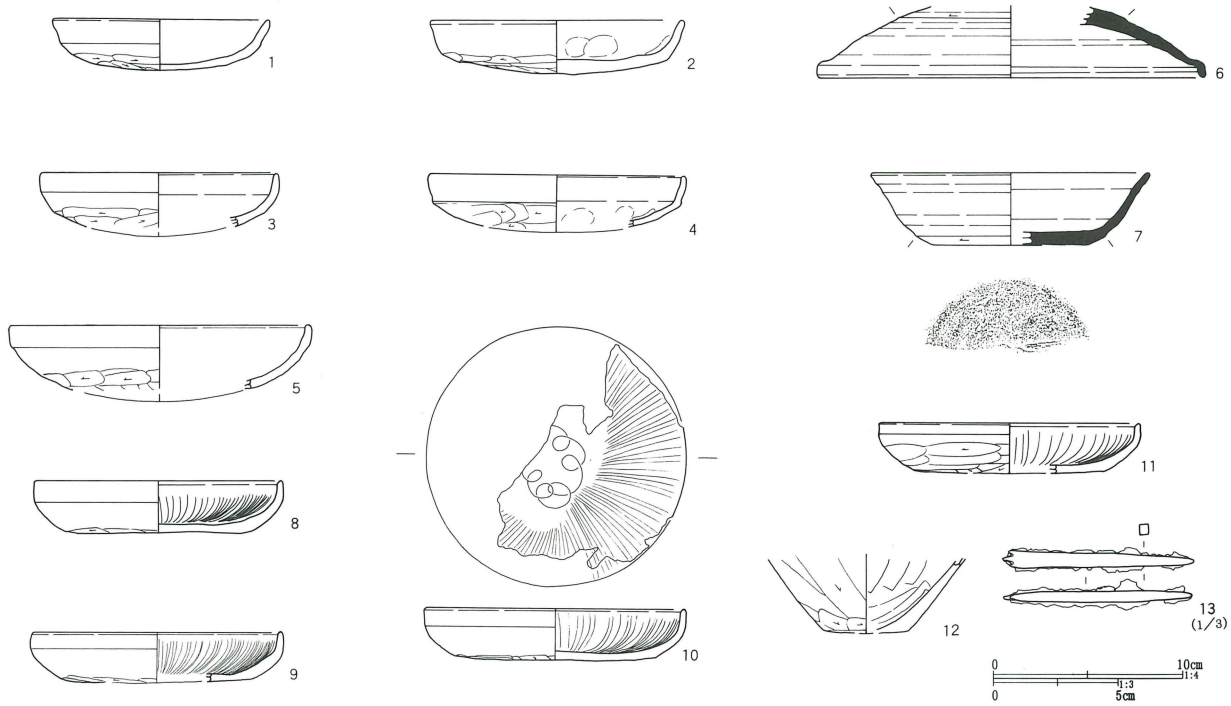


第28表　A区第40号住居跡出土遺物観察表（第61図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(11.8)	3.1		ＢＣ片	A	褐色	25%	No45。覆土
2	土師坏	(13.0)	3.3		ＡＢＣＤ	A	褐色	5%	No1。覆土
3	土師内黒椀	(16.9)	4.7		ＡＢＣＤ	A	明褐色	5%	覆土。内面黒色処理
4	須恵坏	12.3	3.7	7.0	ＢＣＥ片	B	灰褐色	80%	No41。Pit１上層。末野産。底部Ｂ0手法
5	須恵坏	12.1	3.7	5.8	ＢＣＥ片	A	灰色	75%	No39。Pit１上層。末野産。底部Ｂ0手法
6	須恵坏	(12.1)	3.4	(6.0)	ＢＣＥ片	A	灰黒色	30%	Pit２上層No1。末野産。底部Ｂ0手法
7	須恵坏	(11.3)	3.5		ＢＣＥ片	A	灰色	25%	覆土。末野産
8	須恵坏		1.6	6.4	ＢＣＥ片	B	黄灰色	50%	No6。床面。末野産
9	灰釉長頸瓶	12.0	8.3		ＥＦ	A	明灰色	15%	覆土。東濃産？　接合しない２片を合成
10	須恵蓋		1.7		ＢＥ片	A	灰色	30%	覆土。末野産
11	須恵蓋	(16.0)	2.4		ＢＣＤ片	D	灰褐色	5%	覆土。末野産
12	須恵蓋	(17.7)	2.1		ＢＣＤ片	B	灰褐色	5%	覆土。末野産
13	須恵高台椀	(15.1)	5.2		ＣＥ片	A	灰色	15%	SK01。末野産
14	土師器種不明		0.9	15.6	ＢＤＥ	B	褐色	5%	No12。覆土。ロクロ整形
15	土師甕	(21.8)	4.0		ＡＢＣＤ	A	褐色	10%	No40。覆土
16	土師甕		6.7	4.4	ＡＢＣＤ	A	褐色	30%	No1。覆土
17	土師小型甕	(13.4)	6.0		ＡＢＣＤ	A	褐色	15%	覆土

(13) がある。土師器坏は北武蔵型坏で、扁平な器形が主体となる（１・２・４）。暗文坏は平底タイプで、10にみられるように内面ラセン＋放射暗文を基本とする。８・９・11は螺旋暗文の有無が不明確であるが、おそらく施文されているものと思われる。体部は無調整（ナデ）とヘラケズリを施すもの (11) の両者がある。須恵器坏（７）は底部と体部下端がヘラケズリされるが、ケズリは浅く底部はナデられているかもしれない。末野産。13は先端が三叉状になる不明鉄製品。時期は熊野Ⅲ期古相である。

第62図　Ａ区第41号住居跡出土遺物



第29表　Ａ区第41号住居跡出土遺物観察表（第62図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(11.4)	2.7		ＡＢＣＤ	Ａ	褐色	30%	№11。床面
2	土師坏	13.3	2.8		ＡＢＣ	Ａ	褐色	55%	№18。覆土。内面指押圧痕
3	土師坏	(12.4)	2.8		ＡＢＣ	Ａ	褐色	25%	覆土。
4	土師坏	(13.4)	2.7		ＡＢＣ	Ａ	褐色	5%	№2。覆土。指圧痕
5	土師坏	(15.7)	3.4		ＡＢＣＤ	Ａ	褐色	15%	№13。覆土下層
6	須恵蓋	(20.3)	3.8		ＢＣＤＥ	Ｂ	淡褐色	25%	№12。ほぼ床面。末野産か
7	須恵坏	14.7	3.8	(8.4)	ＢＥ片	Ａ	灰色	45%	№3。覆土。末野産。底部３Ｃ手法
8	土師暗文坏	(13.0)	2.7	10.0	ＡＢＣＤ	Ａ	褐色	35%	№10。覆土下層。内面放射暗文
9	土師暗文坏	13.0	2.6	10.0	ＢＣＤ	Ａ	褐色	40%	№15　№17。覆土。内面放射暗文
10	土師暗文坏	13.8	2.7	10.6	ＢＣＤ	Ａ	褐色	45%	№42。Ｐｉｔ３内。内面放射＋ﾗｾﾝ暗文
11	土師暗文坏	(13.6)	2.6	(10.0)	ＡＢＣＤ	Ａ	淡褐色	20%	覆土。内面放射暗文
12	土師甕		4.6	4.5	ＡＢＣＤ	Ａ	淡褐色	30%	覆土
13	不明鉄製品	№14。残長7.5cm。先端三叉状							

Ａ区第42号住居跡（第63図）

第42号住居跡は46･47－10･11グリッドに位置する。重複遺構との新旧関係は、第41･47号住居跡を切り、カマド先端を第５号溝跡に切られていた。掘り込みが浅く、確認段階で床面が露出していた。平面形は不整方形で、規模は長軸長3.72ｍ、短軸長3.24ｍ、深さ0.05ｍである。主軸方位はＮ－107°－Ｅを指す。

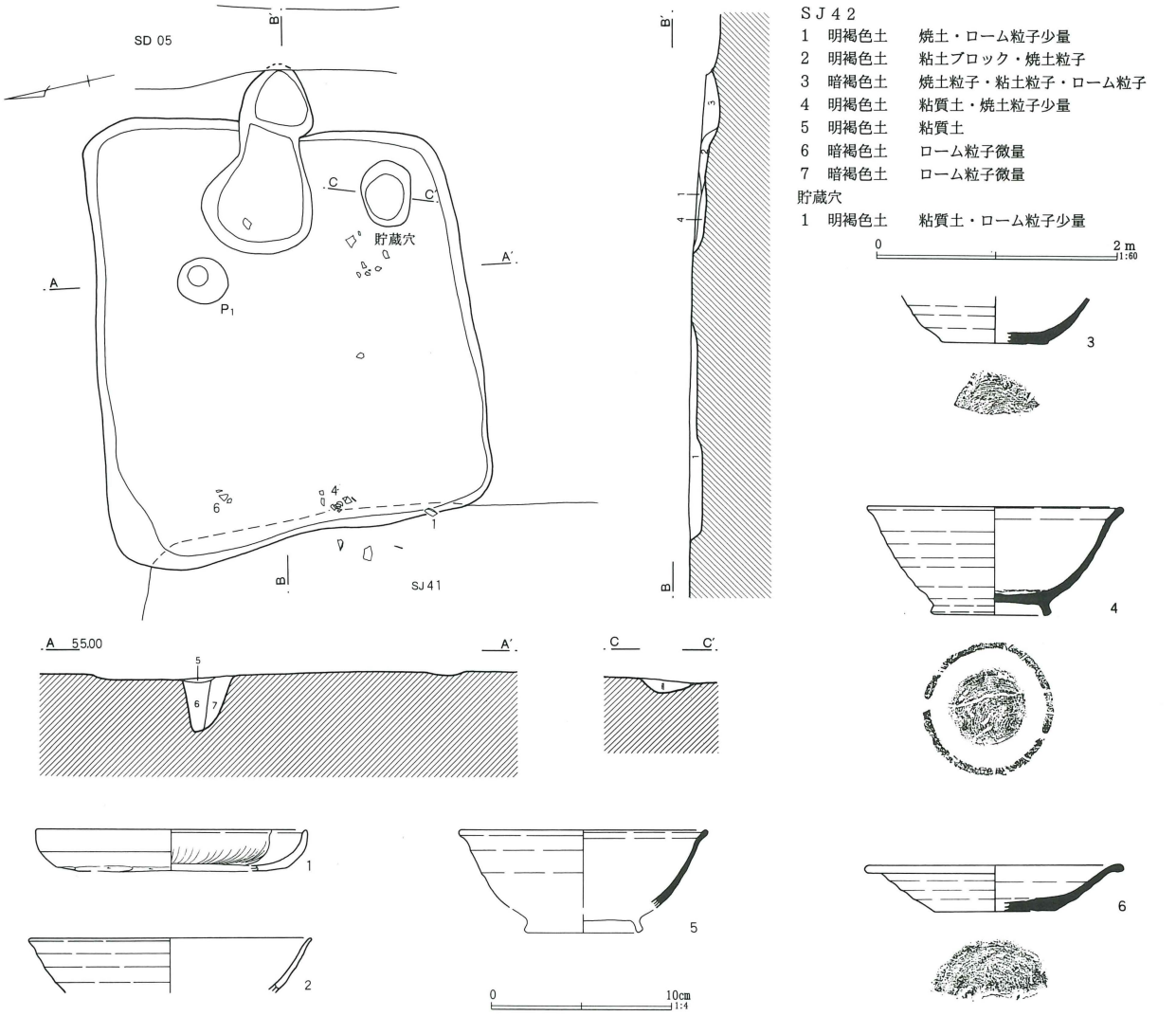
方形周溝状の掘り方をもつため、住居中央部の床面は非常に堅く踏み固められていた。一方、壁際はやや軟弱で僅かに沈下していた。

カマドは東壁のほぼ中央部に設置されているが、遺存状態は悪い。燃焼部は壁を切り込んでおり、焚口部手前には掘り方と思われる浅い土壙が掘り込まれている。袖部は検出されなかった。

ピットは１本検出されたが、伴うか否か不明である。貯蔵穴と思われるピットはカマド脇のコーナー部にある。長径36cmの楕円形で、深さは10cmと浅い。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、土師器暗文坏（第63図１）、灰釉陶器椀（２）、須恵器坏（３）、高台椀（４・５）、皿（６）がある。出土量は少ないが、ほとんど床面、または掘り方から検出されている。１の平底暗文坏は混入

第63図　A区第42号住居跡・出土遺物



第30表　A区第42号住居跡出土遺物観察表（第63図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師暗文坏	(15.0)	2.3	(12.8)	ABD	A	茶褐色	20%	No.7。内面放射暗文
2	灰釉椀	(15.6)	3.0		F	A	灰白色	10%	覆土。東濃産。内面のみ施釉か
3	須恵坏		2.6	(6.0)	B片	B	灰色	20%	掘り方。末野産。底部B0手法
4	須恵高台椀	14.0	6.0	6.1	F片	C	淡灰色	70%	No.6。床面。末野産。整形雑で歪みあり
5	須恵高台椀	(13.6)	4.3		B片	B	青灰色	10%	掘り方。末野産。ロクロ目弱い
6	須恵皿	(13.8)	2.5	(6.8)	片	C	淡灰色	25%	No.5。床面。末野産

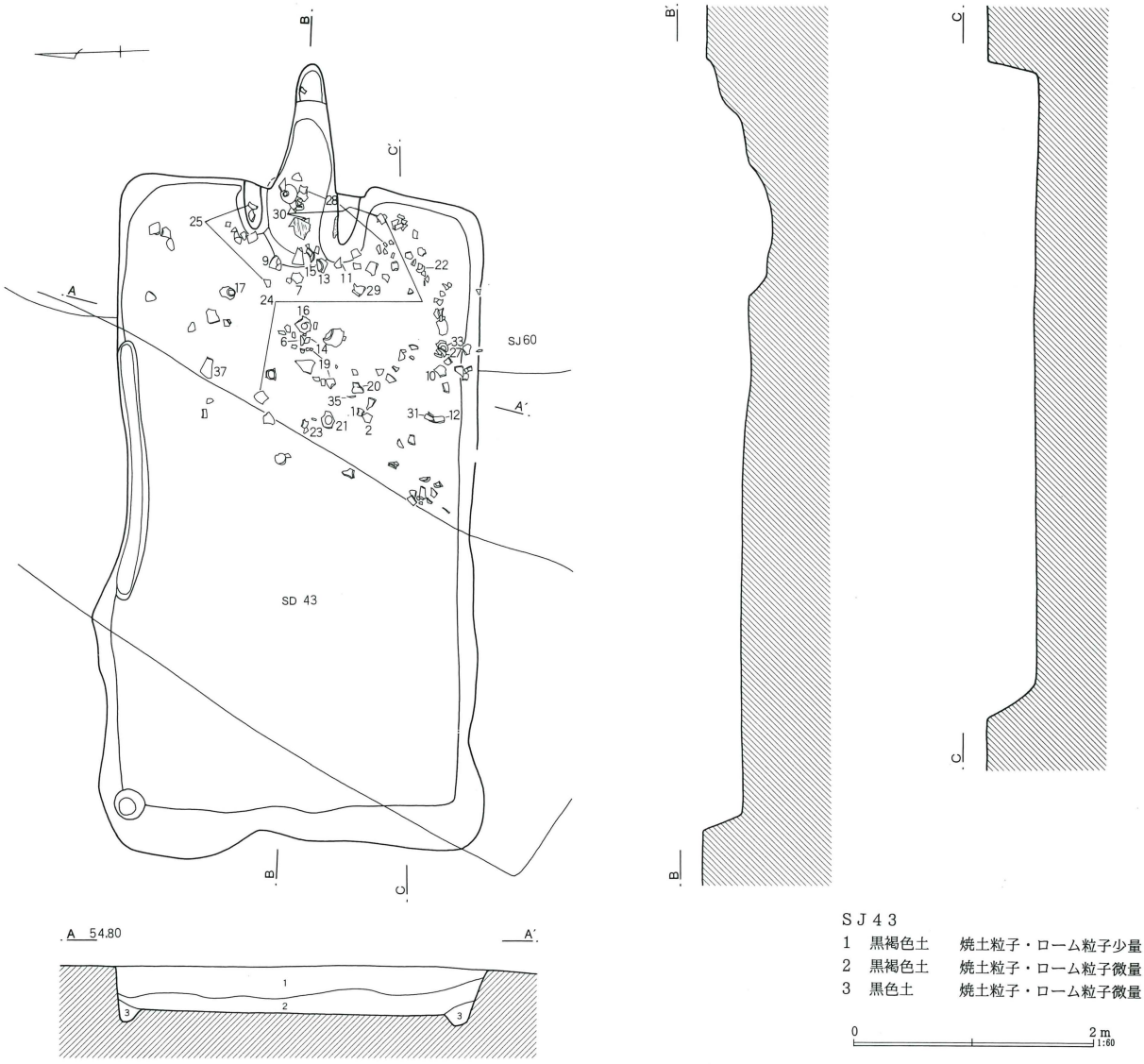
と考えられる。重複する第41号住居跡に帰属するものであろう。２は東濃産の灰釉陶器椀と思われ、きめ細かい緻密な胎土をもつ。釉の発色が悪く施釉範囲は不明瞭であるが、外面は無釉、内面のみ刷毛塗りしている可能性がある。

須恵器は破片数で108片出土した。内訳は坏が73点（末野70・南比企１・不明２）、高台椀５点（末野）、皿７点（末野）、甕18点（末野）、蓋５点（末野４・南比企１）となる。時期は熊野Ⅵ期新相と考えられる。

A区第43号住居跡（第64・65図）

第43号住居跡は46・47－11・12グリッドに位置する。重複する第60号住居跡を切り、第43号溝跡に切られていた。住居西半は町教育委員会によって調査されている。平面形は縦長の長方形で、規模は長軸長5.40ｍ、短軸長3.20ｍ、深さ0.42ｍである。主軸方位は

第64図　A区第43号住居跡



N－94°－Eを指す。

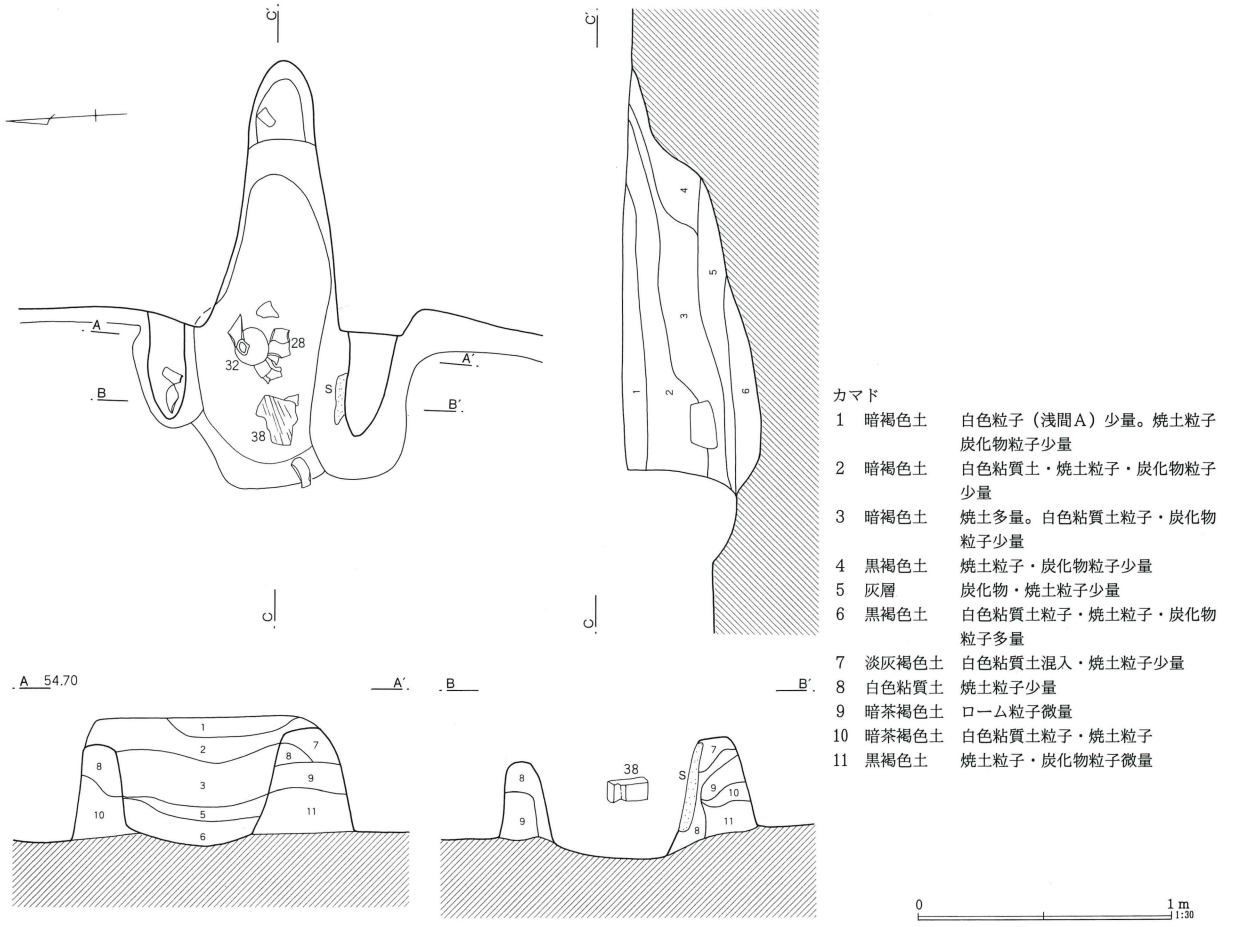
床面は平坦で堅く締まっているが、第60号住居跡との重複部はやや沈下していた。住居埋土は2層に分かれ、焼土・ローム混じりの黒褐色土を基調としており、大きな差異はない。

カマドは東壁中央に設置される。燃焼部から煙道部は壁外に長く延びる。燃焼部中央の北壁に寄った位置には、土師器小型台付甕が倒立状態で据えられていた。支脚に転用された可能性があろう。袖部は茶褐色土や黒色土の上に白色粘土を積み上げて構築されている。右袖部には片岩系の板石が埋設されていた。また、焚口部中央付近には面取りされた石材が検出された。一側面と端面が被熱しており、左袖の袖石に使用されていたものかもしれない。埋土は第5層が灰層、第2～4層が天井部崩落土と考えられる。

ピットは北西コーナーに1基検出された。壁溝は北壁部で部分的に検出されたに留まる。

出土遺物は比較的多い。全て破片で、上層から下層まで満遍なく出土している。投棄された可能性が高いであろう。器種としては土師器坏・甕・小型台付甕、須恵器小型坏・皿・高台椀・長頸瓶・甕、灰釉陶器段皿・長頸瓶、鉄製品などが出土した（第66・67図）。土師器坏は体部無調整のタイプ（1・2）と

第65図　A区第43号住居跡カマド



体部がヘラケズリされるもの（3・4）の2種類がある。須恵器坏は浅身のもの（5・6）のみで、深身の無台坏は含まれない。無台皿は3点ある（8～10）。須恵器高台椀は供膳器の主体を占め(11～22)、口径14～15cm前後の中型品を中心に、口径17cmの大型品、口径11.4cmの小型品がある。26は灰釉陶器段皿と思われる。高台は高くてしっかりしている。底部から体部は回転ヘラケズリ。灰釉は刷毛塗りと思われる。胎土は緻密で、東濃産、光ヶ丘1号窯式新段階に比定されよう。27は灰釉陶器長頸瓶で、内面には黒色粒子の吹き出しが見られる。釉調は淡い緑色をベースに白濁した部分がある。東海西部産か。

土師器甕はコの字状口縁を呈するもの（29）とコの字が崩れ器壁が厚くなったもの（28・30）の両者がある。32は小型台付甕で、カマド内から逆位に出土した。支脚に転用されたものかもしれない。38は四角に面取りされた角閃石安山岩で、一側面と一端面が被熱していた。カマド内から出土したもので、袖石に使用された可能性が高い。

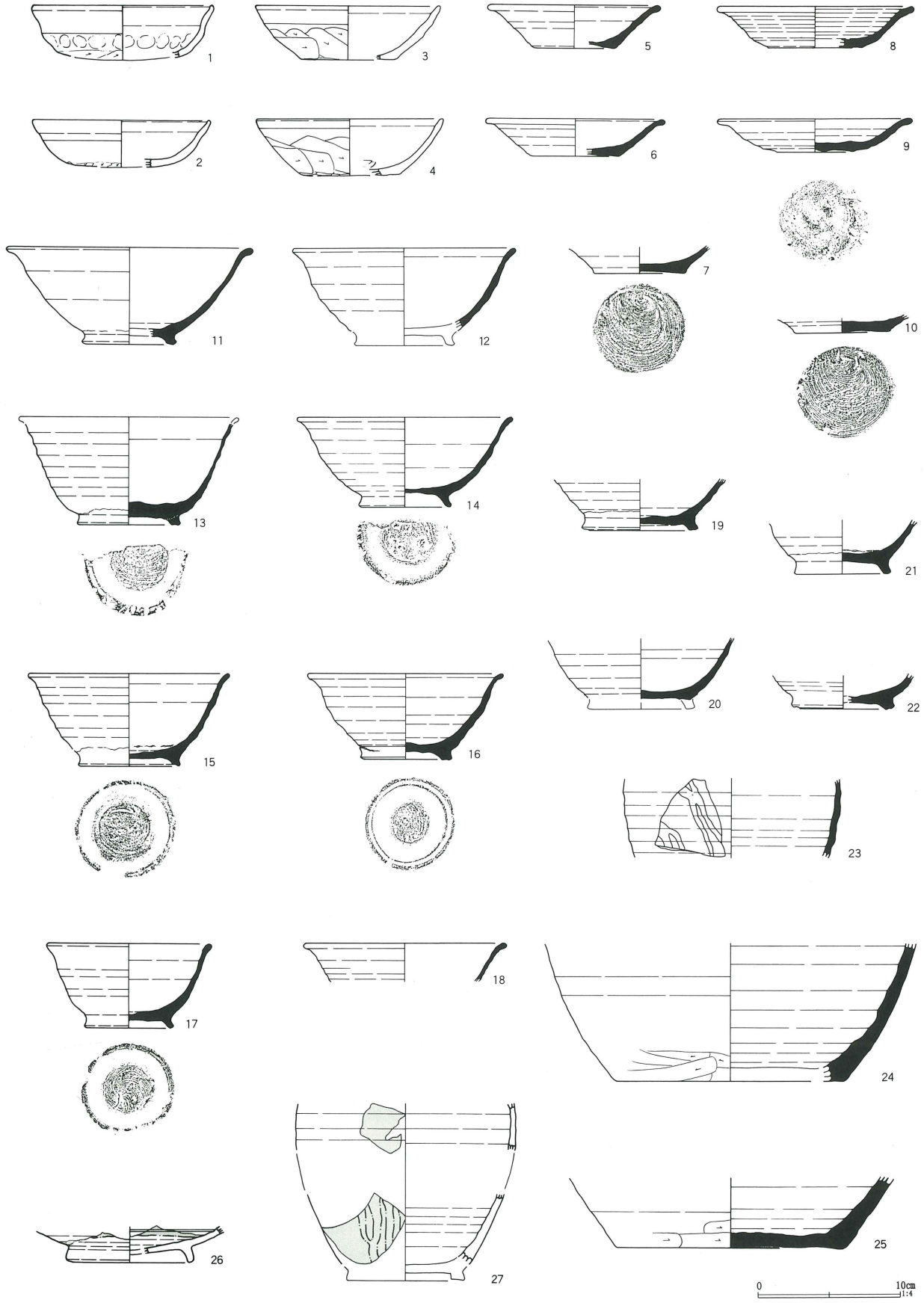
須恵器は397片出土した。坏・高台椀が290点（末野産288点・南比企産2点）あり、このうち高台椀と特定できるものが89点含まれる。皿は10点(末野産)、蓋は8点（末野産）、壺瓶類は5点（末野産2・南比企産2、不明1）、甕は79点（末野産76・南比企2・不明1）、鉢は5点（末野産）出土した。

時期は熊野Ⅶ期と考えられる。

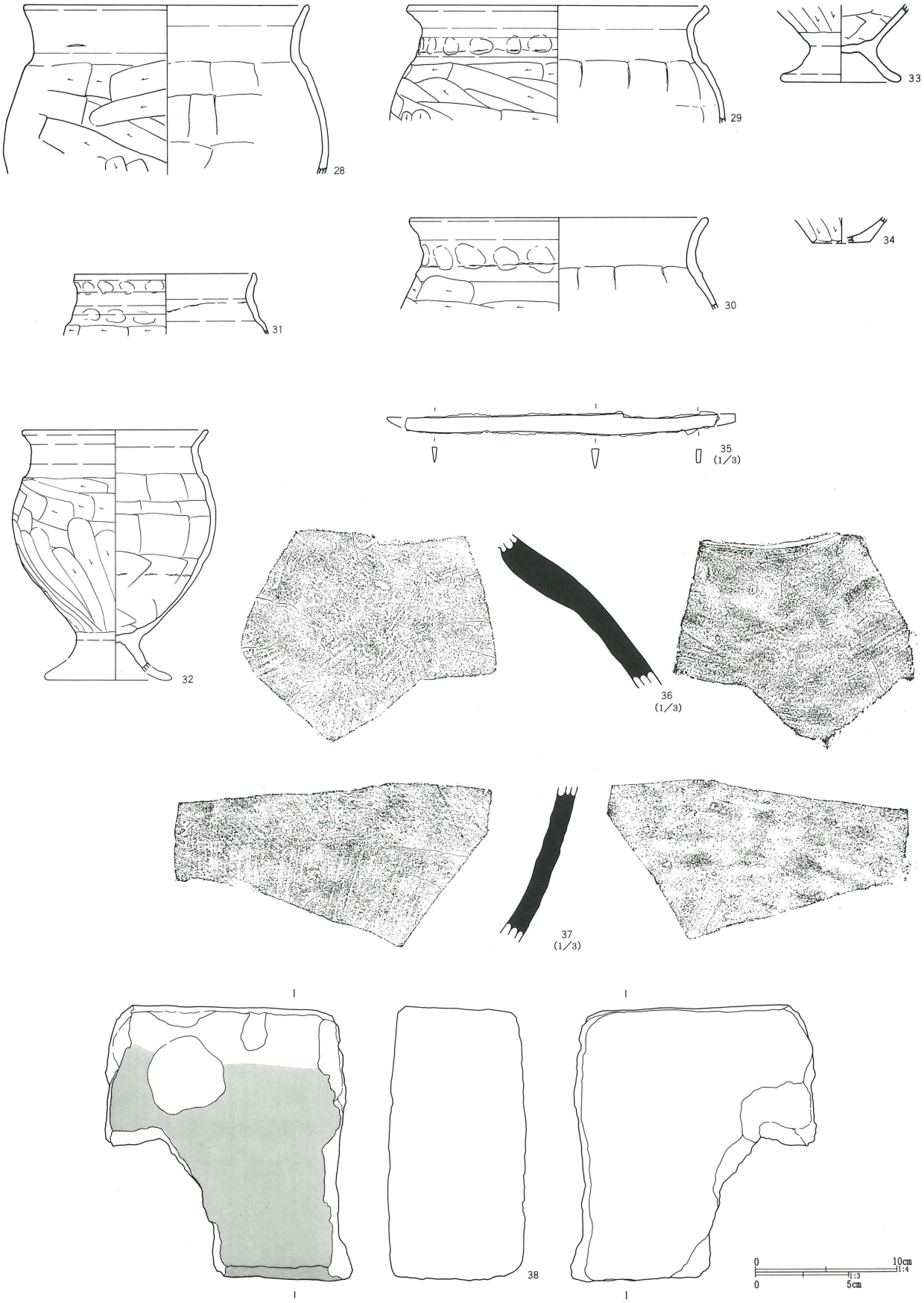
A区第44号住居跡（第68図）

第44号住居跡は46－10・11グリッドに位置する。第47・48・49号住居跡を切り、北東コーナー部を僅かに第11号溝跡に削平されている。平面形は、縦長の長方形で、規模は長軸長4.86m、短軸長3.00m、深さ0.22mである。主軸方位はN－87°－Eを指す。

第66図　A区第43号住居跡出土遺物(1)



第67図　A区第43号住居跡出土遺物(2)



第31表　A区第43号住居跡出土遺物観察表（第66·67図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(12.6)	3.6	(9.4)	ＡＢ	A	黄褐色	20%	№20
2	土師坏	(12.4)	3.2		ＡＢＧ？	A	褐色	20%	№18
3	土師坏	(12.8)	3.7	(6.6)	ＡＢ	A	橙褐色	15%	覆土
4	土師坏	(13.0)	4.0	(6.8)	ＡＢＤ	A	明褐色	20%	カマド
5	須恵坏	(11.8)	3.0	(5.6)	F片	B	灰色	30%	覆土。末野産。坏と皿の中間形態
6	須恵坏	(12.2)	2.6	(6.0)	ＢＤ	C	暗灰褐色	20%	№114。厚手で焼き甘い
7	須恵坏		1.9	6.4	C片	A	灰色	90%	№70。末野産。底部Ｂ0手法
8	須恵皿	(13.4)	2.9	(6.6)	B片	D	灰褐色	15%	カマド掘り方。末野産
9	須恵皿	13.4	2.3	5.4	C片	D	灰褐色	50%	№71。末野産。底部指頭痕。焼き悪い
10	須恵皿		1.2	6.8	D片	B	褐色	90%	№33。末野産
11	須恵高台椀	17.0	6.8	6.2	ＢＣＤ片	C	灰褐色	50%	№66他。末野産
12	須恵高台椀	(15.5)	5.8		C片	B	灰色	30%	№17。末野産
13	須恵高台椀		7.0	(7.0)	C片	B	黄灰色	25%	№68。末野産
14	須恵高台椀	(15.0)	6.3	6.2	ＣＦ片	B	灰色	40%	№84。末野産。胎土肌目粗く小石の抜けた小穴多い
15	須恵高台椀	(14.0)	6.5	7.0	C片	D	暗灰褐色	30%	カマドNo.10。末野産。高台雑な作り
16	須恵高台椀	13.7	6.0	6.0	ＢＣ片	D	淡褐色	75%	№82。末野産
17	須恵高台椀	(11.4)	5.9	5.8	C片	D	黄灰褐色	65%	№77。末野産。内面重ね焼きと思われる粘土瘤あり
18	須恵高台椀	(14.0)	2.7		C片	A	青灰色	20%	覆土。末野産。高台が付くと思われる。
19	須恵高台椀		3.6	7.1	ＣＤ	B	黄灰色	40%	№88·131。末野産
20	須恵高台椀		4.3		ＢＤ片	C	黄灰色	45%	№22。末野産。内面油煙付着
21	須恵高台椀		3.7	6.4	C片	B	灰褐色	90%	№89。末野産。内面重ね焼き痕あり
22	須恵高台椀		2.5	(6.1)	C片	B	淡灰色	35%	№129。末野産。内面黒色有機物の皮膜ができている
23	須恵長頸瓶		5.6		B	B	淡青灰色	10%	№118。産地不明。外面自然釉垂れる
24	須恵甕		9.7	(16.0)	片	C	黄灰褐色	20%	№61·94。末野産。
25	須恵甕		5.0	(16.0)	C片	C	黄灰褐色	10%	№72 カマドNo.2。末野産。軟質
26	灰釉段皿		2.5	(8.4)	F	A	明灰色	20%	覆土。東濃産。灰釉刷毛塗り。底部回転ヘラケズリ
27	灰釉長頸瓶		(11.4)		F	A	灰白色	15%	№35。覆土。東海西部産か
28	土師甕	20.0	11.9		ＢＤ	A	茶褐色	15%	カマドNo.6　No.59
29	土師甕	(21.0)	8.2		ＡＢ	A	茶褐色	25%	№138
30	土師甕	(21.0)	6.5		ＡＣＤ	A	明褐色	30%	カマドNo.7·12　No.137
31	土師小型台付甕	(12.7)	4.3		ＡＢ	B	褐色	30%	№15·16
32	土師小型台付甕	12.9	16.9		ＡＣ	B	黄褐色	95%	カマドNo.11
33	土師小型台付甕		5.5	8.0	A	A	黄褐色	80%	№125。
34	土師甕		1.7	(4.0)	ＡＢ	A	明褐色	30%	覆土
35	刀子	№23。残長16.7cm。茎先、切先欠失							
36	須恵甕				C片	B	灰色		覆土。末野産。平行叩き後ﾅﾃﾞ
37	須恵甕				C片	B	淡灰色		№98。末野産。平行叩き後ﾅﾃﾞ
38	切石	最長19.1cm。重さ2825ｇ。角閃石安山岩。淡褐色～明褐色で、２面が被熱している							

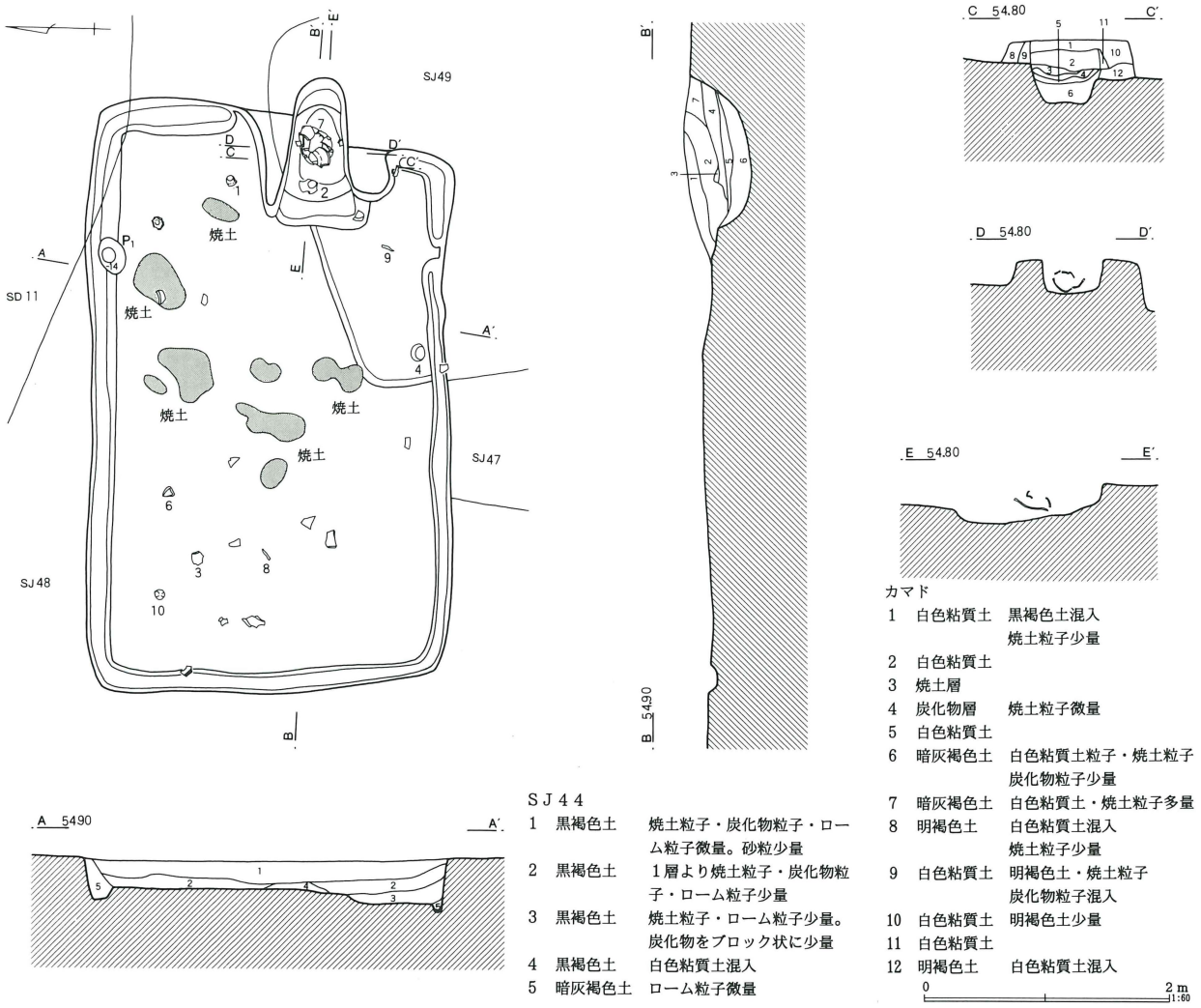
床面は中央部が高く周囲がやや低くなる。また、第49号住居跡埋土上に床面を構築したために、南東部の床面は沈下していた。全体に堅く踏み固められており、カマド前面は特に堅く締まっていた。住居中央部から東部にかけて、床面の被熱部分が８個所検出されたが、性格は不明である。

埋土は焼土・炭化物粒子混じりの黒褐色土を基調としていた（第１～３層）。

カマドは東壁に設置され、その左右で壁ラインがずれている。燃焼部は壁を切り込んでおり、先端は急角度で立ち上がる。底面は鍋底状に掘り込まれていた。袖は明褐色土の上に白色粘土を積み上げて構築されていた（第８～12層）。第１～３層は天井部崩落土で、カマド前面に広範囲に流出していた。第４層が灰層と考えられる。第５・６層は掘り方埋土である。

ピットは１本検出されたが、住居に伴う柱穴ではなかろう。壁溝はカマドを除き、概ね全周する。

第68図　A区第44号住居跡

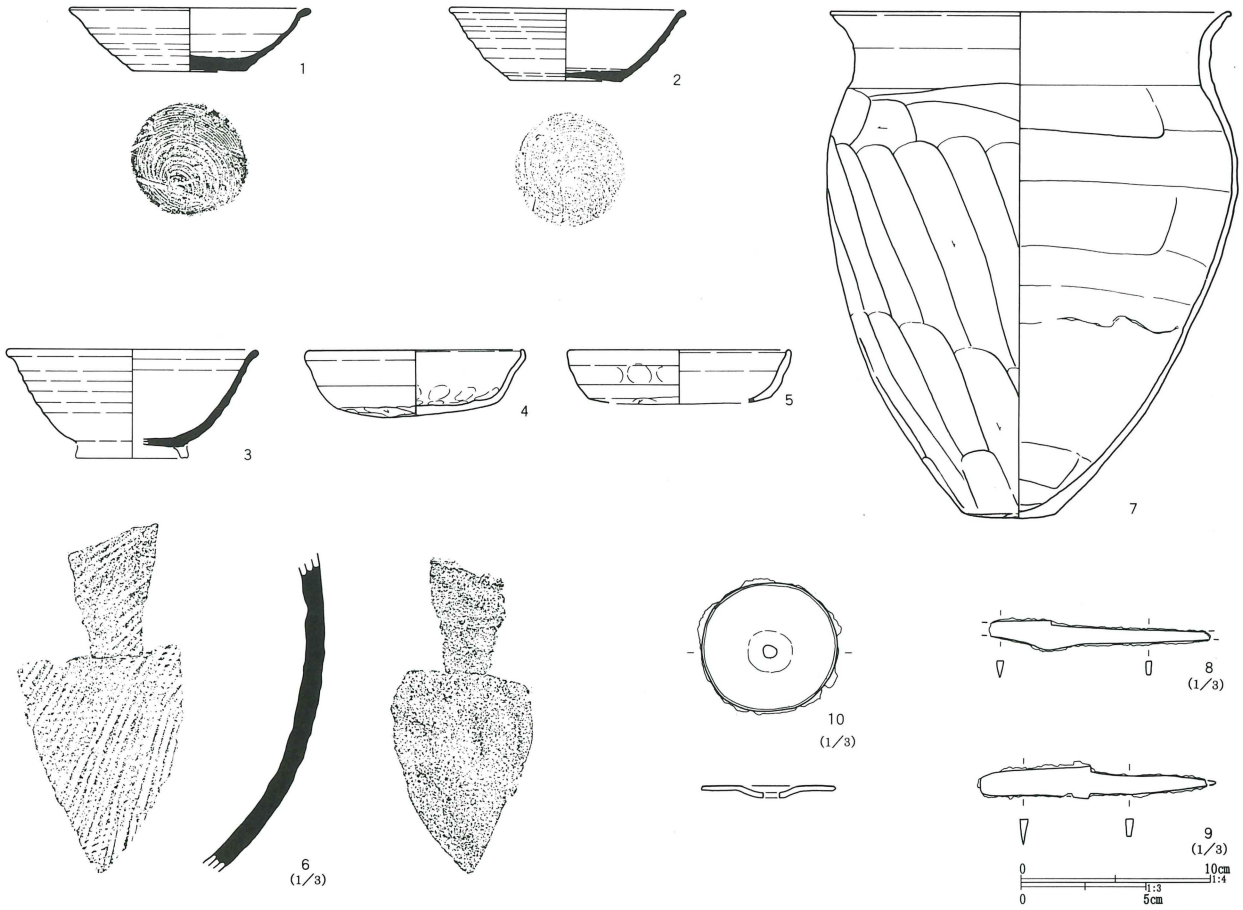


第32表　A区第44号住居跡出土遺物観察表（第69図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	須恵坏	12.6	3.3	5.9	C片	A	暗青灰色	90%	No.1。覆土下層。末野産。外面紫灰色。底部B0手法
2	須恵坏	(12.3)	3.8	5.9	C片	C	灰褐色	45%	カマド内No.3。末野産。底部B0手法
3	須恵高台椀	(13.0)	5.1		C片	C	暗灰色	30%	No.14。覆土上層。高台剥落。末野産
4	土師坏	11.4	3.5	8.5	AB	A	褐色	100%	No.4。覆土。外側面黒色煤状物質付着
5	土師坏	(11.6)	2.8		AB	A	褐色	10%	確認面
6	須恵甕				B片	B	灰色		No.11。覆土下層。末野産。外面平行叩き
7	土師甕	21.1	26.7	4.8	BCD	A	淡褐色	95%	カマド内No.1
8	刀子	No.12。覆土。残長8.8cm。刃部、柄部先端欠失							
9	刀子	No.3。覆土上層。残長9.0cm。刃部・柄部先端欠失							
10	鉄製紡錘車	No.15。覆土上層。径5.3cm。厚さ0.2cm							

出土遺物は土師器坏・甕、須恵器坏・高台椀・甕、鉄製刀子・紡錘車がある（第69図）。2の須恵器坏と7の甕はカマド内から出土した。7はほぼ完形で、火床面に横倒しの状態で残されていた。その他の遺物は全て床面よりも浮いた状態で検出された。1・2は末野産の無台坏。底部は回転糸切り後、無調整である。3は高台椀であるが、高台が剥落している。4・5は土師器坏。底部に指頭痕が顕著に残る。6は須恵器甕片。外面平行タタキ、内面無文当て具である。7は「コ」の字状口縁甕である。8・9は鉄製刀子。刃部と柄部を欠く。10は鉄製紡錘車の紡輪と思われる。軸を欠いている。

第69図　Ａ区第44号住居跡出土遺物



須恵器は102片出土した。内訳は坏が51点（末野産49・南比企産２）、（高台）椀５点（末野）、蓋８点（末野）、甕27点（末野）、壺瓶類９点（末野）、器種不明２点（産地不明）となる。時期は熊野Ⅴ期～Ⅵ期と考えられる。

Ａ区第45号住居跡（第70図）

第45号住居跡は45･46－11グリッドに位置する。住居東半は町教育委員会によって調査されている。重複遺構との新旧関係は、第48号住居跡・第63号住居跡を切り、第５号溝跡・第11号溝跡によって中央部を削平されていた。また、第37号掘立柱建物跡は本住居跡床面を切っていた。

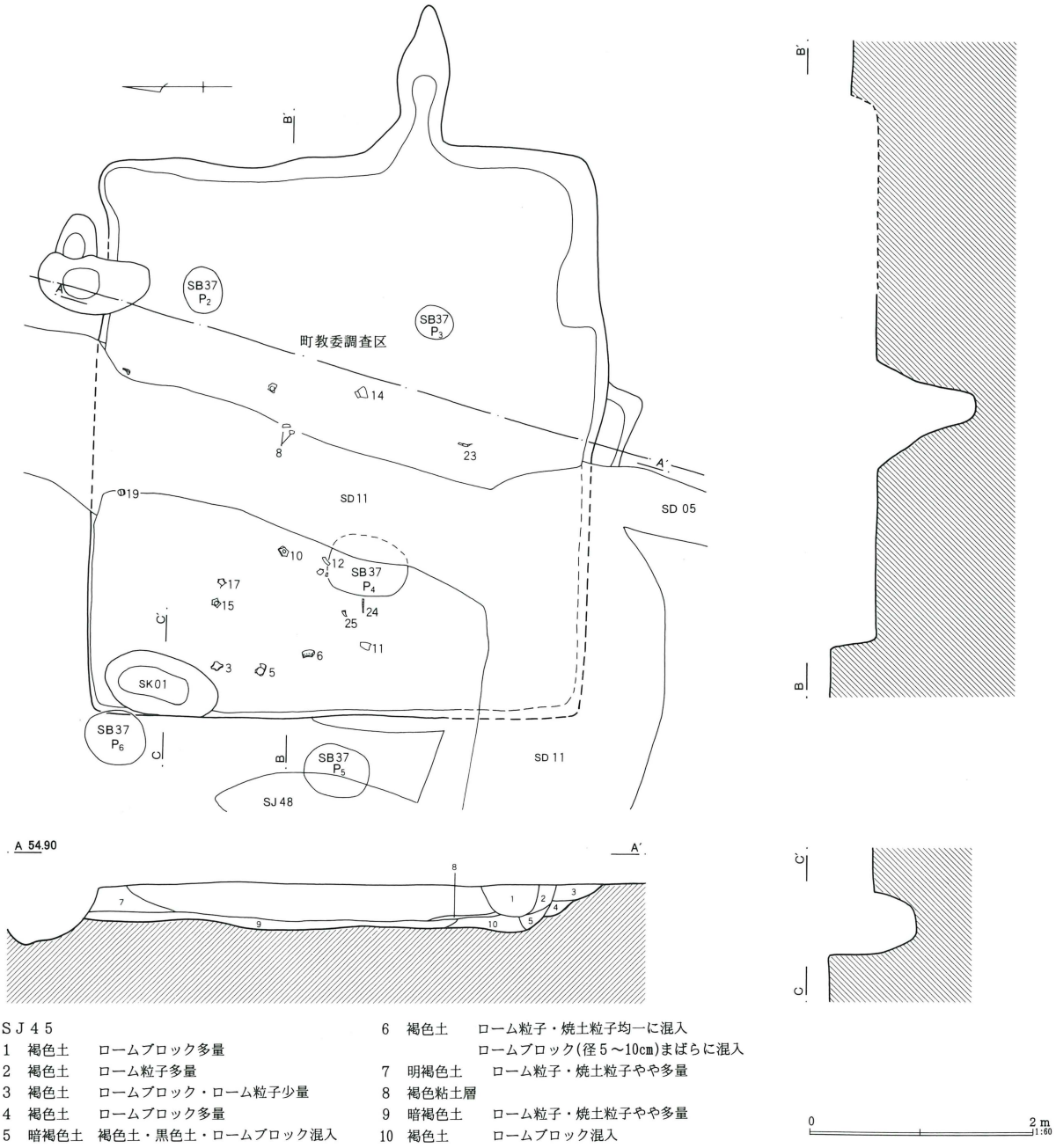
平面形は長方形で、規模は長軸長5.02ｍ、短軸長4.62ｍ、深さ0.42ｍである。主軸方位はＮ－90°－Ｅを指す。

残存部の床面は概ね平坦で、貼床されていた。中央部は堅く締まっていたが、西壁際はやや軟弱だった。埋土はローム粒子・焼土粒子混じりの褐色土を基調としている（第６・７層）。第８層は貼床、第９層上面が床面である。

カマドは東壁に設置されており、町教育委員会によって調査されている。住居に伴うピットは検出されなかった。土壙は１基西壁際に検出されたが、伴うか否か不明である。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は土師器坏・皿・暗文坏、須恵器坏・高台椀・蓋・高盤・脚付盤・長頸瓶・短頸壺・コップ型土器・甕、土製支脚、鉄製品などがある（第71図）。８の須恵器坏と15の脚付盤以外は覆土から出土した。５・８は末野産の須恵器坏で、底部は回転糸切り後再調整している。６は南比企産の坏で軽量感がある。やはり底部は回転糸切り後再調整している。10は末野産の椀蓋で、天井部外面に二重丸状の刻印が押さ

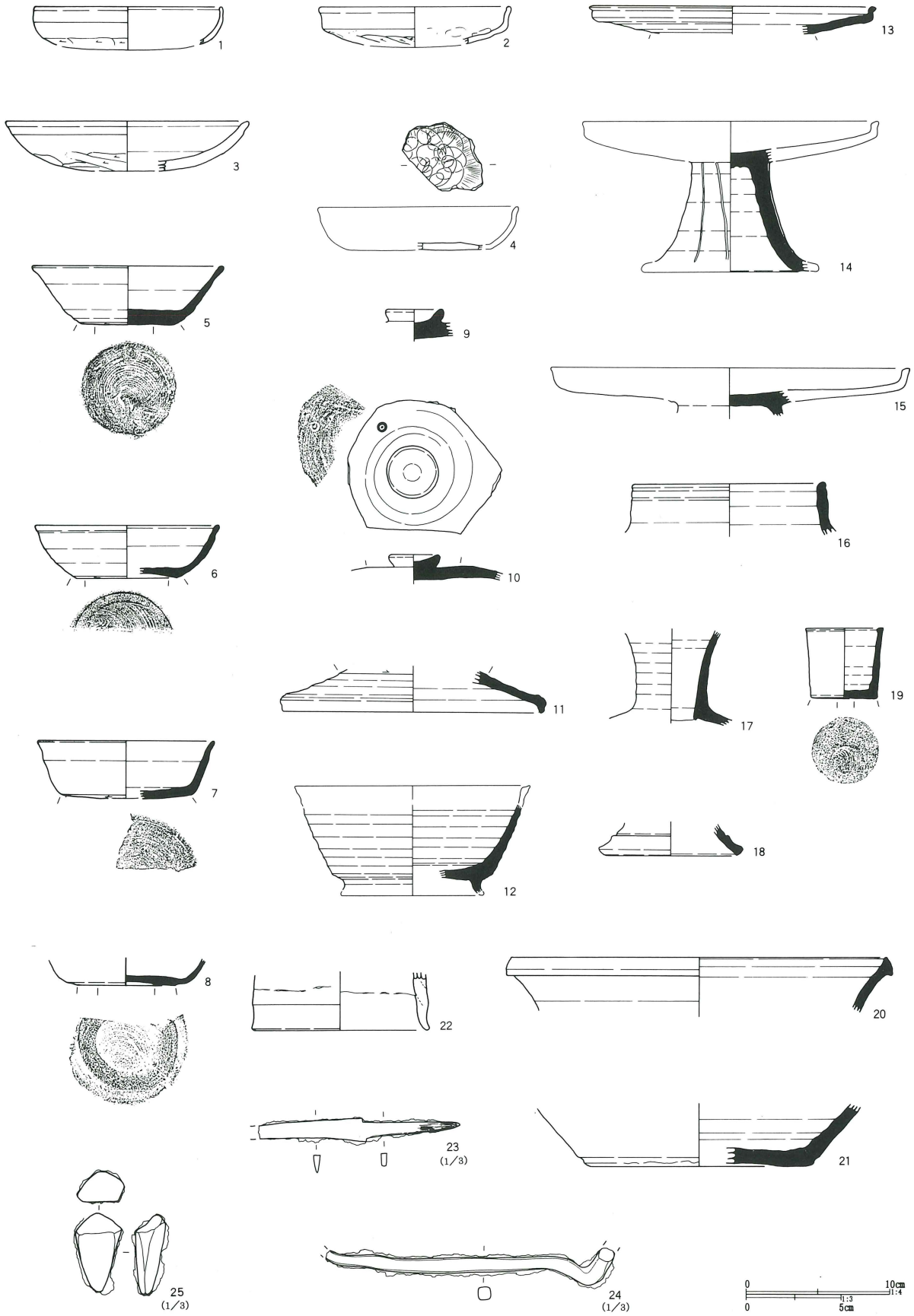
第70図　A区第45号住居跡



れている。46－11グリッド出土の須恵器高台椀に全く同一の刻印をもつもの（第330図４）があり、本来セット関係にあったことを示すものと考えられる。12は末野産の高台椀で、焼きも良く重厚なつくりである。腰が強く張っている。13・14は高盤。14は脚部に２本一単位の刻線が四方に配されている。15は脚付盤と思われる。底部外面の剥落部には回転ヘラケズリ痕がみえる。内面は不定方向のナデ調整。17は南比企産の長頸瓶。肩部接合部で剥落している。19は南比企産のコップ型土器。完形品で、底部は回転糸切り後周辺部を再調整している。23は刀子。24は棒状鉄器。25は楔状の鉄製品である。３・７は混入品と思われる。

須恵器は162片出土した。内訳は坏が107点（末野産100・南比企産７）、椀類３点（末野）、蓋15点（末野13・不明２）、盤類３点（末野）、壺瓶類３点（末野２・南比企１）、コップ型土器１点（南比企）、甕30点（末野28・南比企２）となる。末野産が９割を

第71図　A区第45号住居跡出土遺物



第33表　A区第45号住居跡出土遺物観察表（第71図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(12.9)	2.6		B	B	淡褐色	15%	覆土
2	土師坏	(13.0)	2.6		AB	B	褐色	15%	覆土
3	土師皿	(16.7)	3.5		AB	A	明褐色	15%	№1。覆土。暗文なし
4	土師暗文坏				B	A	赤褐色		覆土　放射十ラセン暗文
5	須恵坏	(13.0)	4.1	6.4	C片	A	灰色	50%	№3。覆土。末野産。底部B3d手法
6	須恵坏	(12.6)	3.7	(7.0)	B針	A	黄褐色	30%	№2。覆土。南比企産。底部B3d手法
7	須恵坏	(12.2)	4.0	(9.0)	C片	A	暗灰色	20%	覆土。末野産
8	須恵坏		1.9	6.8	BC片	A	紫灰色	65%	№12·13。床面。末野産。底部B3b手法
9	須恵蓋		2.1		片	B	黄褐色	90%	覆土。末野産。つまみ径3.7cm
10	須恵蓋		1.9		C片	C	黄灰褐色	90%	№8。覆土。末野産。天井部外面「◎」刻印あり
11	須恵蓋	(18.0)	2.9		C片	A	灰色	20%	№4。覆土。末野産
12	須恵高台椀		6.2		C片	A	青灰色	30%	№11。覆土。末野産。底部糸切り痕残る
13	須恵高盤	(19.4)	1.9		CF	B	灰色	10%	覆土。末野産か。口径大きい
14	須恵高盤		8.4		CG片	C	灰褐色	60%	№15。覆土。末野産か。脚部2本1組の沈線4単位施文
15	須恵脚付盤		2.0		C片	B	明灰色	80%	№6。床面。末野産
16	須恵短頸壺	(13.0)	3.6		BC	A	青灰色	15%	覆土。末野産と思われる
17	須恵長頸瓶		6.5		C針	A	灰色	40%	№7。覆土。南比企産
18	須恵脚付瓶か		2.3	(9.2)	BC	A	青灰色	15%	覆土。末野産か。瓶脚部か
19	須恵コップ形土器	5.3	4.9	4.6	C針	A	灰色	100%	№5。覆土下層。南比企産
20	須恵甕	26.0	3.9		針	A	暗青灰色	5%	覆土。南比企産
21	須恵甕		4.4	(15.0)	C針	B	淡灰色	15%	覆土。南比企産
22	土製支脚	(12.0)	4.0		AB	A	淡褐色	25%	覆土
23	刀子	№1。覆土。残長10.5cm。切先欠失							
24	不明鉄製品	№16。覆土。残長15.0cm。棒状							
25	不明鉄製品	№17。覆土。残長4.1cm。塊状。楔か？							

超える比率で、南比企産が1割弱混じっていた。時期は熊野Ⅳ期と考えられる。

A区第46号住居跡（第72図）

第46号住居跡はA区北東部の38－18グリッドに位置し、東壁部は調査区外に延びている。平面形は長方形と推定され、残存規模は長軸長4.70m、短軸長4.68m、深さ0.50mである。主軸方位はN－92°－Eを指す。

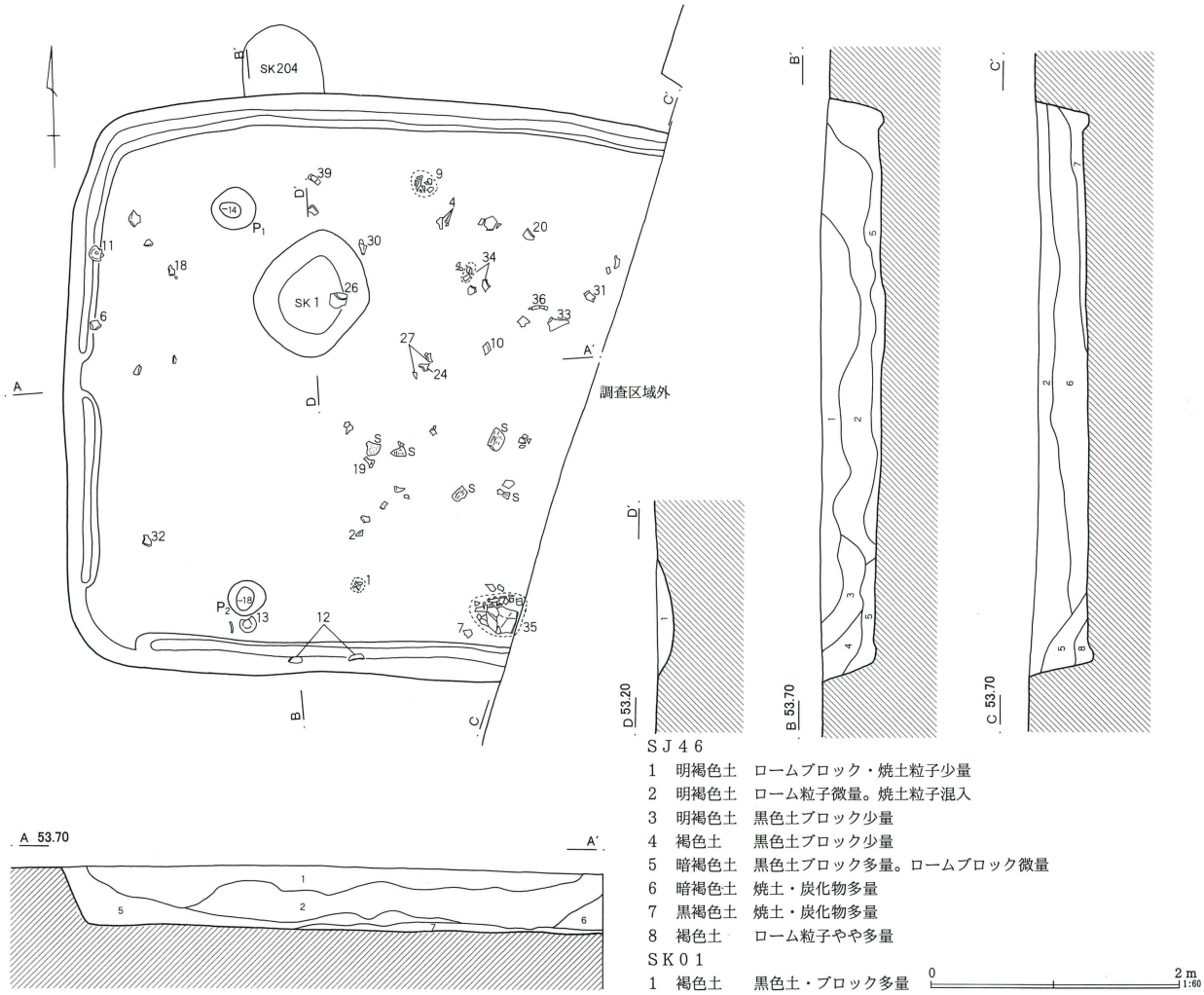
床面は概ね平坦で堅く踏み固められていた。埋土はきめ細かい明褐色土（第1・2層）、黒色土ブロック混じりの暗褐色土（第5層）を基調とし、床面上には焼土・灰・炭化物混じりの黒色土が堆積していた。

カマドは調査区内には検出されなかったが、埋土の状況からおそらく東壁に位置するものと推定される。ピットは2本検出されたが、柱穴と見るには浅い。土壙は1基検出された。上面に貼床されており、掘り方または床下土壙であろう。壁溝は一部途切れるが、ほぼ巡っている。

出土遺物は比較的多く、土師器坏・皿・暗文坏・壺・小型甕、須恵器坏・椀・蓋・高台付坏・高台椀・長頸瓶・円面硯・高盤・甕、鉄製品・土錘・砥石がある（第73・74図）。床面よりも浮いた位置から出土したものがほとんどである。床面近くから出土したものは第図9の暗文坏、35の小型甕、39の砥石がある。11の須恵器坏は西壁、12・13は南壁直下から出土している。

土師器坏は口縁部が内彎気味に開くもので、平底風の底部を作り出すもの（1）と弱い丸底風のもの（2～4）がある。7～10は平底暗文坏。遺存状態の良い9の内面には放射暗文と螺旋暗文が施されている。11～20は須恵器坏。16・20は混入である。11・12、15・17～19は末野産、13・14は南比企産で両者が共伴する。器形や調整技法は類似し、底部回転糸切り後、周辺部や体部下端を再調整している。21は南比企産の無台椀である。22～25は蓋。23は坏G蓋で混入品。末野または群馬産と思われる。24は末野産の高台椀蓋、25は南比企産の椀蓋であろう。26・27

第72図　Ａ区第46号住居跡



は末野産の高台椀。26は口縁部に内傾する面をもつ、しっかりしたつくりである。底部は糸切り痕をそのまま残す。27はやや薄手のつくりで、底部は回転ヘラケズリ調整されている。28は湖西産の高台坏(坏B)。混入である。29も湖西産の長頸瓶。混入。30は南比企産の円面硯。硯面は摩滅している。脚部には刻線が僅かにみえる。31は末野産の高盤。口縁と脚部は接合しない。脚部は１段の方形透穴が２個残り、配置から全体で３方透しになるものと推定される。32は末野産の瓶類。

須恵器は破片数で165点出土した（混入品も含む）。内訳は、坏が93点（末野産69・南比企産23・湖西産１）、高台坏１点（湖西産）、無台椀１点（南比企）、高台椀８点（末野７・南比企１）、蓋25点（末野24・南比企１）、壺瓶類15点（末野14・湖西１）、高盤２点（末野）、円面硯１点（南比企）、甕19点（末野17・不明２）である。時期は熊野Ⅲ期新相中心と考えられる。

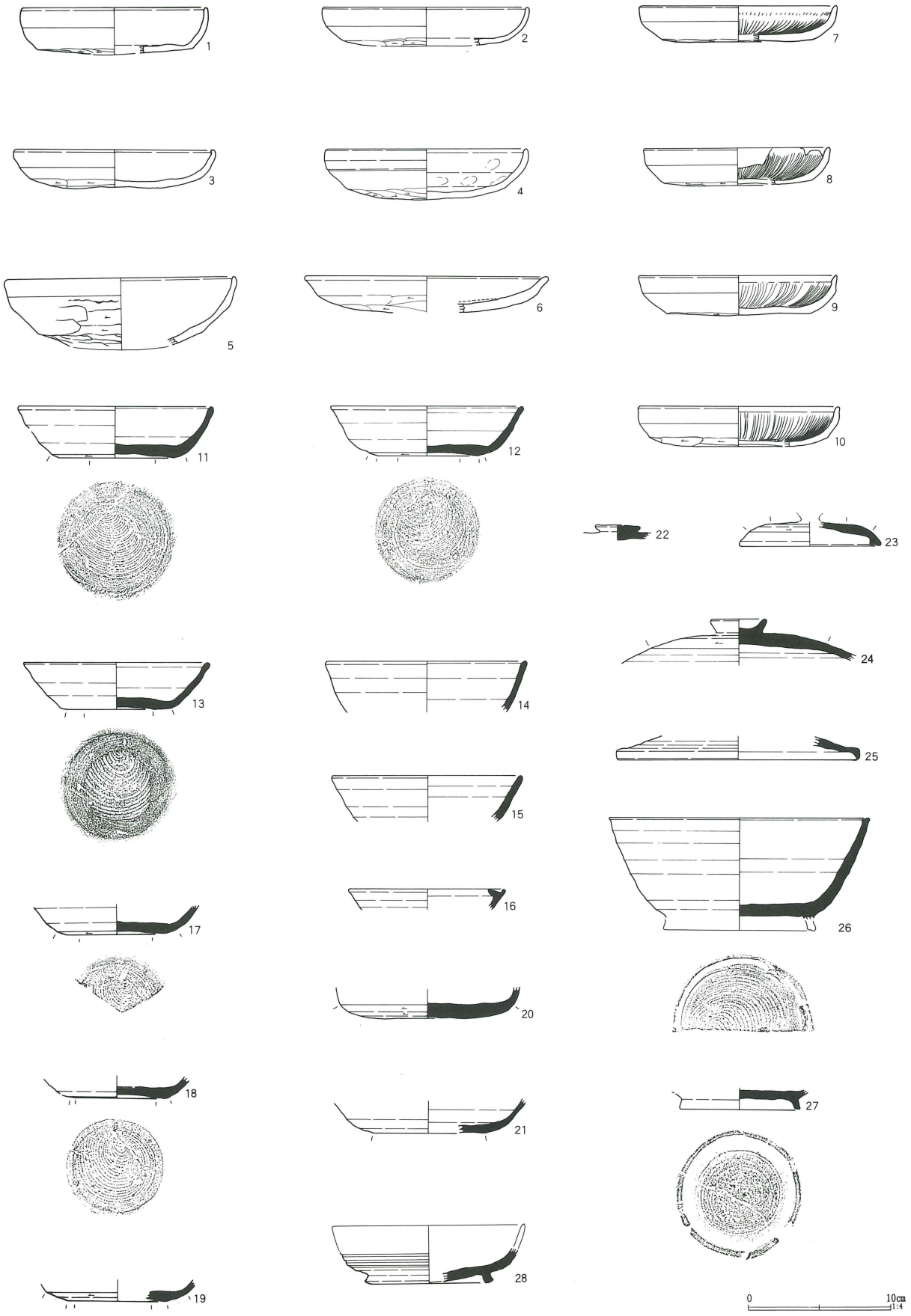
Ａ区第47号住居跡（第75図）

第47号住居跡は46・47－11グリッドに位置する。東壁部は町教育委員会によって調査されている。重複遺構との新旧関係は、第48・49号住居跡を切り、第42・44号住居跡に切られていた。また、第５号溝跡が覆土上層を南北に貫通している。

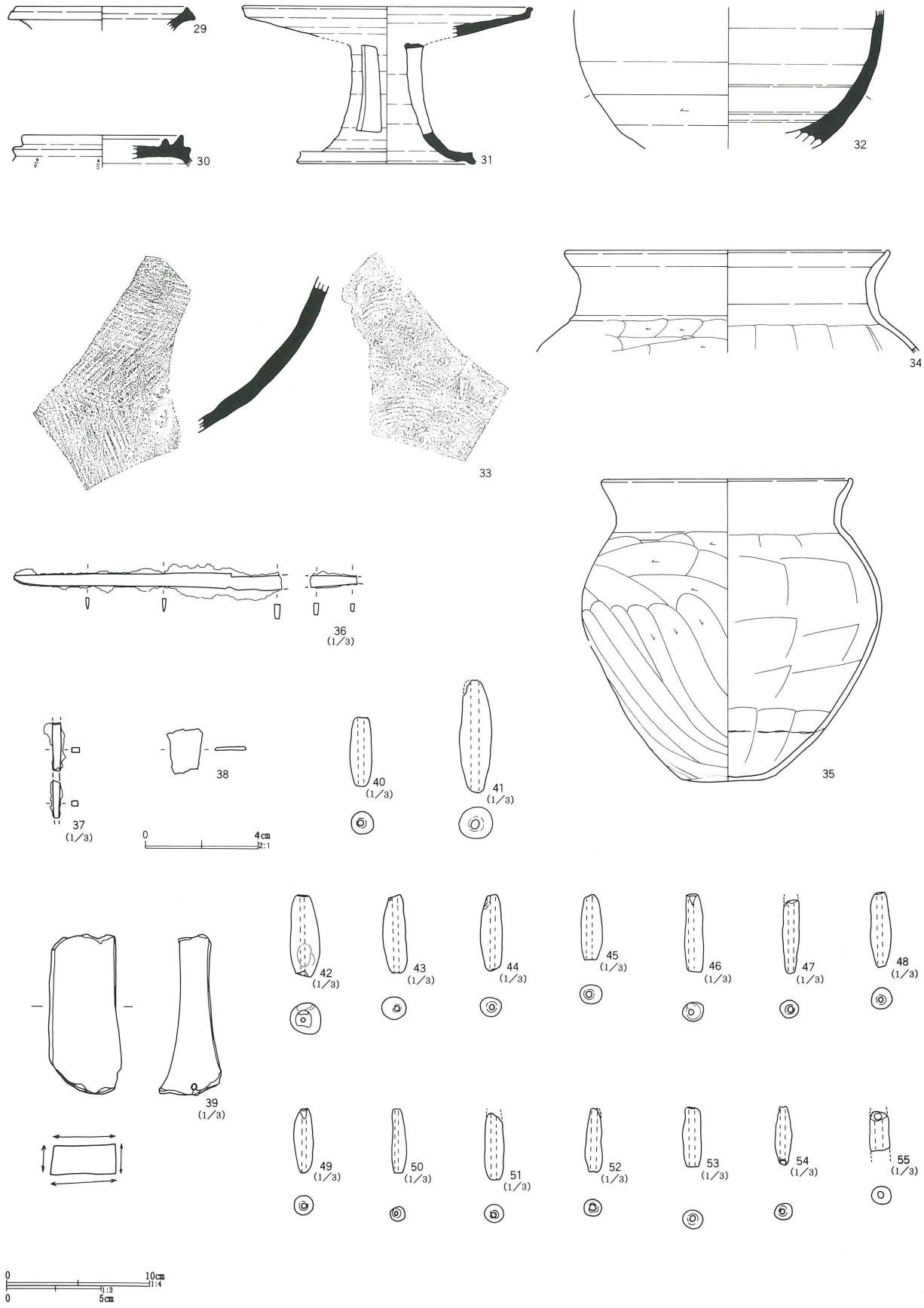
平面形は長方形と推定される。残存規模は長軸長5.46ｍ、短軸長4.20ｍ、深さ0.42ｍである。主軸方位はＮ－５°－Ｅを指す。

床面は第49号住居跡上にあるため、部分的に陥没しており、一定しない。西壁部は第48号住居跡とほぼ同一レベルで立ち上がりは平面的に確認できなか

第73図　A区第46号住居跡出土遺物(1)



第74図　A区第46号住居跡出土遺物(2)



第34表　A区第46号住居跡出土遺物観察表（第73·74図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	(13.0)	3.3		ＡＤ	A	褐色	15%	№14。覆土上層
2	土師坏	(14.5)	2.7		ＡＢ	A	褐色	25%	№15。覆土上層
3	土師坏	(14.0)	2.7		ＡＢ	B	淡褐色	25%	覆土
4	土師坏	(14.0)	3.6		ＡＢＣ	A	褐色	25%	№34。覆土上層
5	土師椀	(16.0)	4.7		ＡＢＣ	A	明褐色	15%	覆土
6	土師皿	(17.0)	2.5		ＢＣ	B	茶褐色	10%	№6。覆土上層
7	土師暗文坏	(13.8)	2.5		ＢＣＤ	B	赤褐色	30%	№57。覆土下層。内面放射暗文、見込部磨滅
8	土師暗文坏	(13.0)	2.6		Ｂ	A	茶褐色	15%	覆土。内面放射暗文
9	土師暗文坏	13.8	2.8	10.1	ＢＤ	B	茶褐色	90%	№33。覆土下層。内面放射＋螺旋暗文
10	土師暗文坏	(14.0)	2.8		ＢＣ	B	茶褐色	25%	№45。覆土上層。内面放射暗文、見込部磨滅
11	須恵坏	(13.6)	3.7	8.1	Ｄ片	B	灰色	60%	№3。覆土上層。末野産。底部Ｂ3d手法
12	須恵坏	13.6	3.5	7.3	ＢＤ	C	褐色	100%	№12·13。覆土下層。末野産。底部Ｂ3d手法
13	須恵坏	13.0	3.3	7.5	Ｂ針	B	灰色	80%	№10。覆土下層。南比企産。底部Ｂ3b手法
14	須恵坏	(14.0)	3.6		Ｂ針	A	灰色	10%	覆土。南比企産
15	須恵坏	(13.3)	3.3		Ｄ	B	褐色	15%	覆土。末野産
16	須恵坏	(10.8)	1.5		Ｂ	A	灰色	10%	覆土。湖西産。坏Ｈ
17	須恵坏		2.0	(7.0)	ＢＤ	C	濃褐色	25%	覆土。末野産。底部Ｂ3d手法
18	須恵坏		1.6	6.6	Ｂ片	B	灰色	100%	№4＋№5。覆土中層。末野産。底部Ｂ3b手法
19	須恵坏		1.5	(7.0)	Ｄ片	B	淡灰色	20%	№20。覆土上層。末野産。底部Ｂ3d手法
20	須恵坏		2.2	11.4	Ｂ片	B	灰色	25%	№36。覆土中層。末野産。底部Ａ3c手法
21	須恵椀		2.3	(8.0)	針	A	淡灰色	20%	覆土。南比企産。底部回転ヘラケズリ
22	須恵蓋		1.0		Ｂ片	A	濃灰色	100%	覆土。末野産？
23	須恵蓋	(9.7)	1.8		Ｂ片？	A	灰色	10%	覆土。末野産または群馬産か
24	須恵蓋		3.2		片	D	灰褐色	20%	№27。覆土上層。末野産
25	須恵蓋	(17.0)	1.6		Ｂ針	A	青灰色	5%	覆土。南比企産
26	須恵高台椀	(18.2)	7.1		Ｄ片	B	灰色	35%	№29。覆土上層。末野産
27	須恵高台椀		1.4	8.5	ＢＦ片	A	灰色	100%	№28·62。覆土下層。末野産。底部回転ヘラケズリ
28	須恵高台坏		2.4	(8.0)	Ｂ	B	灰白色	10%	覆土。湖西産。やや軟質で、体部に沈線３条巡る
29	須恵長頸瓶	(12.0)	1.6		Ｃ片	B	灰白色	5%	覆土。湖西産
30	須恵円面硯		2.2		Ｂ針	A	明灰色	30%	№30。覆土上層。南比企産
31	須恵高盤	(20.0)	(11.0)	(11.2)	片	D	灰色	35%	№42。覆土下層。末野産。脚部透孔は3孔と思われる.
32	須恵壷		9.6		ＢＣＤ片	D	黒灰色	35%	№9。覆土下層。末野産
33	須恵甕		10.4		ＢＤ	B	灰褐色	80%	№43。覆土下層。末野産。外面平行叩き、内面当具痕擦り消し
34	土師壷	(22.5)	7.1		ＡＢ	A	赤褐色	45%	№38·40。覆土上層
35	土師甕	17.4	20.1	6.6	ＡＢ	A	赤褐色	75%	№59。覆土下層
36	刀子	№44。覆土下層。残長16.6cm。研ぎべり顕著。							
37	不明鉄製品	覆土。残長4.5cm。棒状。							
38	不明鉄片	覆土。縦1.5cm。横1.2cm。厚さ0.1cm							
39	砥石	№32。覆土下層。長さ8.3cm。重さ105g。灰白色。四面とも使用され平滑。側面穿孔あるが貫通しない							
40	土錘	覆土。長さ3.6cm。最大径1.1cm。孔径0.3cm。重さ4.88g。胎土ＢＣ。焼成Ａ。淡褐色。残存100%							
41	土錘	覆土。長さ5.8cm。最大径1.75cm。孔径0.45cm。重さ14.87g。胎土ＡＢＤ。焼成Ａ。褐色。残存95%							
42	土錘	覆土。長さ4.3cm。最大径1.55cm。孔径0.2cm。重さ10.5g。胎土ＢＣ。焼成Ｂ。褐色。残存ほぼ100%							
43	土錘	覆土。長さ4.1cm。最大径1.2cm。孔径0.3cm。重さ5.93g。胎土ＡＢＣ。焼成Ｂ。黒灰色。残存ほぼ100%							
44	土錘	覆土。長さ4.0cm。最大径1.1cm。孔径0.25cm。重さ5.16g。胎土ＢＤ。焼成Ａ。褐色。残存100%							
45	土錘	覆土。長さ3.4cm。最大径1.1cm。孔径0.3cm。重さ3.9g。胎土ＢＣ。焼成Ｂ。黒色。残存ほぼ100%							
46	土錘	覆土。長さ4.1cm。最大径1.05cm。孔径0.3cm。重さ4.13g。胎土ＢＣ。焼成Ａ。褐色。残存95%							
47	土錘	覆土。長さ3.9cm。最大径0.95cm。孔径0.3cm。重さ3.27g。胎土ＢＣ。焼成Ｂ。黒灰色。残存95%							
48	土錘	覆土。長さ3.9cm。最大径1.1cm。孔径0.25cm。重さ4.26g。胎土ＢＣＤ。焼成Ａ。淡褐色。残存100%							
49	土錘	覆土。長さ3.3cm。最大径1.0cm。孔径0.2cm。重さ3.06g。胎土ＢＣ。焼成Ｂ。黒灰色。残存ほぼ100%							
50	土錘	覆土。長さ3.4cm。最大径0.8cm。孔径0.2cm。重さ2.01g。胎土BC。焼成B。茶褐色。残存100%							
51	土錘	覆土。長さ3.4cm。最大径1.0cm。孔径0.3cm。重さ3.42g。胎土ＢＣ。焼成Ｂ。黒灰色。残存95%							
52	土錘	覆土。長さ3.3cm。最大径0.9cm。孔径0.3cm。重さ2.08g。胎土ＢＣ。焼成Ｂ。褐色。残存95%							
53	土錘	覆土。長さ3.1cm。最大径1.05cm。孔径0.3cm。重さ3.17g。胎土ＢＣ。焼成Ａ。褐色。残存100%							

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
54	土錘	覆土。長さ3.05cm。最大径0.9cm。孔径0.3cm。重さ1.75g。胎土ＢＣ。焼成Ａ。褐色。残存ほぼ100%							
55	土錘	覆土。長さ2.1cm。最大径1.0cm。孔径0.35cm。重さ2.31g。胎土ＢＣ。焼成Ｂ。黄褐色。残存ほぼ100%							

った。埋土は黒褐色土を基調としており、特に埋め戻されたような痕跡は認められなかった。

カマドは北壁の東端に設置されていた。燃焼部は壁外に掘り込まれ、先端は急角度で立ち上がる。側壁上部は強く被熱していた。袖はあまりしっかりしたものではないが、灰褐色粘質土を積み上げて構築されていた。第１・２層が天井部崩落土、第３層が灰層、第４・５層が掘り方埋土である。底面（火床面）上にはほぼ完形の土師器甕が倒立状態で遺存していた。

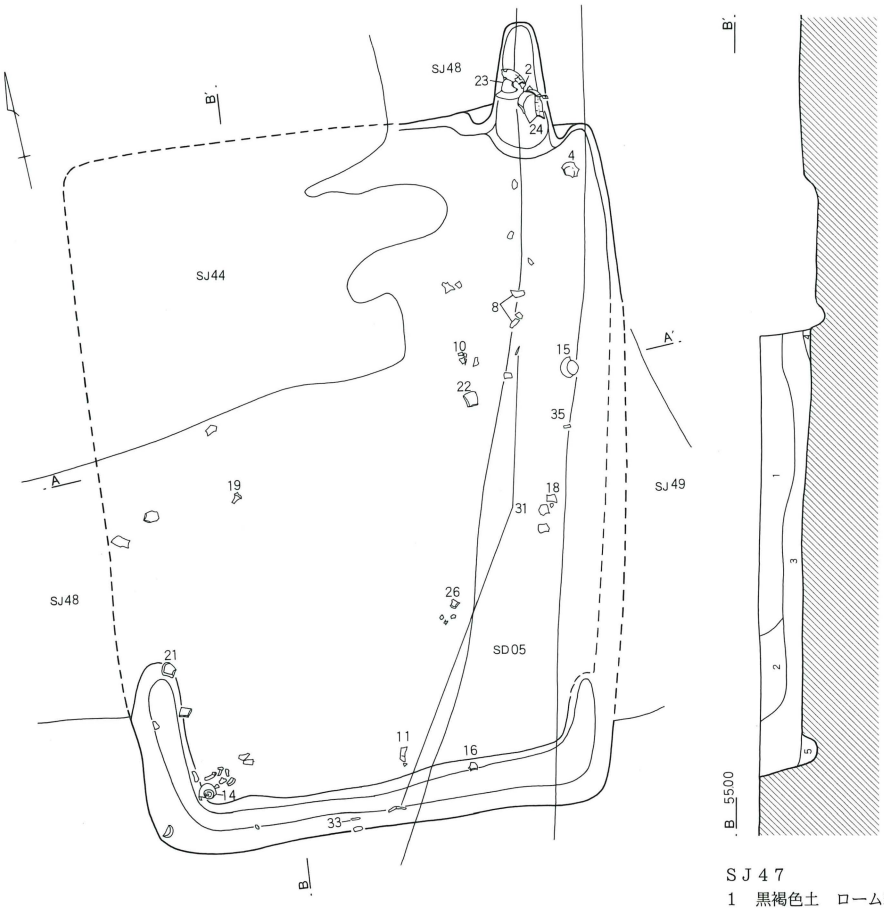
ピットは検出されなかった。壁溝は南壁部に検出されたが、あまり明確とはいいがたい。

出土遺物は土師器坏・暗文坏・皿・甕・鉢・台付甕、ミニチュア土器、須恵器坏・蓋・長頸瓶・甕、鉄製品がある（第76・77図）。全体的に床面よりも浮いた遺物が多い。14の須恵器坏は南西コーナー部の

第35表　Ａ区第47号住居跡出土遺物観察表（第76・77図）

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	残存	備　考
1	土師坏	10.2	2.7		ＡＢＣ	Ａ	褐色	20%	覆土
2	土師坏	(12.5)	2.9		ＡＢＣＤ	Ａ	淡褐色	20%	カマドNo.17
3	土師坏	(13.6)	3.2		ＡＢＣ	Ａ	褐色	30%	覆土。内面指押圧痕
4	土師坏	12.3	3.1		ＡＢＣＤ	Ａ	褐色	60%	No.40。覆土下層
5	土師坏	(13.4)	3.4		ＡＢＣ	Ａ	淡褐色	15%	覆土
6	土師皿	(16.8)	3.0		ＡＢＣ	Ａ	明褐色	5%	覆土
7	土師暗文坏	(14.8)	3.1		ＡＢＣＤ	Ａ	褐色	25%	覆土。内面放射暗文
8	土師暗文坏	13.0	2.8		ＡＢＣＤ	Ａ	褐色	55%	No.5＋No.7＋カマド。内面放射暗文＋ラセン暗文
9	土師暗文坏	(14.0)	3.0		Ｇ	Ａ	明褐色	15%	覆土。内面放射暗文
10	土師暗文坏	(12.6)	3.7		ＡＨ	Ａ	明褐色	15%	No.11。覆土中層。内面放射暗文
11	土師暗文坏	16.4	4.4		ＡＢＣＤ	Ａ	明褐色	20%	No.13。覆土中層
12	須恵蓋		1.2		ＢＣＤ針	Ａ	灰色	80%	覆土。南比企産。つまみ径4cm
13	須恵蓋	(16.7)	2.5		ＢＣ片	Ｂ	灰白色	5%	覆土。末野産
14	須恵坏	13.8	3.6	7.7	ＢＣＥ	Ａ	灰色	70%	No.5。床面。末野産。底部３c手法
15	須恵坏	13.3	3.3	7.2	ＢＥ針	Ａ	灰色	65%	No.24。覆土中層。南比企産。底部Ｂ3b手法
16	須恵坏	(14.2)	3.0	9.4	ＢＣ針	Ｂ	灰白色	30%	No.12。覆土下層。南比企産。底部３ａ手法
17	須恵坏	(16.0)	3.9		ＢＣＥ	Ｂ	灰色	5%	覆土。末野産。底部回転ヘラケズリ
18	須恵坏		1.2	9.2	ＢＣＥ針	Ｂ	茶褐色	25%	No.22。覆土下層。南比企産。底部３a手法
19	須恵坏？		1.7	(8.8)	ＢＣＤＥ	Ａ	灰黒色	30%	No.28。覆土下層。産地不明（群馬？）底部Ａ3c手法
20	須恵長頸壷		7.4		ＢＣＥ	Ａ	灰色	20%	覆土。秋間産？
21	須恵甕		10.2	(14.2)	ＢＣＥ片	Ａ	暗灰色	25%	No.3。覆土中層。末野産。胴部下端＋底部ケズリ
22	須恵甕				ＢＣＥ	Ａ	灰色		No.25。覆土上層。末野産
23	土師甕	21.3	28.0	4.8	ＡＢＣＤ	Ａ	明褐色	95%	カマドNo.19
24	土師甕	20.0	6.6		ＡＢＣＤ	Ａ	褐色	80%	カマドNo.15、No.16
25	土師甕		8.9	(7.0)	ＡＢＣＥ	Ａ	褐色	15%	覆土
26	土師甕		3.5	4.7	ＡＢＣＤ	Ａ	褐色	50%	No.18。覆土下層
27	土師台付甕？	(10.6)	3.3		ＡＢＣＤ	Ｂ	褐色	10%	覆土
28	土師台付甕		3.4		ＡＢＣＤ	Ｂ	褐色	70%	覆土
29	土師台付甕		2.0	(11.0)	ＢＣ	Ａ	暗褐色	25%	覆土
30	土師ﾐﾆﾁｭｱ	3.8	2.9		ＡＢＣ	Ａ	淡褐色	25%	カマド
31	刀子	No.8・11。覆土上層。残長16.3cm。接合しない同一個体。							
32	刀子	覆土。残長6.5cm。柄部。木質付着							
33	刀子？	No.9。覆土中層。残長4.5cm。刀子刃部片か							
34	釘	覆土。残長2.7cm。							
35	鉄塊	No.23。覆土下層。不明品。長さ1.6cm。幅3.5cm。厚さ1.8cm							

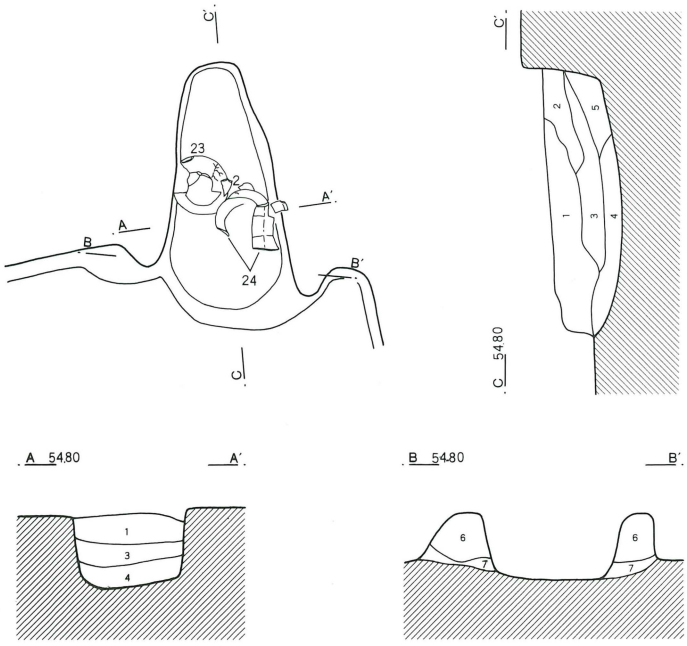
第75図　A区第47号住居跡



ＳＪ４７

1　黒褐色土　ローム粒子・砂粒混入。焼土粒子・炭化物粒子微量
2　黒褐色土　ローム粒子・砂粒混入。焼土粒子・炭化物粒子微量
　　暗褐色土のブロック混入
3　黒褐色土　焼土粒子・炭化物粒子・ロームブロック少量
4　黒色土　　焼土粒子・炭化物粒子少量。ローム粒子少量
5　黒褐色土　壁溝フク土・ロームブロック混入

0　2 m　1:60



カマド

1　褐色土　　焼土粒子多量
2　褐色土　　焼土ブロック少量
3　黒褐色土　灰・炭化物・焼土粒子混入（灰層）
4　褐色土　　焼土少量
5　暗褐色土
6　灰褐色粘質土　焼土粒子・ローム粒子少量
7　灰褐色粘質土　暗褐色土・ローム粒子多量

0　1 m　1:30